

山梨県中央道埋蔵文化財  
包蔵地発掘調査報告書  
— 北巨摩郡小淵沢町地内 —

1974.3

日本道路公団東京建設局  
山梨県教育委員会

## 序 文

中央道蘿崎～小渕沢間の埋蔵文化財発掘調査は、昭和44年3月に長坂町東前田遺跡を、昭和47年度は小渕沢町中原遺跡、上平出遺跡、昭和48年度は長坂町下ノリ平遺跡、葛原、西下屋敷遺跡、柳坪遺跡、頭無遺跡、明野村下反保、西田遺跡他の調査を実施してまいりました。この報告書は昭和47年度実施のもので、1年おくれとなりましたが、学術、学習面で広く活用されることを望むものです。

小渕沢地区中原遺跡、上平出遺跡は八ヶ岳山麓の標高950m前後の舌状丘陵台地上にありまして、近くには清冽な湧水が湧き、正面に南アルプス甲斐駒ヶ岳や鳳凰三山の雄姿がまのあたりに迫る風光明媚な土地です。このようなところに、今を去る4、5千年前の縄文人が獸を捕え、木の実を採集して集落をなし、華麗な文化を榮えさせたことは郷土文化の誇りでもあります。また、長い期間をおいて平安時代の人々が堅穴住居に住み、鉄製の鋤や鎌を手に持つて原始林を切り開いてきた姿を想う時、私達現代に生きる者が勇気づけられ、はげまされる気がいたします。

中原遺跡の調査は昭和47年11月18日から12月27日までの約40日間、上平出遺跡は47年12月11日～26日、48年3月11日～31日の35日間にわたり行なわれました。高地の風雪にも労をおしむことなく調査を進めていただきました調査員、補助員の学生の皆様、地元婦人会の皆様に厚く感謝申し上げますとともに、小渕沢町教育委員会ならびに地元関係者のご協力に御礼申し上げます。

昭和49年3月

山梨県教育委員会教育長

清 水 林 邑

## 例　　言

1. 本書は昭和47年度に日本道路公団と山梨県教育委員会との委託契約に基づいた発掘調査の報告書である。
2. 本書は昭和47年度に実施した発掘調査を48年度に報告するものであるが、遺構・遺物について充分検討、研究する時間がとれなかつた為、住居内出土遺物で図上復元できるものに重点をおいた。
3. 遺構関係の図面は前野・末木が製図した。
4. 土器洗浄、ナンバリングは日本大学先史学研究会員が行ない、実測・写真撮影は末木が行なつた。
5. 編集は末木が行ない、遺構について担当者から提出された原稿を編集者が体裁を整え、担当者名をそれぞれ文末に記した。その他の執筆は末木による。
6. 図版中遺物に付されたNoは挿図中の遺物Noと同じである。
7. 住居発掘経過はそれぞれの日誌を参照されたい。
8. 遺物及び実測図は山梨県教育委員会に保管してある。

## 目 次

I 調査状況 .....	1
1. 調査にいたるまで .....	1
a 調査組織 .....	1
2. 調査の実施と経過 .....	2
a 中原遺跡調査日誌 .....	2
b 上平出遺跡調査日誌 .....	11
II 遺跡の概況 .....	17
1. 遺跡周辺の環境 .....	17
2. 中原遺跡の概況 .....	17
a 遺構 .....	18
b 遺物 .....	37
3. 上平出遺跡の概況 .....	47
a 遺構 .....	48
b 遺物 .....	61
III まとめ .....	74

## 挿 図 目 次

1.	中原、上平出遺跡地形図	19
2.	中原遺跡全体図	21
3.	中原遺跡 3 J・10 J 住居平面図	26
4.	" 4 J 住居平面図	27
5.	" 7 J "	28
6.	" 5 J "	28
7.	" 8 J・12 J "	29
8.	" 13 J "	30
9.	" 9 J・11 J "	30
10.	" 1 H "	31
11.	" 2 H "	32
12.	" 1 H カマド実測図	33
13.	" 2 H "	33
14.	" 6 H 住居平面図	34
15.	" 配石遺構 "	35
16.	" 土塙実測図	35
17.	" "	36
18.	" 満セクション図	36
19.	" 3 J・4 J 住居出土遺物	40
20.	" 5 J・7 J 住居出土遺物	41
21.	" 8 J・9 J 住居・D 2 土塙出土遺物	42
22.	" 10 J・12 J 住居・土塙出土遺物	43
23.	" B 1 土塙出土遺物	44
24.	" 1 H・2 H・6 H 住居出土遺物	45
25.	" 6 H 住居出土遺物	46
26.	上平出遺跡全体図	47
27.	" 7 J 住居平面図	53
28.	" 1 H 住居平面図	54
29.	" 10 J 住居炉実測図	54
30.	" 2 H 住居平面図	55
31.	" 6 J・3 H "	56
32.	" 4 H "	57

33.	上平出遺跡 5 H・9 H住居平面図	58
34.	〃 高床造構柱穴セクション図	58
35.	8 H住居平面図	59
36.	土壤及び配石造構実測図	60
37.	6 J・7 J住居及び上塙出土遺物	66
38.	7 J住居出土遺物	67
39.	土壤出土遺物	68
40.	〃	69
41.	1 H・2 H・3 H住居出土遺物	70
42.	3 H・4 H 〃	71
43.	5 H 〃	72
44.	8 H・9 H 〃	73

## 図 版 目 次

國版 1	1.	中原遺跡全景
	2.	1 H住居址
2	3.	2 H "
	4.	3 J "
3	5.	4 J "
	6.	5 J "
4	7.	6 H "
	8.	8 J "
5	9.	10 J "
	10.	13 J "
6	11.	7 J住居石調炉
	12.	2 H住居石組カマド
7	18.	5 J住居埋甕
	14.	配石造構
8	15.	中原遺跡出土遺物

9	16.	中原遺跡出土遺物
10	17.	上平出遺跡全景
	18.	1 H 住居址
11	19.	2 H "
	20.	3 H・6 J 住居址
12	21.	4 H "
	22.	5 H・9 H "
13	23.	7 J "
	24.	8 H "
14	25.	配石造構
	26.	14号土坑出土遺物
15	27.	スキ頭出土状態
	28.	カマ出土状態
16	29.	5 H 住居カマド断面
	30.	" 内灰釉陶器出土状態
	31.	8 H 住居カマド断面
17	32.	9 H 住居カマド内灰釉陶器出土状態
	33.	平出湧水
	34.	調査参加者
18	35.	上平出遺跡出土遺物
19	36.	"
20	37.	"
21	38.	"
22	39.	"
23	40.	"

# I 調査状況

## 1 調査に至るまでの経過

46. 8. 4 中央道塙崎～小沢沢間の遺跡所在地の報告を行なう。
47. 6. 26 公団より昭和47年度調査地区として、小沢沢町中原、上平出遺跡の二ヶ所について発掘調査許可の協議を受ける。
47. 7. 14 中原、上平出遺跡発掘計画書、行程表及び見積書を提出する。
47. 8. 8 公団より委託契約書が送付される。
47. 9. 10 文化庁に発掘届を提出する。
47. 9. 20 委託契約を締結し、1部公団に返送する。
47. 10. 2 文化庁より中原遺跡発掘調査許可
47. 10. 19 文化庁より上平出遺跡発掘調査許可
47. 11. 18 中原遺跡現地にて紙入式
- ~12. 27 調査開始～終了
47. 12. 11～12. 26 上平出第一次調査
48. 3. 11～3. 31 ノ 第二次調査

### a 調査組織（中原・上平出）

受託者 山梨県教育委員会教育長清水林邑

団長 井出佐重（山梨県遺跡調査団長）

担当者 谷口一太（日本考古学協会員）

調査員 末木 健（県文化課文化財主事）

補助員 岡崎完樹・三浦和信・伊藤恒彦・浦野保範・宮崎隆博・茅野俊彦・古峰孝夫・蛭間真一・金箱文夫・山路恭之助・金井玉枝・鈴木茂代・山谷牧子・天野見四郎・宮下和子・鈴木直行・米井富美子・佐藤正・藤本博樹・藤井真紀子・岡田保彦・佐久間則子・香月利文・斎藤悟郎・加藤直人・金沢章・高綱博文・藤巻正信・川野和彦・中井節子（日本大学、他）・小松良行・宮沢謙市・平田敦子（帝京高校）

作業員 白川かのえ・中山良子・宮沢光子・佐藤嘉代・進藤小秀・進藤トヨ・進藤勝子・進藤朝子・進藤かほる・清水あさ子・清水たつ子・平出きぬ・佐藤公子・五味ひな子・山田三枝子・中山道子・中山よしの・清水くに代・進藤きりえ・進藤百々恵・杉山もと子・中山みち子・加室千代志・中山せん・安藤美江・坂木あつ子・坂本重子・坂本春代・中村光子・小林ちかえ・進藤かね・茅野みさを・浅川のりえ・今井くらえ・今井あい・小林てる子・小林うら子・五味光子・小松のり子・名取てる子・仁科喜美子・小林ちかえ・仁科たけ子・坂本きよの・中島しま子・宮沢トシ・小林恒子・進藤しげよ・藤原広男・（この他代理として参加していただいた多くの方がいる。）

事務局 清水 林邑（県教育長）

鈴木 孝二（県社会教育課長）

望月 恵夫（県社会教育課長補佐）  
藤原 正治（県社会教育課庶務係長）  
波木井市郎（〃 文化財係長）  
森 和敏（〃 文化財主事）  
小林 茂一（小渕沢町教育長）  
仁科 雅（〃 教育委員会職員）

## 2 調査の実施と経過

### a 中原遺跡調査日誌

47.11.18 (晴)

午前10時30分、現地小渕沢町中原遺跡中央道路線内に於て鋸入式を行なう。出席者小渕沢町長、町議員、町教育委員会教育長、山梨県遺跡調査団長、県社会教育課長、町教育委員会職員、県社会教育課職員、地元婦人会、地元区長。それぞれのあいさつの後、路線内にあるダイコン、トウモロコシ等の地上耕作物を刈り取り清掃を行なう。台地中央のSTA10+0からSTA9+40までをA地区とし、STA10+0にトランシットを設置し、STA9+80を準視し、これを基軸として北側24m、西20m内に2mのグリッドを設定した。これをA1地区とした。発掘は原則として市松模様で掘り下げるにとどめられたが、表土の厚さや状態から見て遺構の可能性が無い場合は4m間隔とした。A1地区は4m間隔で掘つたが、表土は10~20cmでローム層となり、表土より磨滅した縄文時代の破片が少量出土したのみである。

47.11.19 (晴)

作業開始9時00分、A1地区の南側にA2区を設定する。22m×20mの発掘区を4m間隔に掘るが、土層遺物の状態はA1区と同様であり、グリッド名を南よりアルファベットでCからZまでつけ、それ以降A'B'とした。Cからとしたのは、遺構発見の場合拡張の必要を考えたからである。次にA3区をSTA9+80~STA9+40の間に38m×42mのグリッドを設定し、北側より発掘を開始する。モロコシ畑とダイコン畑の地境の下より幅約8m深さ1mの溝が発見され、暗褐色土層の内には20cm位の殻や打製石斧、凹石、土器片、陶器片が発見され、あたかもブルドーザーか何かで溝の中に押し流された様であった。また、F17のローム直上に縄文土器底部と焼土が発見されたが、周囲を精査した結果、住居址にはならなかつた。柱穴らしいものが全く発見されなかつたのである。E15、16グリッドから黒色腐蝕上で礫を持つ落込みが見られ、これを拡張し、D15、16の拡張発掘を行なう。プランが方形となり、覆土から土器片が出土しているので、これの観察から平安時代頃の住居と推定した。中央部グリッドから直徑1mの土塗が発掘され、黒褐色の覆土から石器、黒曜石が出土した。これをA1土壤とした。

47.11.20 (晴)

A地区で発見された土師の住居を1H住居とし、セクションベルト東西、南北の2本を残し、作塔のプランを出して写真を撮る。住居内の覆土は表土と層然としており、表土が褐色土に対し、覆土は黒色有機質土である。しかしその覆土も北側偶の石組部のみが真黒で遺物を含まず、南側偶のカマド周辺は焼土が僅かに含まれ遺物も内黒の杯破片が出土している。プランはほぼ正方形を呈していると考えられたが、東壁を溝によつて切られ、南壁はわずかに残るが、路線内ぎりぎりであつた。B地区

を設定する。STA10+0から10+60の間をB地区とし、最初にSTA10+20~10+40のセンターラインより下側に3.8m×2.0mの発掘区をもうけて、4mおきに掘り下げたところ、モロコシ畠の西半分に集中して（グリッドの10~17位まで）黒色の落ち込みが発見された。初めは、黒色土を掘りすぎ、床面まで削つてしまつたので、至急拭振をしたところ正方形プランの住居が発見され、これを2号住居とした。B地区では最も南側の住居で、カマドを東壁にもち、石組によるものである。更にその北東に縄文中期末葉のハの字文を施した土器片が一括して発見され、プラン円形の住居址が把握されたのでこれを3号とした。また、2号Hと3号Jの間に、円形の住居があり、遺物は覆土内より僅かであるが発見され炉と思われるニの字の石組が発見されたので、これを4号住居とする。

#### 47. 11. 21 (雨)

雨天のため現地作業を休止し、室内で遺物・図面等の整理を行なう。

#### 47. 11. 22 (晴)

1H住居の掘り下げを行なう。西壁5m、北壁4.5mを計り、東壁が溝で切られて不明であるが、ほぼ5m位の方形と考えられ、周溝をもち、その幅は1.5cm位で、北壁下が最も明瞭であるが、西北隅は真黒の土と配石が床面を切り込み、周溝をも切り取られている（注：しかしながら、これがはたして住居に伴うものか不明である）。北壁周溝中央部に磨製石斧が発見される。完形品である。また、カマドは石組カマドで住居中央部床面まで焼土が広がり、カマド部は比較的焼土が薄い様に思われた。また、南壁カマド西側は周溝が不明瞭であり、中央部が座かに高くなっている様である。カマド周辺は遺物が多く、壊破片、坏等であり、その全てが破片となつてゐる。住穴は比較的住居中心部に近く、2本はありそうである。2H住居のプランにかかるセクションベルト2本を残し、住居址内を発掘する。1H住居よりもやや小さめで、約4mの方形を呈する。写真撮影後、この掘り下げを行ない床面まで出す。床面は良好で、周溝がめぐり、カマドは東壁中央よりやや南側に偏して、石組で設置されている。遺物は破片で、内側の黒い土師坏や壊破片がほとんどである。住居内には蒸が南側中央に散乱してあり、カマド焼土は厚く良好な状態である。このカマドの焼土は床面中央部まで薄く広がっている。B2区を設定する。B2区は、STA10+0~10+20の間の南側で2.0m×1.4mである。A1区と同様、表土がわづかで1.0~1.5cmでローム層となる。上段1個を発見した。黒色の1m位の落ち込みに疊が含まれ、焼土も若干混入している。また、B3区を設定する。B1区の北側で3.8m×1.6mである。発掘は明日とした。

#### 47. 11. 23 (晴)

2H住居の床面清掃作業を行なう。床面には部分的にビットがある様で、柱穴と思われるものではない。終了後写真撮影を行ない、測量実測までの期間保存する為、住居をおおう。3号住居はほぼ円形であり、セクションベルト、東西・南北の2本を残し、住居内の掘り下げを行なう。南北のセクションベルト下に石圓が発見されるが、覆土内の遺物について西側を除いて他の部分ではほとんど出土を見ていない。西側については、プラン想定線をはずれて縄文中期末葉土器片が多量に黒色土内に発見され、疊も多い。土器の分布だけ見ると住居覆土の投げ棄て状態と類似しており、更にもう一つの住居があつたのか、あるいは土續なのか不明であるが、ローム面が床面的であり、壁を残さない住居址の可能性も考えられた。3J住居の周溝は部分的で、南壁から東壁にかけての一部と、北壁から西壁にかけての一部である。3号J住居の南西、2方に切られた4号住居址を掘り下げる。遺物は

ほとんどなく、床面に中期末葉の土器片が1片あるのみであった。炉は、方形石囲炉であったものが、東と西の石を引き抜かれており、炉は中央北側に片寄つている。南北とも一枚の石で、南側は自然縫隙を利用したもので、北側は切り石で造られており、4個の石で造られていたものであろう。柱穴は4本あるらしく、柱穴の外側、壁との間に柱穴につづいて細長い溝をそれぞれ持つようであり、入口部南にも溝が部分的に存在する。周溝は存在しない様である。5号住居址がB3区から発見される。ほとんど壁がない状態で、石囲炉の発見で住居址と判明した位である。住居南に埋甕があり口辺を上にしている。柱穴、周溝についてはまだ不明である。B4区をB3区北側に設定した。20m×16mで表土が浅く、北側より土師住居が発見されたので、6H住居とする。幅5~60cmの溝によつて西側を切られ、この溝は5J住居の東側に続いている。6H住居は方形プランの土師住居である。

47. 11. 24

6号住居址内のセクションベルトを残し覆土を掘り下げる。傾斜地であるから壁は八ヶ岳側は高く、甲斐駒ヶ岳側はローム面とほぼ同一となりプランが明確ではない。カマドは東に位置しており、やや中央寄りにある。石組と考えられるが、破壊されている。住居には周溝がめぐらされており、カマド部と南側、及び後世の溝に擾乱を受けた部分については周溝はないが、遺物はカマド周辺に散乱している。西側山林のセントラーライン南側を切り開く。台地中央部と山林部は幅4m深さ1m位の溝によつて区切られており、中央よりやや高くなっている。平坦部は20m余で、西は道路があつてすぐ急な谷となつていて。【zumisawa】と呼ばれている。これをD地区とした。

47.11.25 (晴時々雲り後雪)

B3区西側にB5区12m×18mを設定する。この部分はカラ松と牧草地であるが、表土は20cm位で遺構ではなく、モロコシ畑と牧草との境の下に幅2m深さ50cmの溝があり、後世のものと思われた。D地区に12m×28mの東西に長い発掘区を設定し、早速これを発掘にとりかかつた。表土は約20cm位で、北側は浅く、南側は比較的深いものである。下からC~H、東より1~14のNをふり、それぞれC1G、D2Gと呼んだ。C4より繩文土器底部が一部出土し、C3より石囲炉の一部が発掘されたので、これを7J住居址として、南側へそれぞれ1グリッド新たに設定し、これを発掘した。また沢寄りにF10付近で円形住居のプランがとらえられ、これを拡張した。8号住居となる。覆土は7・8住居とも黒褐色で、遺物は少なく、遺物が逆三角堆土上にある様な吹上パターン、あるいは住居内に豊富な石器や完形品が残されている井戸尻パターンと遺物量の点で異なるものである。7J住居西側で、ローム面よりも浮いた石囲炉石組があり、方形であつただろうが、すでに南・西の各辺の炉石が抜き取られ、L字形に残つていていた。焼土はわずかで、ローム面が薄く焼けている程度であり、ローム面が南北への傾斜をもつていて、黒色土層中に造られた住居址ではなかつたろうか。この住居のプランを確認する為、C8~10を拡張発掘したところ、直径10~20cmの朱石址が焼土を伴つて発見され、打製石斧が浮いて発見された。この層は黒褐色で住居内覆土と似ているので、更にBグリッドを設け、拡張した。

47. 11. 27 (晴)

別荘北側の桑畠をC地区とし、これを発掘する為、桑の株を切る。このC地区は台地東縁で、中央部よりも約1m程高くなつておらず、地形図でみると中央のモロコシ畑と溝で区切られている。C地区はSTA10+60~STA11+0の40m間である。A地区の1H住居址の測量実測に着手する。東西・南北のセクションを実測し、これを撤去する。表土は褐色土で、覆土は焼土を僅かに含む

黒褐色土で、2層に分けることができた。遺物はほとんど床面に近いものばかりであり、その床面もすべてがローム面でなく、ピットが幾つか住居址内に存在する。D地区は昨日の7号及び8号のプラン全体を出す作業を行なう。7号については、中央に南北セクション1本を残し、プラン確認作業を行なうが、南に行くに従つて広がる様になり、最大幅8m余りにもなるので、重複か又は、土壌が近接しているのか不明であつたので、これの掘り下げを行なう。住居南側に大きなケヤキの根があり、又山林というハンディの為、プランが相当擾乱されているのを承知していなければならなくなつた。掘り下げると覆土は浅く北側壁でも約10cm内外しかなく、従つて南側はほとんど把握するのが困難と考えられたので、Aグリッドまでとした。長方形石圓炉は完全で、セクションベルトの真下に半分入つている。石圓炉はローム床面に置かれた感じで、掘り込められていた様子はない。遺物は土器底部が炉の北側から浮いて出土し、ケヤキの根の近くや下から比較的土器片が出土している。これのすぐ西側に土壙があり、縄文中期上器片が2~3片出土している。内側にすべり込んだ様であつた。主としてセクションベルト東側の発掘を行なつた。8号については、住居プランの発掘に1日かかる。中央部より土器底部がふせられて出土しているが、前述した様に遺物は比較的少なく、西側壁近くに上器片及び黒曜石片が出土している。この住居の南には黒色の落ち込みがあり、ピットかもしれない。8号住居北壁にかかるセクションベルト(東西)東側約1mのところに、埋甕があり、焼土を伴うので精査したところ、二重に土器が埋め込まれた埋甕であることが分つた。時期は判然としないが、中期のものであると、この時点では判断しておいた。しかし周囲に大きな掘り込みがあり、その性格は実測と平行して追求することとした。また、7J住居西側のL字の炉石組部と、集石焼土部を更に拡張し、写真をとる。

#### 47. 11. 27 (晴のち曇り時々雪)

D地区センター坑北側の山林について、旧土地所有者が業者を連れて来て、立木の撤去を行う。7号住居西半分の掘り下げを行う。北壁寄りの住居内落ち込み部に縄文土器底部大破片が出土し、西側壁は黒色土を覆上にもつピットにより切られている。また、中央南西よりに小形磨製石斧が刀部を上にして発見された。土壙の覆土は黒色で柔らかい。8号住居は住居内の掘り下げを完全に行ない、セクションベルト2本を十字に残して、写真をとり、実測までビニール等をかけ保存する。南側壁は地形の関係でほとんど残つてはいなかつた。L字形石圓炉と別の集石焼土部は一応9号住居とし、これの清掃を行なう。両方ともプランが不明で、柱穴で把握するより他はないが、土壤等の重複も多分に考えられるので測量・実測と並行させて行なつた方が確実と考えた。A地区の1号H住居を清掃し写真撮影を行なう。住居北西コーナーは前述した様に黒色土と石組があり、柔らかいところから後世のものと考えたが、壁を全く切つてないこともあり、まだ若干の観察が必要である。縄文時代の磨製石斧は周溝底部に水平に置かれており、流れ込みの可能性が強い。また、石の落込部東側は床が張られている様であり、中央床面は所々焼土をつきかためたピットが存在する。柱穴は北壁より1.5m離れ、約35cmの深さのものが2本発見されたが、南側は1本もなく、構築方法がどの様になされたものか討論される。B地区2H住居の実測を始め、東西・南北のセクション2本を計り、ベルトを取りはずす。土層は1号住居と同様である。ただ4J住居と層位的なつながりが把握できる様なベルトを残すことができなかつた。

#### 47. 11. 28 (晴)

C地区センターライン南側にグリッドを設定する。10m×20mで2m方眼、また北側に10m

×2.8mを設定し、発掘にかかるがどちらも表土が浅く、地形図で観察された浅い溝は、A地区で掘られた溝に類似した落ち込みが南北の丘陵走向に沿つて掘られているらしい。落ち込み覆土は暗褐色土でロームを切り込んでいる。遺構は無く、遺物は少ない地区である様だが、現在井戸尻考古館にある中原出土の大型ツバ付有孔土器がこの溝の50m位南より出土したと言われるところから、南側の方が遺構が集中しているのは、歴然としている。更に東側にグリッドを設定し市松に掘り下げるが、住居址は発見されず、焼土をもつ土壇が三つ発見された。しかし、このピットは覆土中に焼土があり、黒色覆土が極めて柔らかく、又他のものは焼土の乱れがなく、水平にカットした時円形を呈するものと方形を呈するもので、遺物をも含まないので後世と考えられた。D地区セントーライン北側に2.2m×2.2mのグリッドを設定し、これの発掘にかかる。Q4グリッドあたりから土器や打製石斧が一定程度まとまって出土し、焼土が発見されたので、これをできるかぎり拡張したが壁を抱えることはできなかつた。覆土は黒褐色である。住居址とするなら、9分に近い平面的なものとなるはずである。A地区1H住居の清掃を行ない、住居内ピットの発掘を開始する。ピットは柱穴2本と北西隅ピットを除くと6個あり、1～3が中央で東西に並び、4.5.6.は、3から南西に向いている。1から4までは焼土が認められており、ピットの形状は皿状で、1の焼土はかたくつまつておらず、2.3.4.は比較的柔らかい。土器片が僅かではあるが含まれ、規則性はもたないので焼土と一緒に埋め込まれた様である。また、5.6ピットは焼土が含まれておらず、搅乱の様な状態である。入口部と考えられる南壁中央床面は肉眼で見るに僅かに高くなつておらず、周溝はない。B地区2号住居の各辺は、北37.0cm、南31.0cm、西37.0cmのやや台形の住居で、周溝をもつが、南側中央部のみ7.0～8.0cm周溝が切れている。カマドは東壁中央に近く構築されており、石組であることは述べたが、焼土はよく残り、南東コーナー及び住居中央南側にかけて疎とと一緒に薄く流れてもいる。1H住居と同様に住居床面には灰を詰めた皿状ピットが幾つかある様で、焼土の分布と遺物や疎の分布が同一であり、他は掘文中期木葉の土器片などが若干散布する程度である。4号住居址については、住居址の清掃を行ない写真撮影後柱穴掘りにかかる。プランは円形に近い削張り隅丸方形で、長野県の例からすると曾利期木葉にてぐるプランと考えられる。住居内床面近くから出土した土器片1片の時期が、曾利中葉～末葉にかけてと考えられるのでこの時期にしておきたい。柱穴のあり方は4本柱の様で、主柱穴の外側に細長い溝が部分的につく、南西の1本は2Hに切られている。

#### 47. 11. 29 (晴)

A地区1号住居カマドのセクションラインを設定する。カマドはつぶれており、石は偏平なものを利用している。中央に2枚の石があり、その東には1枚、西には3枚～4枚の石が西側に傾いて倒れている。上から押しつぶされた様である。セクションは、祐石と考えた石と中央の石をかけ、中央2枚を通した。カマドはロームに直接掘り込まれた訳ではなく、浅いピットを掘りその上に石と上で構築した様である。煙道は見られない。B地区2号住居床面を清掃し、平板測量を行なう。4Jは昨日よりの柱穴掘りを行ない、平板測量の準備を行なう。5号住居址に着手する。住居がほとんど平面的であり覆土も薄いのでセクションも充分に実測できないでいたが、北壁のみは約5cm程えられた。炉石は方形に組まれているが北側が抜かれており、石の掘り方はセクションでえられた。セクション実測を行なう。C地区での溝には疎があり、A地区のものより遺物は少ないと、それでも他の表土中に含まれている遺物量より多く、土器片・石器が出土している。疎については北側と南側に1本づつトレンチを入れ、その土層を見た。

#### 47. 11. 30 (晴のち曇り時々雪)

5 J 住居を昨日からひきつづいてセクションベルトを取り除き、清掃してプラン確認と柱穴がしを行なう。床面は乱れており、深さ 8 cm 位、直径 4.5 cm の柱穴が炉の北側に 1 本発見されたのみで、周溝はなく、入口部と考える所に中期末葉のハの字文をつけた深鉢形土器が口辺を上にして発見されている。炉の深さは床面より約 40 cm でロームが焼けているが、炉の中の焼土は薄い。また、この住居の東に幅 60 cm ~ 1 m の浅い溝が南北に走り、これに土壙がかかっている。この土壙の北側縁に凹石が発見されている。1 H 住居址はカマドのセクションを続行する。2 号 H 住居址はカマドの平面図を作成し、住居中央にある焼土のつまつたビットを南北エレベーションと、カマド中央からの東西エレベーションにかけてセクションをとる。ビットは風状で、焼土の詰まり方が 1 号住居の第 1 ビットに以ており、しまりがあつて土器片(甕が多い)が底面に近くある。エレベーションは更に西袖を切るように東壁と平行に設定した。4 J 住居は、平板測量を開始したが、途中で 2 号住居址東の盛土を移動中に未発掘グリッドから上塙内にある埋甕が出土したので、これを同時に平板実測する為、ポイントを移動した。この埋甕は比較的大きな甕で、これに比定される土器は茅野和田遺跡東 1 号住居址の埋甕で、茅野和田遺跡報告書では中期末葉後半としている。この実測は明日とした。5 J 住居では入口部埋甕のセクションをとる。埋甕はほぼ完形で、内部の土はレンズ状の堆積を見せてている。土器内部には黒色タールが付着しており、使用後埋甕として転用したものと考えられる。5 号住居の平板測量を完了する。3 号住居址の測量実測に着手する。プランは円形に近いが、南西部の壁が不明確であり、土壙か柱穴により落ち込んでいる部分と、ローム面がだらだらと住居中央まで入り込んで来ている部分がある。また、4 号との間の西側に中期終末期の土器が一括で散布しているので、ここに住居があつた可能性がある。中間の部分には遺物と疎があり、切り石の炉的な部分もあるので、3 号を清掃してゆく。3 号址の南北セクションのみ実測し、東西セクションは西壁部が周溝的な溝が 2 本走り、しかもそれぞれの床面部には段があつて、セクションに線が含まれているので平板による遺物図作成とあわせて実測することになった。東西セクションベルト西には焼土があり、それと 1 m も離れずに焼けた石が落ち込むビットがある。これが住居となるか、あるいはそうでない場合どの様に解釈できるかが問題となつた。

#### 47. 12. 1 (雪)

作業を中止し、遺物・図面等の整理を行なう。

#### 47. 12. 2 (晴、強風)

1 H 住居のカマドセクションを完了し、1 H 住居の作業を終了した。カマドの右組の下は、中央に深い穴があり、左右に浅い穴があるところから、これが両袖の石を立てた場所で、深い穴は突出の為と火をくべる為であつたかもしれないが、焼け方で薄く納得するに充分ではない。2 H 住居址は先日のセクションに加えて、東西セクションと平行に北側袖石にかかるエレベーションを設定し、東壁に平行に更に 2 本、北壁中央からカマド中央へ斜めに 1 本の計 6 本により、カマドを実測し、これのセクションをとり始めた。また、カマド南の焼土がかたく詰つたビットのセクションをとり始める。これには、カマドセクション 1 本を利用し、もう 1 本を十字にかけた。3 J 住居址は東西セクションを実測し、セクションベルトを撤去する。4 号住居址は平板測量をやり直し、エレベーションをとる。埋甕までは至らず住居内のみである。5 号東の土壙セクション実測を行なうが、溝によつて約半分切られており、覆土はレンズ状の堆積を見せている。更に溝をはさんで、東に大きなビットが発

見され、これの発掘に1日かかる。深さは1m近くあり、径も相当大きい。土壌にそれぞれをつけて、1号を埋蔵の土壌、2号・3号はそれに接しているもの、4号を西側、5号を東側とした。B区4号土壌の縁の凹石はローム掘込部に突きささつた様な状態であつた。

#### 47. 12. 3 (晴)

1H住居のカマド跡を清掃し、写真をとる。2H住居はカマドを切り始め、石を取り上げながら実測を行なう。袖石は1号に比べて原形のまま残されている様子で、向つて右側の板石は内側に傾斜しており、左袖石も内側に傾斜している。どちらの袖石も深く土に差し込まれており、中央に板石が置かれている。3J住居は作業人數の減少の為一時作業を中止し、2号・4号に力を集中する。4J住居は、埋蔵のあるB1号土壌とB2号土壌をかけエレベーションC-C'とした。また、D-D'をC-C'に直角に設定し、E-E'をB3号土壌、F-F'を4号炉の上でC-C'に直交させた。4号住居では、F-F'に石の掘り方が残つておらず、これをセクションで挖えた。また、B1号土壌とB2号土壌は上からのプランでは8の字に接している程度に見たが、重複しており、B2号上塙にはプラン確認面から約1.5cm下に焼土ブロック2ヶ所が存在した。B2・B3とも袋状ビットに近く、底部は平らであつた。B1土壌は埋蔵を持つもので、土壌の中心に埋め込まれており、これを実測するためC'・D'の間を掘り下げ、土器が正位、あるいは逆位にあるか、時期は何時かを調べた。時期は中期末葉のX状把手を持つ器で、よく埋蔵に使用されているものである。

#### 47. 12. 4 (晴)

2H住居のカマドセクションを続行する。B1・2・3号土壌のC-C'、E-E'のセクションをとり、B1号の土器の取り上げ作業を行なう。埋蔵は土圧が上から南北方向にかかり、頭部X状把手が一つ西側に倒れており、口辺の一部が調内側に落ち込んでいた。底部は欠損しているので、現存高は20cm位しか残っていない。埋蔵外側は2層に分けられ、内側は3層に分けることができる。3号土壌は袋状で、中央部にロームブロック混入褐色土が水平に貼られている。

#### 47. 12. 5 (晴)

2号カマドのセクションを続行する。焼土は深く、ロームが相当乾燥している。堀道はなく、たき口に皿状ビットがある。また、4・5号上塙の土壌火窓とセクションを行なう。人數が少なく3号住居はそのまま残されており、明日から6H住居に着手できそうである。

#### 47. 12. 6 (晴)

2H住居の清掃を行ない、写真、及び実測を行なう。カマド部と新たに発見されたビットを加え、平面図を完成させる。6H住居の実測を開始する。住居内にセクションベルトがT字形に残してあつたので、これの東西南北セクションを実測する。覆土が浅く、遺物の散布はカマド部のみであり、カマド南側には縄文中期の土壌があるが、土師住居の床面が貼られていた事実はない。

#### 47. 12. 7 (晴)

6Hではセクション実測終了後これのベルト撤去を行ない、清掃して写真撮影をして平板実測に移る。また、3Jと4J住居の間にありそうな住居を確認するため、清掃すると、柱穴が3本発見され、4J北壁部に4J入口部と類似したビットが2本あり、3J内に柱穴が1本~2本あると考えられた。従つて、3J内にあると考えられる柱穴を探したが3号の柱穴と区別がつかないことから、4Jと3J、及びこの10Jとの関係が不明である。唯、遺物が10J住居上に集中しているところから、10Jが最も新らしいことが言えるであろう。柱穴発掘、及び実測を開始する。

#### 47. 12. 8 (晴)

10 J 住居の柱穴掘りを行ない、平板実測を行ないながら遺物の取り上げを行なう。遺物の時期は、中期終末期のものがほとんどで、いわゆるへの字文の施文された土器である。10 J 北側に石組の特殊造構が発見され、これの平面図作成に着手する。石組の中には凹石等があり、上面には土器片を含まないので時期は不明である。3 J 住居北西側に土壙があり、これを 7 号土壙とする。これのセクションをとるため半分カットする。6 H はカマドを切るため 2 本のエレベーションラインを設定し、作業を進める。焼土は薄く、石組も小砾で貧弱なものである。

#### 47. 12. 9 (晴)

C 地区で発見された焼土の部分 2ヶ所を十字にカットし、これの平面図とセクション実測を行なう。発見時点でも問題となっていたその性格は依然として不明で、焼土は良好でしまっているが、その下のローム乾燥部が深く 50 cm 位のひび割れがある。遺物は無い。10 J 住居は炉が発見され、方形石囲炉であったことが、残された一辺の切り石と各辺の掘り込みで判明された。ロームが掘り込まれ焼土が残っている。柱穴は 4 本であつたらしく、4 J のプランと似ている。特に入口部のビットは 3 号、5 号住居とも同じ様であり、一連の住居移動を示すものと考えてよさそうである。7 号土壙のセクションとりを完了し、B 1 区にある 8 号土壙の実測に移る。石が落ち込んでおり、覆土は黒褐色で僅かに焼土を含む。特殊配石造構は平面図を完了させ、セクション実測に移る。石は西側が大きく、東は小砾で、幅も西の方が広い。この石をはずしていくと造構底面よりへの字文の破片が出土した。なお 6 号土壙は、10 J 住居の北側で、柱穴と重複するものとした。

#### 47. 12. 10 (晴)

3 号住居址の着手。平板実測と平行させて遺物を取り上げ、柱穴の掘り下げを行なう。最も適切と考えられる柱穴を 4 本掘る。これは 4、10 住居を参考にし、重複の可能性をも考えて、張り床でない部分にのみしほつて行なつた。8 号土壙のセクションを行なう時、古銭（寛永通宝）が出土している。C 地区では、溝にかかるトレンチ 2 本のセクション実測を行なつた。3 号住居を更に精査すると、周溝はなく、4 J と同様に柱穴北側に部分的なビットがあり、柱穴は深く直立している。北壁と西壁の底面が中央部より高くなつておらず、特に西北壁下には溝が 2 本平行して走つてある。黒褐色土にロームブロックを混ぜた張り床的要素の強いものである。これは入口部にも言える。

#### 47. 12. 11 (晴)

3 J 住居の柱穴掘りを進める。なお床面の張り床的な部分を掘り下げ、ビットの調査を行なう。8 号住居の実測作業にかかる。8 号には 2 本の十字になつたセクションベルトが残してあるので、これの実測を行なう。

#### 47. 12. 12 (晴のち雨)

8 号址のセクション実測作業は 11 時までで終了し、宿舎にもどる。

#### 47. 12. 13 (晴、強風)

錆性を除去し、8 号セクション実測を行ない、ベルトをはずす。3 号の柱穴掘り下げを行ない、エレベーションをとる。

#### 47. 12. 14 (晴)

8 号住居の清掃を行ない、写真撮影後、平板実測にはいる。遺物位置図の作成、及びその取り上げを行なう。住居南入口部に埋壺があり、埋壺は正位の状態である。壺は南から西にかけて無く、柱穴

と重複して土壤が存在している様である。 炉は、疎が一つあるのみで、地床炉に近いが、掘り方を残しているので右図炉があつただろう。 プランは胴張り隅丸方形で、柱穴の外側に溝状ビットがあるのは4J、3Jに類似している。 9Jの清掃を行ない、ランプ確認のため各々グリッドセクション面の調査を行なう。

#### 47. 12. 15 (晴のち曇)

8号J住居址の柱穴掘りに平行して、西土塙・南上塙のセクションラインを設定し、これを実測する。 双方の下には柱穴が残つておらず、7号とあわせて、柱穴に重複する土壤の意味をも考えねばならぬこととなつた。 南入口部の埋壺は中期終末期の被杉文をもつ深鉢形土器である。 柱穴のそれぞれの深さは約60～75cmあり、東側にある埋壺の住居址と考える小さな柱穴が住居中央に2本発見されている。 9号J住居址のセクションをとる。 L字形石窯炉と、西の焼土について関係はまだ明確でなく、プランが不明であるのでセクションベルトを取り除き、柱穴によつてプラン確認することを決定し、これを進める。 L字形石窯炉の上側で、ロームの立ち上りがあり、これを塗としたいが、あまりに炉に近く、また、炉との間に土壤が存在するのでこれの塗とも言える。 床面はL字形の近くは柔らかく、集石焼土部は比較的良好である。

#### 47. 12. 16 (晴)

7号J住居址のセクション(南北)の実測を行ない、これを除去する。 また、西側土塙を掘り下げ、住居との関連を追求するが、土壙覆土は黒色で、その下に7Jの柱穴らしいビットが入り込んでいる。 柱穴の床面には疎が2～3個入つており、柱を支える石であろうか。 この覆土もやはり黒褐色土で、浅いため屢数は多くない。 8号J住居は昨日の続きで、柱穴のうち主柱穴は4本で、西側上塙C-C'エレベーションでは、柱穴底面まで2段から3段に落ち込んでおり、南上塙では土塙内に石が落ち込んで、壁高は20～25cmである。 土器片1片があり、中期初頭の土器と考えられる。 9号J住居はセクションベルトを除去し、平板実測と平行し、遺物を取り上げながら、柱穴確認を行なう。 良好的な柱穴は集石炉の周囲に検出され、地床炉(集石)部を9号と決定し、L字形石窯炉を11分とした。 9号J住居の柱穴は深いものが3本、浅いものが2本発見されたが、ほぼ炉をかこむ円形となり、11号J住居の柱穴は発見できなかつた。 他に土塙が東側に1、南に1ヶ所あり、その他にも存在する様である。

#### 47. 12. 17 (晴)

8号Jエレベーションをとり、全作業を完了する。 9号Jは遺物を取り上げて、床面の精査を行ない、土塙のセクション実測を行なう。 7号Jは、平板実測を行ない遺物を取り上げる。 柱穴は多く、ほぼ円形を呈しており、北西のビット内より石皿が伏せた状態で発見され、北側ビットからは土器片の大きなものが出土している。 遺物が含まれるビットの床面レベルと位置が重要なかぎとなるであろう。

#### 47. 12. 18 (雨)

作業休止

#### 47. 12. 19 (無)

9号Jの柱穴掘り、及びエレベーション実測を行なう。 また、土塙のセクション実測を行なう。 11号Jの拡張をするが、やはりプランは確認できず、平板実測のみで終了する。 7号Jは、柱穴及び土塙の平板実測を行ない、エレベーションをとり、遺物の取り上げをつづける。

#### 47. 12. 20 (晴)

9号住居及び11号住居の周囲(特に東)を拡張し、大きな土塊を掘る。また、南には2重の上塗があり、縁に石組が存在する。この石組の1つは石皿破片であつた。7号住居の炉のセクションをとる。炉石の1つが石皿であつた。

47. 12. 21 (晴)

D2区に存在する焼土の周囲を拡張し、柱穴及び打製石斧等のあり方、及び覆土からこれを13J住居とした。13号住居の壁ではなく、柱穴で把握しなくてはならないのでこれを探した。平板実測・セクション作図・遺物取り上げの作業時間は短かつたが、拡張に時間をとられた。

47. 12. 22 (晴)

13号住居のエレベーション、炉のセクション作図を行なう。7号は最終作業を完了し土塙のセクション実測に移る。11号及び9号のエレベーションを設定する。まだ柱穴や上塙が存在する可能性が残されているようである。

47. 12. 23 (曇後雪)

午前中昨日の作業を続行するが、雪の為作業中止。

47. 12. 24 (雪)

作業を休止し、室内作業を行なう。

47. 12. 25 (晴)

12号住居址、及び、9、11J住居址の除雪を行ない、9、11号はエレベーション及び、写真撮影を行なう。炉のセクションをとる。12号住居の拡張を行ない柱穴をさがす。また、埋壠炉上のセクション実測を行なう。周溝は無く、柱穴も規則性は見られない。炉の東には大きなビットがあり、埋壠炉の下にもビットがある。更にこの南にもあつて直径2m近く、深さ1m以上の円形ビットで、セクションは台形である。

47. 12. 26 (晴)

3号住居址の除雪を行ない、周溝の再確認と炉のセクションをとる。また、西北の焼土と土塙のセクションをとり、3号址の実測を完了する。A地区の溝セクションを1本作図する。溝はC地区の溝と似ているが、疊が多い。12号住居の清掃、写真撮影を行ない、炉の下のビットセクションを切る。

47. 12. 27 (晴)

12号址のセクション、エレベーションをとり、ビットセクションを完了させる。諸道具を洗い、中原遺跡の発掘作業を終了する。

## b 上平出跡調査日誌

47年12月11日～12月26日の16日間第1次調査として表土剥ぎを行なう。

47. 12. 11 (晴)

S T A 2 5 + 4 0 ~ S T A 2 6 ~ 0 0 を基軸として、グリッドの設定にかかる。この基軸はほぼN45°Wで、地目は北から山林、野菜畑、原野となつておらず、西側に小沢が流れ、東は平出池(湧水)から流れ出た椎現沢がある。この舌状台地の幅は300mあり、中央が低くこれを椎現沢が流れ、凹地の水田に水を供給している。平出跡の幅は、130m×40mで、中原の表土厚からこちらも浅いと考え、市松で掘ることとした。区を設けることはせず、南側水田より1、2、3の数字を、そ

れに直交する間にアルファベットを使ってグリット名を呼ぶこととした。まず、中央野菜畑にグリットを設定し、南東のカヤの原野を刈る。STA 25+4.0～STA 25+3.0の間は表土が浅く20cmでロームとなり遺構はない。唯、山林との間に溝があり、石炭ガラが多く含まれていたので、後世のものである。E-34グリッドで平行沈線で施文された土器をもつ上塙が発見された。この土器の時代は縄文中期初頭で壺形土器と思われた（尖渦段階で変形と判明）

#### 47. 12. 12 (晴のち雨)

グリット発掘を進める。南東に下るにしたがい、ロームまでまでが深くなり、土器片及び礫が多く含まれている。11時頃雨が強くなり中止する。

#### 47. 12. 13 (晴、強風)

北西、山林の一部を伐採する。山林の中の道路までである。この山林表土に凹石や、石皿が発見され、遺構の可能性を高める。午後より、別荘北側の道路南にグリットを設定し道路北側のグリットを掘り下げる。特に23～25ラインが黒褐色土が厚く、遺物も多い。しかし、完全な遺物はほとんど残されておらず、石も不規則である。

#### 47. 12. 14 (晴)

M2に於て、敷石状の板石が一枚あり、周囲に焼石があるので、住居かもしれない。これらの石はソフトローム土の上面にあり、床面は見えられていない。土層は表土（暗褐色土）黒色土、黄褐色ローム土、ハードローム層の4層に分けられ、遺物包含層は黒褐色土層である。また、生活面、あるいは住居床面は第3層上面にあると考えられ、焼土などがある。道路南側の発掘を進めるが、石組カマドが発見されたのでこれを拡張する。1H住居とし、この東北に縄文時代住居の炉があり、これの柱穴を探す。壁は無い。（調査中発文炉は1Hカマドと判明）

#### 47. 12. 15 (晴の晩)

I5ラインの東に方形住居が発見され、これを2号住居とする。また、更にこの南東に3号住居が発見され、続いて4号住居が発見された。いづれも土師器を出土する住居である。1号西に新たに方形プランが残され、これを5号住居とし、1号の東の縄文炉を7J住居、3Hの北の縄文住居を6号とした。なお、4号のみ住居内の掘り下げを行なう。セクションベルトは十字に残したが、カマド部はかかつていない。カマドは石組であるが撹土が中央部まで広がつており、木炭が散乱している。床面はロームで、遺物はカマド周辺である。

#### 47. 12. 16 (晴)

3H住居プランの確認を行ない、6J住居の拡張を行なう。また、3号の南西に中期初頭の上塙があり、土器が横位で、口辺を南に向いている。発掘区南端に焼土があり、プランを探したが見えられなかつた。この周囲から石錐2点を発掘している。山林南部の発掘を行なう。

#### 47. 12. 17 (晴)

午前中山林を切り開き、12m×16mの発掘区を設定する。山林内道路北側である。午後より山林内部のグリットでマウンドがあり、これを掘り下がったが、旧道を開く時、切り土を盛つものであつた。山林内の層位は約40cmでローム層に至り、遺物は少なく、遺構もない。また、北側も同様で施道が台地西縁に沿つて存在した。遺物は黒色土中にあるが、まとまつてはいない。

#### 47. 12. 18 (雨)

休止

#### 47. 12. 19 (雪)

山林北部に於て石棒が発掘され、61Zグリッドに特殊配石遺構があつた。打製石斧、多孔石がその石組内にあり、中原の遺構と類似している。また、別荘フエンス内にグリッドを設定し、この発掘にかかる。8号H住居が発見され、中期の一括土器が2点東壁上にあつた。また、フエンス東隅には土壙があり、土器破片が多く発見される。

#### 47. 12. 20 (晴)

フエンス内掘り下げと、農道北側の配石遺構を再度掘り下げる。新たに土壙が発見され、これに石と半完形土器が含まれている。この地区は、遺物・焼土・石組等の問題が多分に存在するので、第2次調査にゆだねた。

#### 47. 12. 21 (晴)

小沢河谷山林北側より土壙等の実測作業を始める。B64グリッドは石棒があり、これの平面図及びエレベーションをとる。Z61グリッドには集石址があり、平面図及びエレベーション実測を行なう。又、A59グリッドにはソフトローム上に一括土器片があるので、これを清掃し写真撮影する。

#### 47. 12. 22 (晴)

Z61・62グリッドの集石址は、その土は浅く、黄褐色土を切り込んでいる。集石址内の遺物は多凹石4、打製石斧2、土器片5~6片(時期不明)、黒曜石片1(ブレイド形)。B60グリッドの北側には無文(うすい条痕)土器があり、深鉢形土器片と考えられる。底部内にはタールが付着し、口邊もあるが、同一個体か不明である。これらの実測を続行する。

#### 47. 12. 23 (雪のち雪)

E34グリッドの中期初頭土器をもつ土壙の実測、及びエレベーションの実測を行なう。午後より雪のため作業中止。

#### 47. 12. 24 (雪)

休止

#### 47. 12. 25 (晴)

除雪作業後E34の上層、及びその南、3Hの東の上層にかかり、それぞれの実測作業を進めながら、条件が悪く、第2次調査にこれを委ねた。

#### 48. 3. 11 (晴) (第2次調査)

1H、2H、3H、4H、5H、6J、7J住居の発掘作業を開始する。1H、5Hに4本のセクションベルトを設定し、2Hについては、2本のベルトを設定した。また、3H・6Jに2本のセクション、4Hに2本のセクションベルトをそれぞれ設定し、住居内の掘り下げを行なう。5H住居については、深く西側のフエンスの下にかかる別住居が存在し、重複している様である。

#### 48. 3. 12 (曇時々雪)

2H住居址掘り下げの続行。北西に偏してカーボンが出土しており、その他甕口辺、鉄片、スギ先の出土を見る。4H住居内掘り下げ時に於て、カーボンが多量に出土し、火災に遭遇した住居と考えられ、垂木が中心に向つて崩れ落ち、炭化している様である。3H・6J住居についてセクションベルトを設定し、これの掘り下げを行なう。6Jの住居内には小ビットが多数あり、性格を明確にできない。1H、5H、7Jの住居内を掘り下げる。5Hはカマドを東にもち、一方が7m程の住居と

考えられ、床面はカマド前では比較的良好であるが、他の部分については張り床が認められ、焼土が多く含まれている。

#### 48. 3. 13 (曇のち晴)

2H住居の掘り下げがほぼ完了するが、カマドの位置については疑問を残す。3H住居からは北寄りから鉄片が2片出土しており、1片については $2\text{cm} \times 8\text{cm}$ で、一方に小孔が穿たれている。この住居の覆土内には砾が多く、その性格は不明である。おそらく埋没時に投げ込まれたとしたい。1Hと5H住居では5H住居の方が新しく、1Hを切ついている。また、カマド前部焚口部より灰釉耳皿が出土している。4H住居内からはカーボンが多数出土しており、屋根の垂木が火災にあつて倒れ込んだ様に、中心に向つて放射状に出土している。また、北壁南側より茅の炭化物らしいものが出土している。

#### 48. 3. 14 (晴)

2H住居、セクションベルトのみを残し、床の検出を行なうと、これに多くの土壤が重複している様である。東壁に縄文期と考えられる土壤がある。壁は南西コーナーでは削られている。1H・5H住居は遺物が多く、特に5H住居では、板状で一部千歳蛤状のひねりがあるドリル状鉄片が出土しており、土師器についても完形品は無い。また、西側の壁が不明確であることから、住居がもう一軒あると想定する。4Hは遺物平面図を完了させカーボンをとり上げる。3Hはセクションを取り、清掃を行なう。

#### 48. 3. 15 (晴のち曇一時雪)

2Hは、南壁南に円形土壤があり、壁にかけて $40\sim60\text{cm}$ のビットがあるらしい。3H・6Jのセクションを取り、周囲のビットを掘る。6J住居はほとんど削平されており、擾乱を多く受けているが、炉と思われるところに焼土が認められた。5H住居の西壁を追つてゆくにつれて、床面が更に西に広がつているところから、同一平面に重複している住居が存在することが明瞭となつたので、これを9Hとした。4H住居は遺物の取り上げを行ない、床を出してゆく。

#### 48. 3. 16 (曇時々晴)

2H、B-B'セクションを取り、ベルトをはずすと砾石が床面より出土した。3H、平板実測を開始する。6Jの縄文をあわせて清掃する。4H、床出しを行なつてゆくと周溝が南北の一部に確認されたが、四方にめぐらしの様である。5H住居はセクションを取り、平板測量を開始する。

#### 48. 3. 17 (晴のち当)

2H住居南側のビットの掘り下げを行なう。3Hは清掃し、遺物の写真をとる。4H住居の床出しを行ない全景写真をとる。床面の状態は良好であるが張り床である。

#### 48. 3. 18 (雪)

作業休止

#### 48. 3. 19 (晴)

2H住居の南側の土壌に縄文土器片が多数出土。土壤は直径 $150\text{cm}$ 、深さ $20\text{cm}$ 。3Hでは住居内のビットを探し、これを掘る。南東壁東側の土壤(径 $120\text{cm}$ 、深さ $70\text{cm}$ )中にスリ石( $60\times70\text{cm}$ )がある。4H住居は、張り床下に土壌やビットが多く、かつ住居床面を造る場合に荒掘り後、ロームを張つたことが明確である。

#### 48. 3. 20 (晴)

2H住居内を清掃し、遺物全体の写真をとり、それぞれの遺物写真をとる。3H・6Jは南北エレベーションをとり、6Jの清掃を行なう。4H住居内外のピット及び土壇を掘り下げる。

#### 48. 3. 21 (雨のち晴)

2H住居の床面遺物の清掃、西側の土壇の掘り下げを行なう。縄文後期の土壇で、堀の内式が出土する。3H住居の全体写真をとる。柱穴は1本で、北東隅にあり、カマドは南に位置する。また、西側の土壇出土埋立の写真撮影を行なう。4H住居の張り床をはがし、荒廃りの状態を観察するが、住居中央部にピットが発見され(径40cm×深さ50cm)、張り床下のローム面は凹凸が激しい。また、4H住居南西側の黒色土を掘り進むと、敷石が見つかり、板状の石が設置されており、石は焼けている。この敷石遺構を7号住居とする。

#### 48. 3. 22 (晴)

2H住居は張床を精査し、壁にかかつてある土壇の掘り下げを行なう。土壇は住居北側に2ヶ所、東側に2ヶ所、南側カマド東に土壇、西壁を切つて、縄文後期の土壇が発見されている。西壁土壇は皿状で、内よりチャート柳葉形石器等が出土している。3H住居カマドを住居エレベーションと併せて十字に切る。焼土は少なく、良好ではない。西側の縄文中期前葉の土壇掘り下げを行なうと、当初発見されていた一括土器の他に2個体が存在する。4H住居の清掃を行ない、写真撮影を行なう。この後ローム面のレベルをとり、完了する。つづいて、7号敷石住居を掘り広げ、セクションベルト2本をT字形に設定する。炉の位置は明確ではないが、敷石部分は全面的ではなく、一部三ヶ月形に存在する。敷石部より前に遺物が多く、石剣・石鏃・注口土器等が発見されているところから縄文後期住居といえる。なお、4H・2H住居の間の空白地帯に土壇群が存在することが判明し、縄文の土壇が3、高床造構の柱穴と思われる柱穴2ヶ所が発見された。柱穴セクションはピット中央に隅丸方形の黒色土が入り込んでいる。

#### 48. 3. 23 (晴)

2H住居中央部に袋状ピットが存在し、径100cm深さ50cmを計るが、上部には焼土混入暗褐色土が存在する。また、東側エレベーションライン設定中、東壁に接して焼土が発見された。恐らく、カマドが当初ここに設定されており、次に南に移されたものであろう。3H住居は床面清掃を行ない、張り床精査をする。7J敷石住居は柱穴を探したが、北に土壇か柱穴か不明のピットが4本ある。敷石南側は床面が不明確で、敷石面と同一レベルで泡えた。高床造構について、4本の柱穴が発見され、昨日のものを柱穴1・2とし、本日のものを柱穴3・4とした。深さは柱穴1・2が深く80と90cmで、3・4は60と50cmである。傾斜面の低い方が深く、高い方が浅い点に特徴がある。

#### 48. 3. 24 (晴、強風)

2H住居は張り床を除去し、清掃して写真撮影を行ない、完了する。3H住居についても同様で、張り床除去・清掃を行ない、写真撮影をする。7J敷石住居はセクションベルトを除去すると、ベルト下よりL字形の石臼が発見された。本来、方形石臼炉であつたと推察されるが、南・西の炉石が抜き取られていると考える。焼土の量は少ない。

#### 48. 3. 25 (晴、強風)

1H住居、5H住居調査を再開する。1H住居のセクションを5Hと結び、実測の用意する。5H住居はベルトを除去する作業を開始する。住居南より須恵器壺が出土する。7J敷石住居は作業を完了し、写真撮影を行なう。

#### 48. 3. 26 (晴)

1H住居内の掘り下げを行なう。カマドは北西と北東に存在し、北東のカマドが最終のものとした。カマド奥壁石のみが残存し、土師器壺・壊破片の出土量が多いことによる。袖石は無く、その掘り込みが平行して残つており、焼土の堆積は充分である。床面の状態はしまりが良く、焼土粒子を多く含んでいる。北西コーナーに柱穴と思われるビットがあるが、他は認められない。また、東南壁の集石跡は、焼成を受けていないものとがあり、性格不明である。5H住居は清掃を行なつたところ、柱穴が北側に偏して多く存在し、9号住居と重複している為不明確である。8H住居はセクションベルトを残し、住居内の掘り下げを行なう。遺物は灰釉陶器、土師工釜等が見られ、カマドは南コーナーに接して存在し、石組カマドではあるが灰色粘土および、焼土が周囲を厚くおおついている。この住居の周辺には北側と西側にそれぞれ縄文の土壙が存在する。

#### 48. 3. 27 (晴)

1H住居、カマド、南側コーナーに方形土塙が存在し、これを掘り下げたところ、土師器及び須恵器の壺が2個体出土した。これを貯蔵穴とし、集石部の礫をはずしたところカマド等の遺構ではなく、投げ込まれた状況を呈している。また、床面は当初考えていたよりも張床部が多く、古いカマド周辺に広がっている。5H・9H住居は柱穴を掘り平板実測に移る。周溝幅は20~30cmで、9H住居は、その柱穴が壁と接しており、壁柱穴となつてている。8H住居は昨日にひき続き、床面の検出を行なう。西南コーナーに土壙があり南壁中央にロームの段は、入口部を想定させる。

#### 48. 3. 28 (雨)

1H住居、床面精査し、作業を完了する。8H住居は床出しを行ない、周囲の土の除去をする。作業半日。

#### 48. 3. 29 (曇時々雨)

9H住居西壁の壁柱穴は4本発見され、うち、コーナーに2本、中央に2本存在する。8H住居の入口部と推定した段の両側にビットが発見され、周溝はカマドを除いてほとんど一回する。

#### 48. 3. 30 (晴)

8H住居は平板実測を完結させ、エレベーションをとる。遺物の写真撮影とカマドの大測セクションをとる。5H・9H住居ではエレベーションをとり、平板を完了させ、全作業を完了する。その他土塙、E29、F29グリッドにかかる土塙から土偶が出土している。また、C31グリッドの埋葬を平面実測する。

#### 48. 3. 31 (晴)

作業をすべて完了し、道具・遺物の整理を行なう。

## II 遺跡の概況

### 1 遺跡周辺の環境

八ヶ岳は日本列島のはば中央にあり、広大な裾野がくり広げるバノラマは縄文時代中期の華麗な文化が繁栄したことを無言に語る。

山梨県地質誌(1970)では「八ヶ岳は最高峰の赤岳で海拔2,900mにおよび、日本列島を地質学上東西に二分する大地溝帯に沿つて噴出した南北25km、海拔2,000mをこえる一連のみごとな火山列を形成し、その山頂部は著しい侵食作用により荒々しくけずり去られ、あるいは、まつたく新期の活動による生々しい地形を示すなど、なきわめて変化にとんでる。さらに野辺山原をはじめ、火山碎屑の裾野は、広大なローブをつくり、スケールを窺つている。(中略)また董崎砂流の台地上や、八ヶ岳山麓一帯にはローム層および浮石層が厚く分布し、農耕上および降雨時の交通上の障害となつてゐる。この台地には流水の浸食による南および東西性の小谷が発達しあげてゐる。」と説明される。

また植相について言ふなら、ミズナライタキーシデ林が小渕沢駅周辺に分布し、垂直分布ではクリ帶として把えられるが、今日この地域では自然林はほとんど人為的に破壊されてしまつておらず、典型的な垂直分布は見られないとされている。(山梨動植物1972)クリ帶は海拔300m~1,200m付近で、ウリカエデ・チヨウジザクラ・アキカラマツ・クスギ・コナラ・クリ・シラカンバ・イヌシデ・アカマツ・モミ・ツガ・バラモミ等の温帯性植物が目立つ。この植相は動物にとつても豊かな地域である。

それでは中原・上平出遺跡の周辺について見るならば、標高1,000mあたりから谷が深くなり、舌状台地を形成しているがその付根には湧水が多くあり、中原遺跡の付近には中詮湧水、上平出遺跡には300m北に神木の根から流れ出る平出湧水がある。その水が釜無川に注ぐまで深いV字谷を刻み、南西から南に向う舌状台地を造り出している。台地内はそれぞれ異なるが、中原台地は200m平出台地は300m余で、中央に凹地をもつゆるやかな傾斜地である。中原遺跡の東には西の久保平沢、西には泉沢、平出遺跡の東に現権沢、西に小渕沢が流れ、水利はどちらも便利である。

### 2 中原遺跡の概況

この遺跡は表土が浅く、中央部A地区は、約15~20cmでローム層に達する。ローム層はしまりが良く黄色で、縄文時代及び平安時代の住居は、ロームを切り込んで構築されている。しかし、A地区・B地区・C地区については現状が烟、あるいは桑烟であり、表土が削られている可能性がある。このため住居等遺構の検出は容易であつたが、D地区は山林のため、根の攪乱を相当受け、褐色土がローム層の上にある為、プランが不明瞭で、床も歎弱な場合が多かつた。

中原台地上には開墾時の根の侵入を防ぐ構造が三本発見された。巾はそれぞれ10m位あり、縄文時代の遺物が豊富に出土したが、牧草地や畑にした際に、重機で埋められたものと考えられる。

住居址は西側と東側に大きく大別でき、東側には平安時代住居が2軒、縄文時代中期の住居が4軒発見され、西側では6軒の縄文中期の住居が見られる。中央は平安時代住居1軒が南側に存在す

る。

このことから集落の中心部は中央道建設予定地外南側であり、今回は北側を調査したこととなるが、集落形態は台地縁に並ぶコの字形を想わせ、北側に大きく開いた中央広場とも言うべき空白地は八ヶ岳を臨み、豊かな食料源への門であつたことであろう。

## a 遺構

### 住居址

#### 調文時代

##### 3 J 住居址（第3図、図版2-4）

- プラン 脊張り隅丸方形で円形に近い。10 J 住居址と西南部が重複している。
- 径 長径4.8m・短径4.3m
- 周溝 各コーナーに存在し、南壁側に於てコーナーからコーナーまで存在する。
- 壁 垂直に近く、北側で20cm、東壁で27cm
- 床 良好で堅く、南に向つて緩傾斜している。
- 炉 石圓炉であるが北、西側炉石が抜かれている。南北80cm・東西60cm・深さ約25cmの方形。
- 柱穴 主柱穴4本（あるいは炉北側ピットを含めて5本か）であるが、拡張による張り床下のピットを含めると12。
- 遺物 遺物は比較的少ないが、北西覆土中より一括土器3個体が出土している。
- その他 拡張が一度あつたと考えられ、北側には張床と思われるものが認められる。

（二浦）

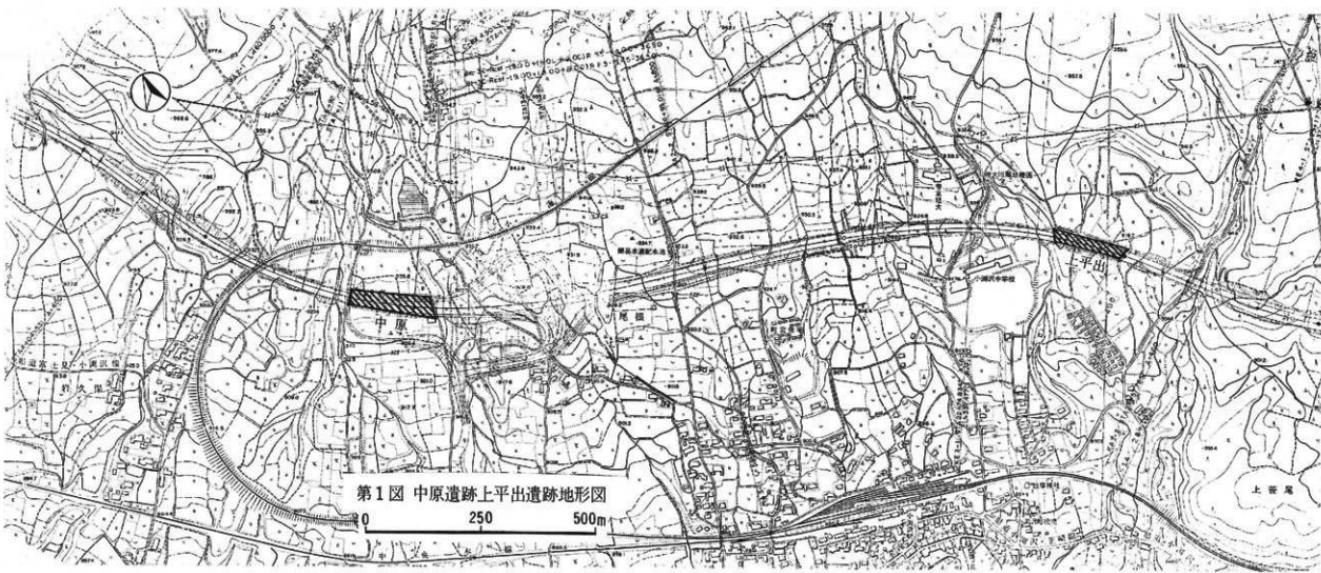
##### 4 J 住居址（第4図、図版3-5）

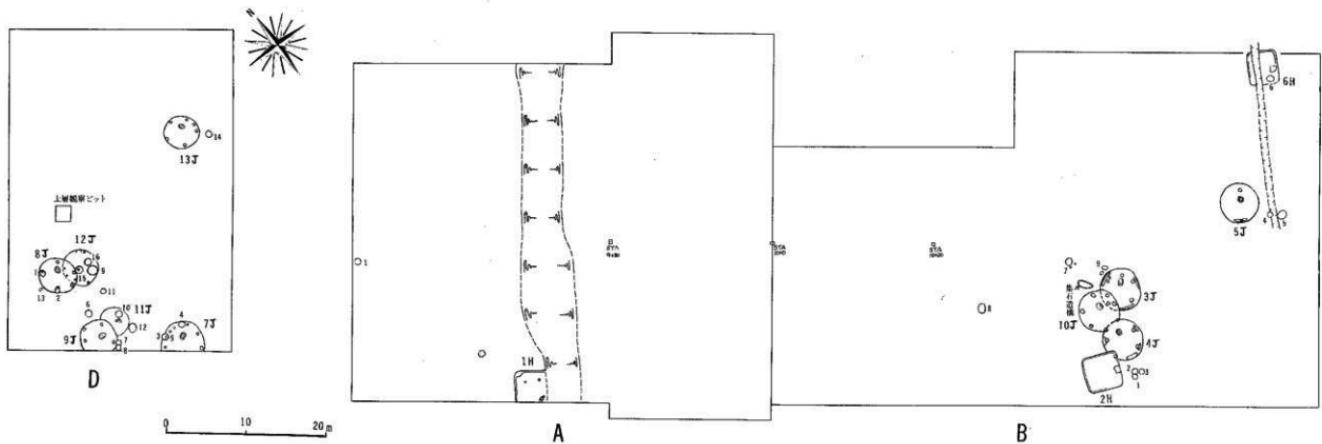
- プラン ややくずれた隅丸方形、北側壁が10 J 住居、西側壁が2 H 住居に切られている。
- 径 4.5m
- 壁 緩傾斜し、北壁約15cm、南壁5cmでしまりがある。
- 周溝 柱穴の外側4ヶ所と南にピットを伴つた部分的な溝がある。
- 床 良好でしまりがよく、わずか南に傾斜している。
- 炉 石圓方形炉。東西の炉石が抜き去られている。北壁よりで50×50cm、深さ30cm
- 柱穴 4本。深さ70~80cm
- 遺物 床面より曾利期の遺物が出土したのみで、覆土からも少ない。

（伊藤）

##### 5 J 住居址（第6図、図版3-6）

- プラン 円形
- 径 約4m
- 壁 敏弱で不明確であるが、北壁一部残存。
- 周溝 なし
- 床 敏弱
- 炉 方形石圓炉70×80cm、南・東側に石組残存





第2図 中原遺跡遺構全体図

- 柱穴 主柱穴と思われるもの 5 本、他 13 本が壁側に不規則に存在する。
- 遺物 土器片若干、炉内より打製石斧、入口部と思われる南側より埋甕完形品 1
- その他 埋甕をもつビットは周溝的な細長いビットで、他例からしてここが入口と思われる。
- 7 J 住居址 (第 5 図、図版 6-11)
- プラン 不整円形か。一部未発掘
- 径 約 6 m
- 壁 北壁のみ発見したが軟弱である。
- 周溝 北側にのみ存在。
- 床 軟弱
- 炉 長方形石西炉、床面よりわずか浮いている。炉石は円礫を 7 個組んでいる。
- 柱穴 6 本
- 遺物 繩文式土器が少量。小形磨製石斧、及び石皿等
- その他 西壁側に袋状ビットがあり、北側住居内 ビット内より石皿完形品が出土している。

(毎回)

- 8 J 住居址 (第 7 図、図版 4-8)
- プラン 腹張隅丸方形で、12 J 住居と東側で重複している。
- 径 約 4.6 m
- 壁 南西部がほとんどなく、全体の劣化度が確認されているのみである。
- 周溝 北壁に沿つて 1.5 m 程あり、その西隅には直径 1.0 m、深さ 2.5 m のビットが存在する。
- 床 しまつた良好な床で水平である。
- 炉 石西炉であつたと推定され、90 cm × 110 cm の皿状掘り込みがあり、炉石掘方方が発見されている。
- 柱穴 主柱跡 4 本と推定、総ビット数 11。
- 遺物 南側より骨利式の埋甕、覆土よりの遺物は少ない。

(浦野)

- 9 J 住居址 (第 9 図)
- プラン 柱穴から推定してほぼ円形。11 J 住居の炉が上にあり、重複している。
- 径 不明
- 壁 不明
- 周溝 なし
- 床 軟弱
- 炉 地床炉と思われるが掘り込みが存在し、焼土の量も充分である。
- 柱穴 8 本確認されている。
- 遺物 繩文土器片若干
- その他 11 J 住居址と重複しているので、柱穴等が不明確である。

(三浦)

- 10 J 住居址 (第 3 図、図版 5-9)
- プラン 円形と推定される。東側で 3 J 住居、南北側で 4 J 住居と重複する。

- 径 不明
- 壁 不明
- 周溝 北側にのみ存在し、3号住居の壁を切つている。
- 床 水平で結つている。
- 炉 方形石西炉であつたらしいが、東側を残し、他の石は抜き取られている。40cm×40cm  
深さ20cmで焼土厚3cmを計る。
- 柱穴 主柱穴と思われるもの7本。
- 遺物 繩文土器一括1、その他土器片少數
- その他 4J住居址と重複している部分が4J住居南側と酷似しているところから、これが入口と考えられる。

(三浦)

#### 11J住居址(第9図)

- プラン 不明、9J住居と重複する。
- 辺長 不明
- 壁 不明
- 周溝 不明
- 床 不明
- 炉 石圓方形炉で北、東の2石が残存する。
- 柱穴 不明
- 遺物 覆土より若干土器出土

#### 12J住居址(第7図)

- プラン 円形と推定される。
- 辺長 不明
- 壁 不明
- 周溝 不明
- 床 軟弱
- 炉 埋甌炉、径16cmであるが下に浅鉢様の粗製土器があり、二重になつている。
- 柱穴 この住居に伴うと思われるもの7本。
- 遺物 埋甌に使用された土器2、他近辺より磨製石斧
- その他 遺物から考察すると縄の内期と思われる。8J住居を貼っている。

(三浦)

#### 13J住居址(第8図)

- プラン 円形と推定される。
- 辺長 約5m程であろう。
- 壁 不明
- 周溝 不明
- 床 軟弱

- 炉 地床炉、北寄りに位置し、直径 9.0 cm、深さ 3.5 cm
- 柱穴 6 本
- 遺物 出土遺物は少ない。
- その他 なし

(三浦)

### 平安時代

#### 1 H住居址 (第 10、12 図、図版 1-2)

- プラン 隅丸方形、東壁を溝に切られ、南壁は調査区域外である。
- 辺長 4.90 cm × 4.50 cm と推定
- 壁 垂直に近く、北東壁 2.5 cm、北西壁高 2.0 cm
- 周溝 壁のある所には存在する。北コーナーはピットがあり認められない。
- 床 よくしまつており良好であるが焼土を多く含む。
- カマド 石組カマドであつたと推定され、南コーナーに位置する。焼土は少ないが、石は焼けていた。
- 柱穴 北側に 2 本
- 遺物 カマド付近内黒土層 1、その他土器器 (国分期) 破片及び織文土器片
- その他 住居内床面下に皿状の土壙が 6ヶ所発見され、焼土が充満されるものと暗褐色土のものに分けることができる。

(浦野)

#### 2 H住居址 (第 11、13 図、図版 2-3、6-12)

- プラン 隅丸方形、4 J 住居を切る。
- 辺長 4.28 cm × 3.90 cm
- 壁高 北壁 3.0 cm、南壁 1.0 cm
- 周溝 南一部及びカマド部を除いて認められ、深さ 2~7 cm、巾 4~12 cm
- 床 良くしまつている。
- カマド 石組カマド、東壁中央やや南よりに設置されており、カマド掘り込みは長径 1.00 cm、短径 0.5 cm、深さ 2.4 cm、袖石は両側とも良好に残存している。
- 柱穴 なし
- 遺物 すべて破片であり、カマド周辺より土器器が多く出土している。他に織文土器片若干出土
- その他 住居内には 7 個の土壙が認められ、焼土を充満するものと、しないものとに大別できる。焼土を充満する土壙からは多く遺物をも発見する。

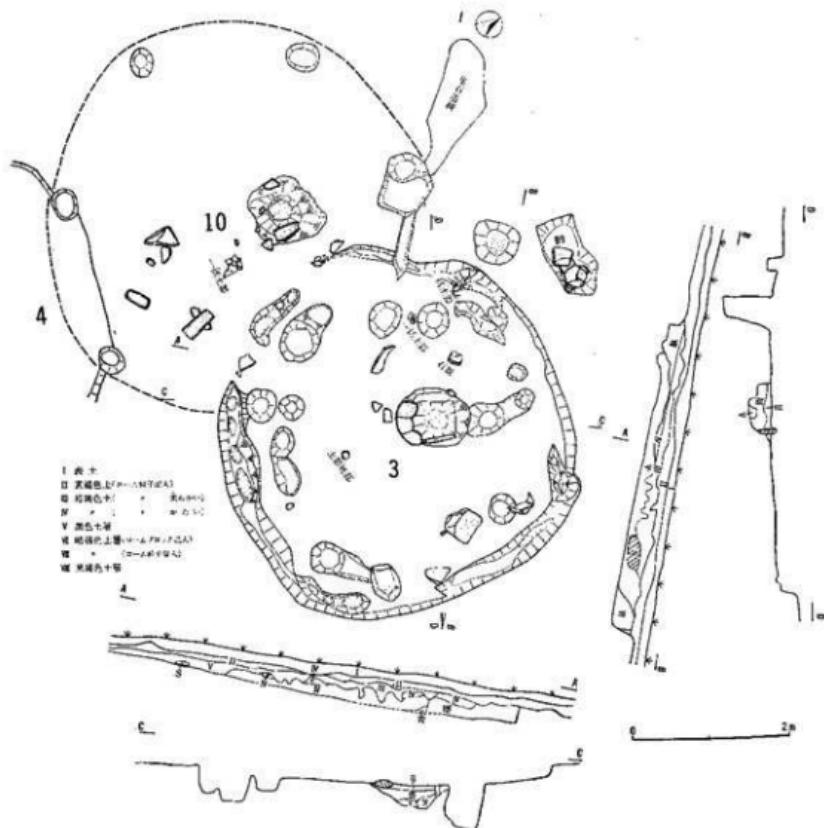
(金箱)

#### 6 H住居址 (第 14 図、図版 4-7)

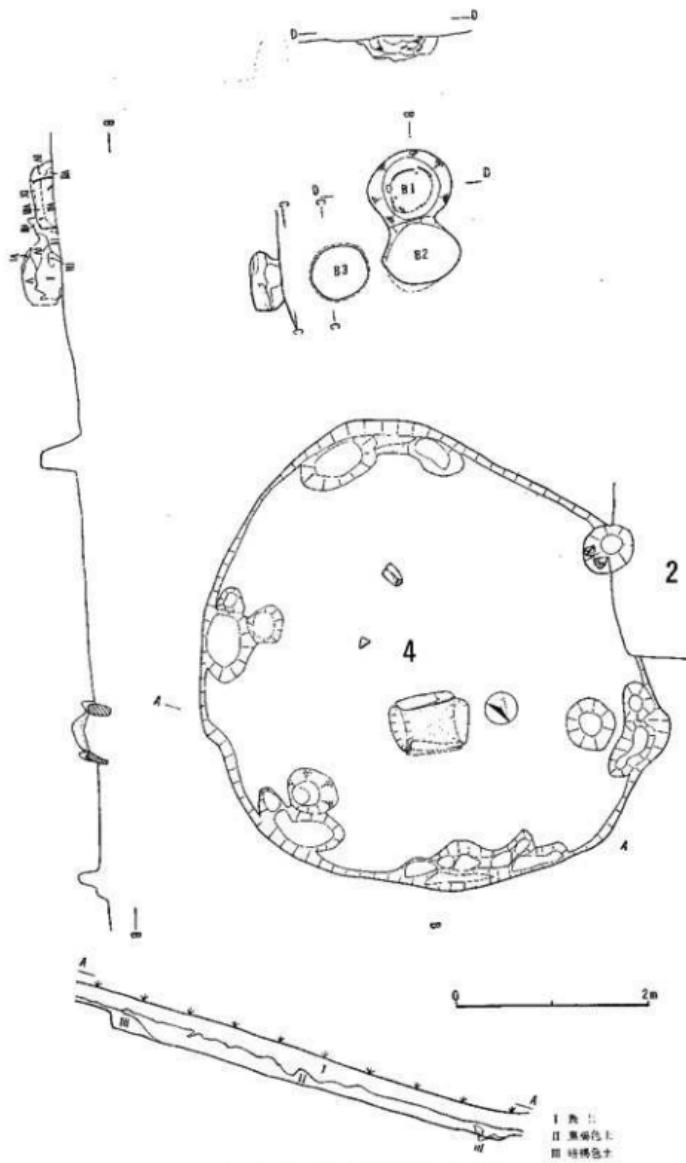
- プラン 隅丸方形、西側を細い溝に切られ南側を耕作により破壊されている。
- 辺長 3.5 m
- 壁 北側にのみ残存し、良好である。
- 周溝 北側、西壁側にみられ、巾は 5~10 cm
- 床 凹凸がはげしいがしまりはある。

- カマド 東壁中央南よりに存在する。ほとんど削平されているので明確ではないが、石組カマドであつたと考えられる。
- 柱穴 9本。住居に伴うかは不明
- 遺物 土師壺1、甕一括1、その他土師器破片、及び縄文土器片
- その他 カマド南側に縄文時代の土塗が存在する。

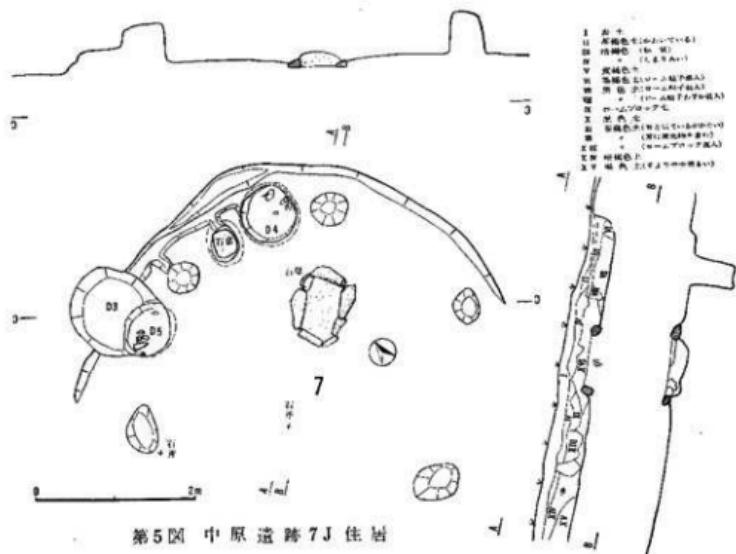
(古跡)



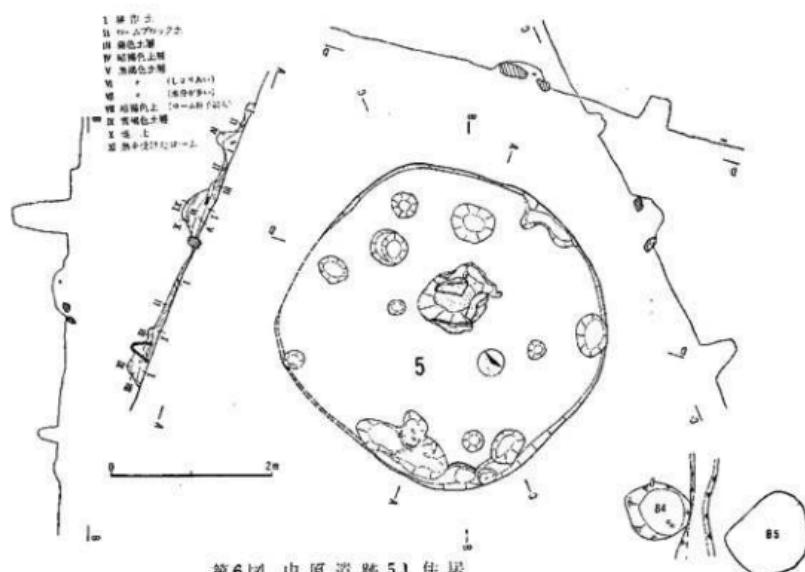
第3図 中原道路3J.10J 住居



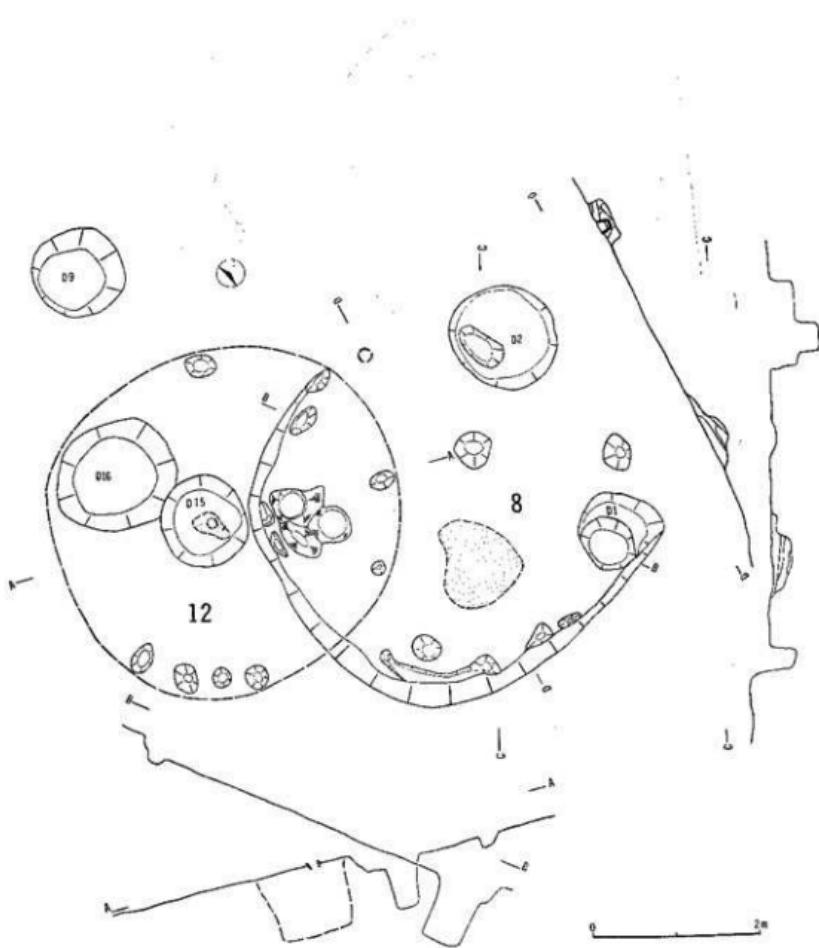
第4図 中原遺跡4J住居



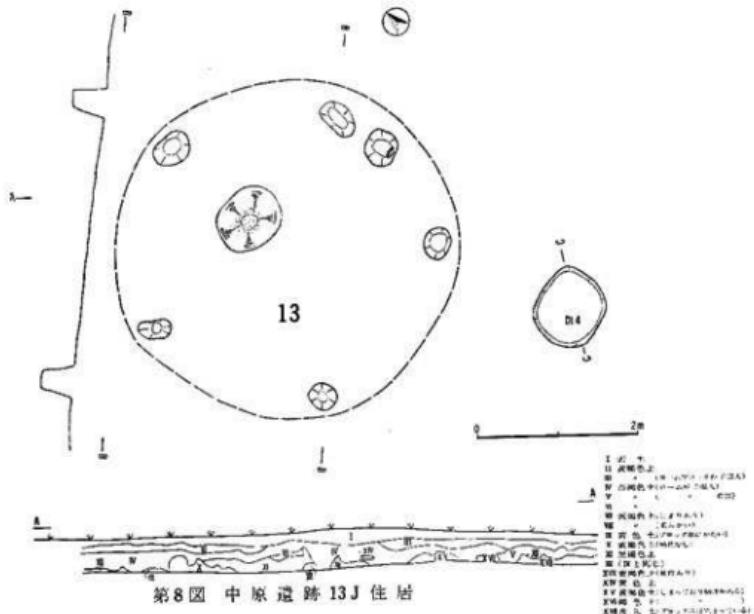
第5図 中原道路7J住居



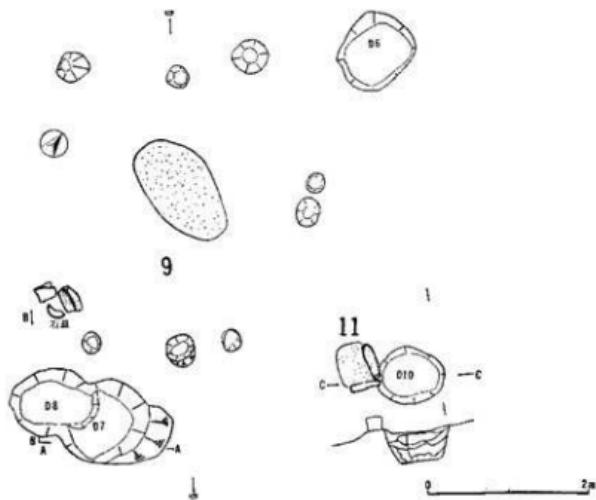
第6図 中原道路5J住居

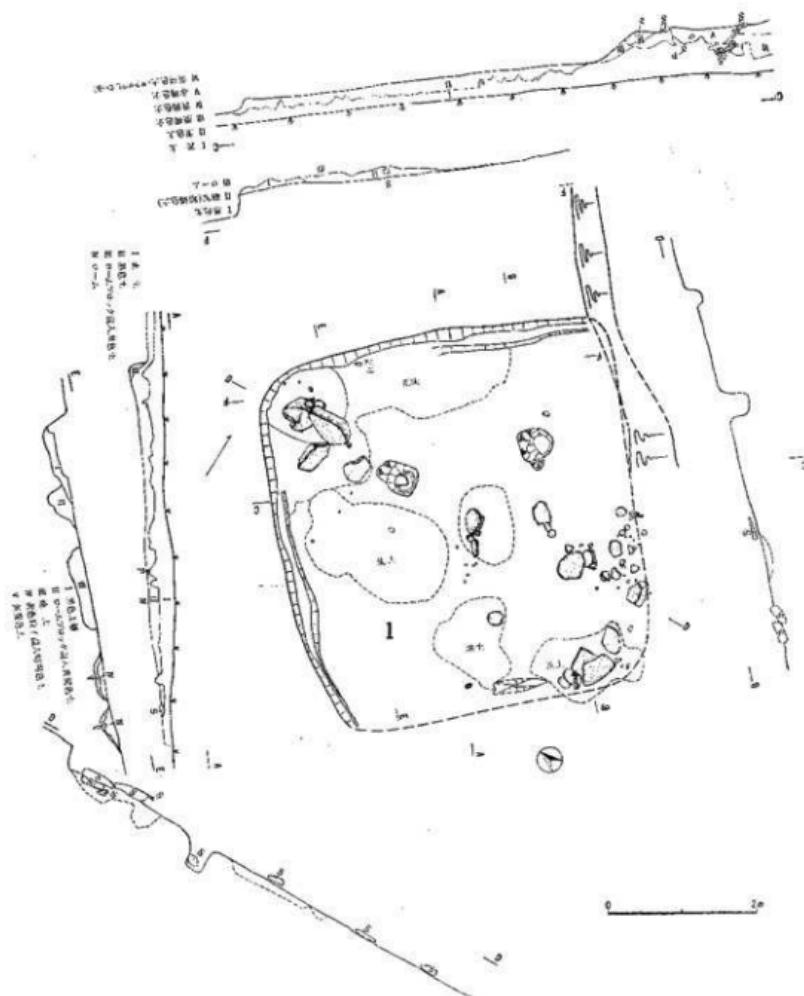


第7圖 中原遺跡8J,12J住居

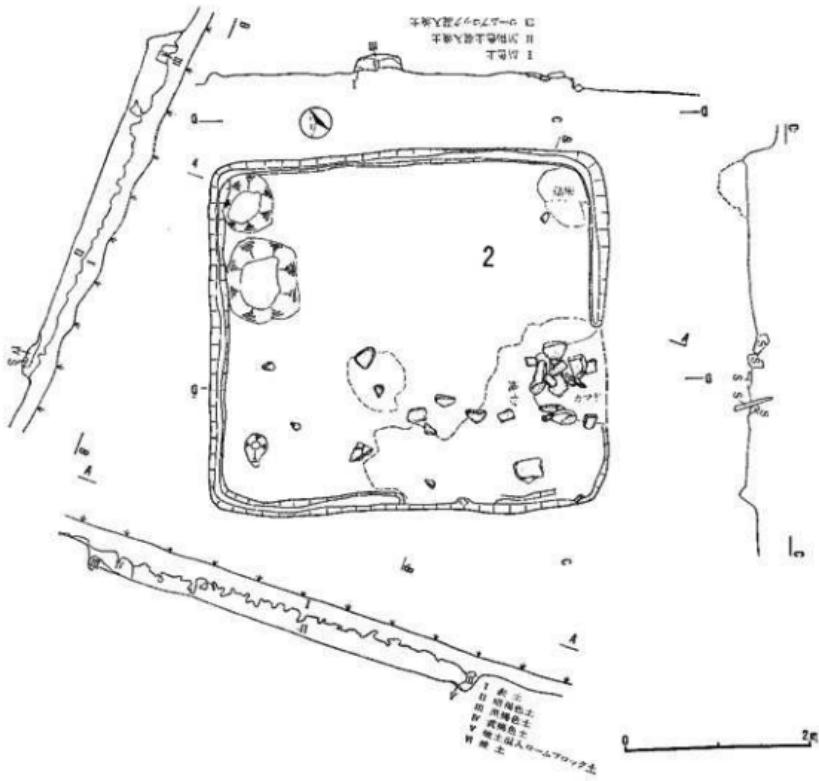


第8図 中原遺跡 13J 住居

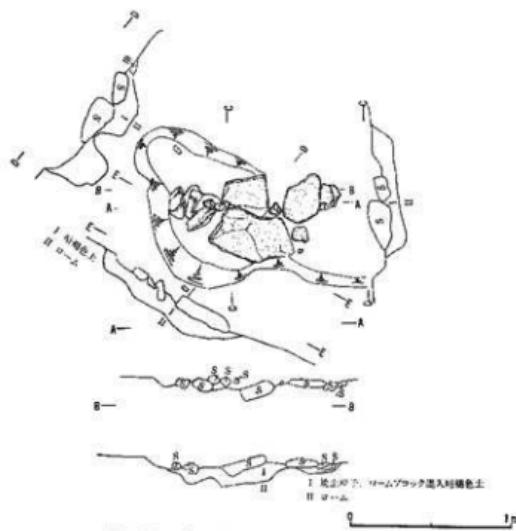




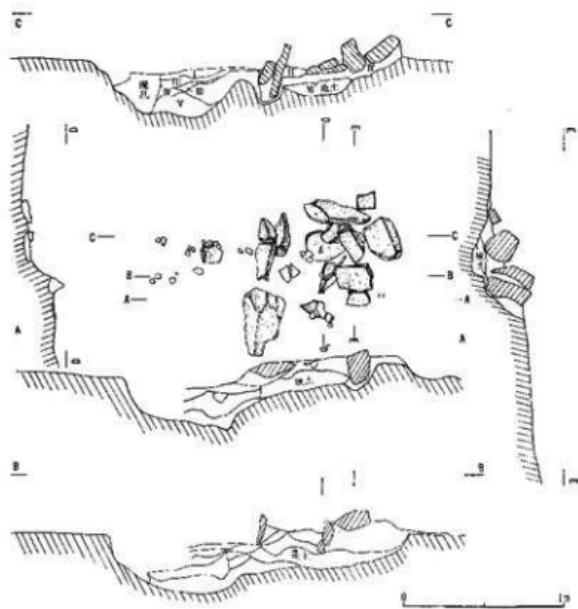
第10図 中原道路1H 住居



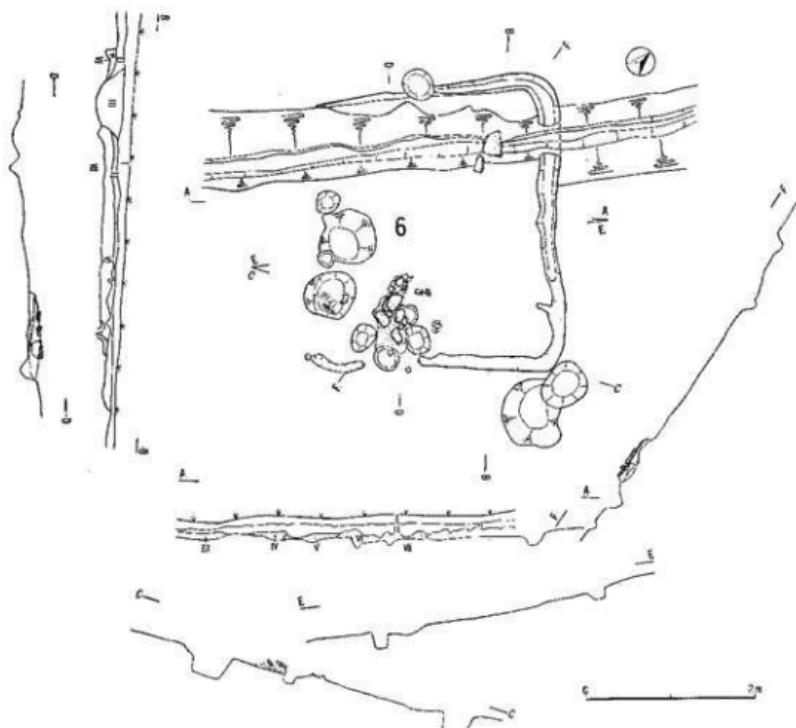
第11図 中原遺跡 2H 住居



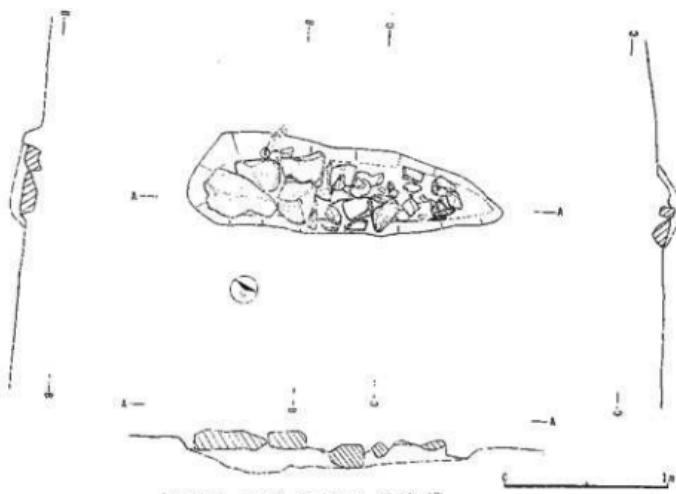
第12図 中原遺跡1H住居カマド実測図



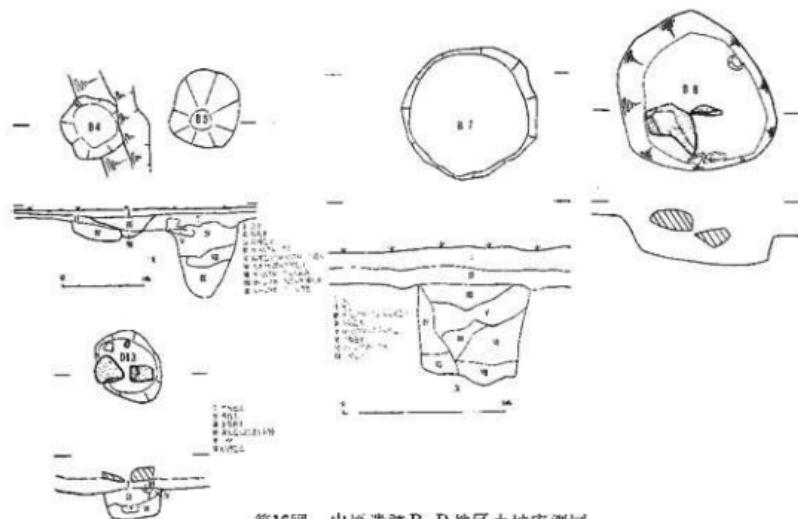
第13図 中原2H住居址カマド実測図



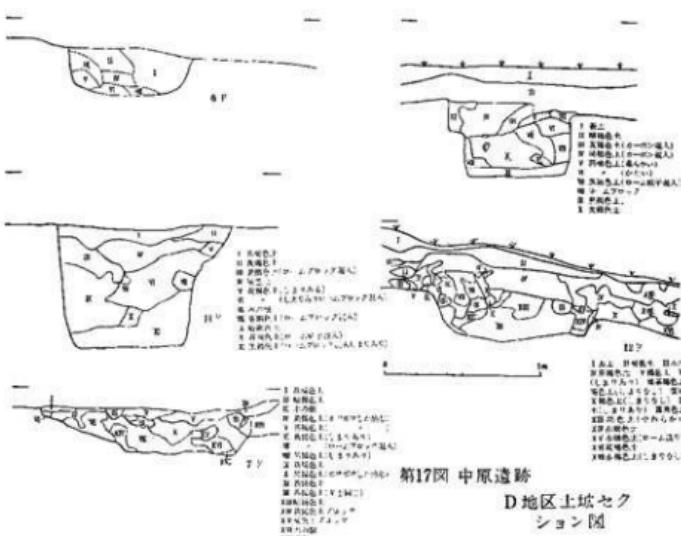
第14図 中原遺跡 6H 住居



第15図 中原遺跡配石遺構

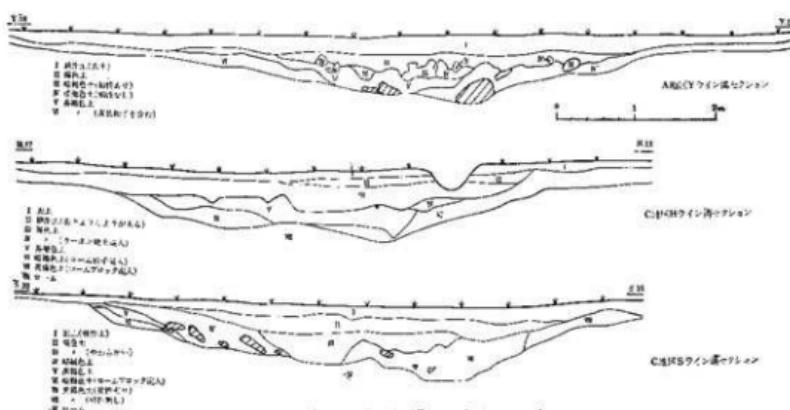


第16図 中原遺跡B,D地区土坑実測図



第17図 中原遺跡

D地区上塙セク  
シヨン閣



第18図 中馬道跡透セクション

## b 遺 物

中原遺跡はすでに述べて来た様に遺物が少なく、この為諸々の問題が生じている。その問題とは、まず住居の時期決定であり、次には表土の浅いことから耕作による擾乱を多く受けている為、張り床が不明確で把えにくいので、住居の重複関係を語ることが困難である。遺跡のA・B・C地区は普通畑、牧草地、桑畠の地目となつており、表土の浅いこととあいまつて、15cm位でプランを確認することが容易である。従つて、吹上パターン状態がかつて造り出されていたにしても、遺物はほとんど散逸してしまつたものと解釈したい。

炉の発見によつて住居を確認した5J、9J、10J、13Jは平地式住居となつて壁は無く、遺物もほとんど残されてはいない。また、1H、6Hは南東に設置されたカマドが削平され形をとどめていない。その他の住居はプランこそ明確であつても遺物が少量で、5J、8Jの埋甕、12Jの埋甕炉を除いて時期決定は困難である。

### 縄文時代 住居出土遺物

#### ○3号住居(第19図、1~3、図版8)

1. 北壁にかかる転倒していた土器で、口辺は内反し、約4cm下に沈線を一周させ、更に沈線で5区画に分け、沈線に囲まれた内側にハの字文を施す。焼成むらがあり表面は赤褐色と黒色の色調を半々にもち、胎土は良好でしまりがある。
2. 暗褐色でしまりの良好な土器で、口辺裏側にカーボンが付着している。文様は綾杉文の退化したものと解せられる。区画は4。
3. 多乳質輝石安山岩製石皿で、住居内に破片となつて存在したが、床面よりは浮いていた。2破片が接合できたところから埋没後に投げ込まれたものであろう。

#### ○4J住居(第19図4~6)

4. 覆土より出土したもので、沈線とハの字文により構成されている。暗褐色の色調で胎土はザラついている。
5. 4.と同様に覆土より出土した綾杉文の小破片で赤褐色、胎土は良好である。
6. 安山岩製打製石斧で刃巾4.5cmの欠損品。

#### ○5J住居(第20図7、図版8)

7. 南側入口部と思われる所より発見された埋甕で、黒褐色の色調に暗褐色の比較的良好な胎土で造られている。口辺に太い沈線をめぐらし、過巻文の下にH形懸垂文を施し、懸垂文の間にハの字文がある。内面脇部下半にカーボンを付着させる。

#### ○7J住居(第20図8~15、図版8)

8. 縄文の荒い原体を紙方向に回転施文したもので、脇部しか残されていない。褐色の色調で胎土良好。
9. 褐色で胎土良好な底部である。相当大きな深鉢形土器と推察され、文様は脇部から上にあつたと思われる。
10. 住居北側の袋状ピット内に伏せられた状態で発見された石皿で、直径37cmの円形平石を利用し、凹部はわずかである。輝石安山岩製。
11. 輝石安山岩製のスリ石で、断面は三角形である。
12. 安山岩製石匙で、先端部を欠いている。薄い削片を利用したものであろう。

13. チャートの剥片で長さ11cm、巾5cm、厚さ2cmを計る。
14. 緑泥岩製の小形磨製石斧で欠損は無い。長さ5.5cm、刃巾1.5cmを計り、擦痕は刃と直角に残されている。床面直上に出土。
15. ハマグリ刃磨製石斧破片で、安山岩製。覆土より出土。
- 8 J住居(第21図16~18、20~22、図版8)
16. 入口部の埋甃で、口辺を欠損する。雲母混入暗褐色土で、胴部上半にタールが付着している。懸垂文は陸線で両側に太く浅い沈線があり、その間にくずれた波形の沈線懸垂文をもち、4区画の間は綾杉文が施されている。
17. 胴部下半を欠く深鉢形土器で、口縁は一段薄くなつており、低い陸線によつて4つに切られた部分にはクシ状施文貝で粗雑に施文されている。綾杉文の粗雑なものと受けとれる。口辺部外側にカーボン付着の暗褐色土。
18. 底部を欠く深鉢形土器で、口辺部を横ナデによりわずか削られている。胎土は黄褐色でしまりがある。
20. 煙石安山岩製の多孔石で両面に凹をもつ。
21. 粘板岩製打製石斧で長さ12.5cm、刃巾約4cmのはば完形の短剣形。
22. 黒耀石剥片で核から剥ぎ出された状態を良く示す。約3.5cm。
- 9 J住居(第21図23、24)
23. 黒耀石製石鎌で長さ2.2cm、巾1.5cmの完形品。
24. 玄武岩製短冊形打製石斧で表面は酸化し黄褐色を呈する。長さ約10cm、刃巾4cm。
- 10 J住居址(第22図25、26、図版9)
25. 胴部上半を欠くハの字文の土器で、暗褐色の胎土良好な土器である。
26. 口辺を欠く深鉢形土器で、上半にススが付着する。胎土は暗褐色で、懸垂文の間に粗雑な綾杉文をもつ中期終末期の土器である。
- 12 J住居(第22図27、28、図版9)
27. 28と併に埋甃となつたもので、胴部上半を欠損する。3本の細い陸線にヘラで刻をつけ、撫糸文を地文とした上に細く浅い平行沈線文様をつけ、沈線の間を擦り消している。
28. 27の下にあつた土器で、無文粗製土器である。底部にアジロ痕が見られる。
- 土壤出土遺物(第21図19、第22図29~22、37)
19. D2号土塗から出土したもので、中期初頭の末に位置付けられる土器で暗褐色胎土に雲母を含む。口辺部は綾文が施され、半載竹管の交互の刺突。同連続押引き文。屈折した所では縦の平行沈線が施文されている。
29. 口辺に三本の半円状沈線を刻み、その下にハの字文が施されている褐色の土器で、胎土は良好である。30の凹石とともにB地区の配石遺構中より出土した。
30. 配石遺構中より出土した凹石で椭円形の煙石安山岩の両面に凹部をもつ。
31. A地区1号土塗内より出土した黒耀石製三角石鎌の完形品。
32. B地区5号土塗北側縁に突きささつた様な状態で出土した緑泥変岩製凹石で、両面に凹部がある。
37. B地区6号土塗出土の凹石で安山岩製。

39. (第23図39) B地区1号土塗にすっぽり埋められた土器であるが、口辺、胴部上半、胴部下半の一部が組み合わきつて円形に埋められていた。口辺部は無文で、頸部にX状把手を貼り付けるが、文様構成から4~5コの把手を持つと考えられる。胴部はタシ状器具による平行沈線が施され、その上に低く太い陰線で渦巻文がつけられている。黄褐色土でしまりは良いが、胴部下半は二次的に火を受け、もろくなっている。

○その他 (第22図33~36, 38)

33 緑泥岩製磨製石斧で1H住居北壁周溝内より出土。

34 33と同様に1H住居覆土から出土したもので、玄武岩製磨製石斧欠損品である。

35 1H住居覆土出土の撥形打製石斧で安山岩製である。

36 1H住居覆土出土の輝石安山岩製凹石で両面に凹部をもつ。

38 6H住居カマド内から出土した分離形打製石斧で安山岩製

平安時代住居出土遺物

○1H住居 (第24図40~49、図版9)

40~42 内面黒色研磨の上部器部で、器面外側にロクロ横ナデ痕、内面はヘラで磨きあげている。

43 高台付須恵器底部で胎土は厚く、灰褐色を呈する。器形は壺形と解せるか。

44~49 土師器変形土器で、口辺外側をロクロ横ナデとし、胴部を縱方向に刷毛目、内面は口辺から胴部まで横方向に刷毛目整形痕がある。44、47、49は口径2.6cm以上で、口辺が胴部に対してほぼ直角に近く外反するのに対し、45、46、48は2.6cm以下の口径を持ち、約45度の外反を示す。それぞれ胎土に露母を含む赤褐色のあるいは褐色の土器である。

○2H住居 (第24図50、51)

50、51 内外面とも刷毛目整形痕をもつが、50は刷毛目が横方向に交叉につけられ、51は口辺に横筋状の刷毛目帯をもつ。口辺は厚く、唇折部内面に波をもつ。

2H住居はこの他に坏、須恵器片等が出土していることを付言しておく。

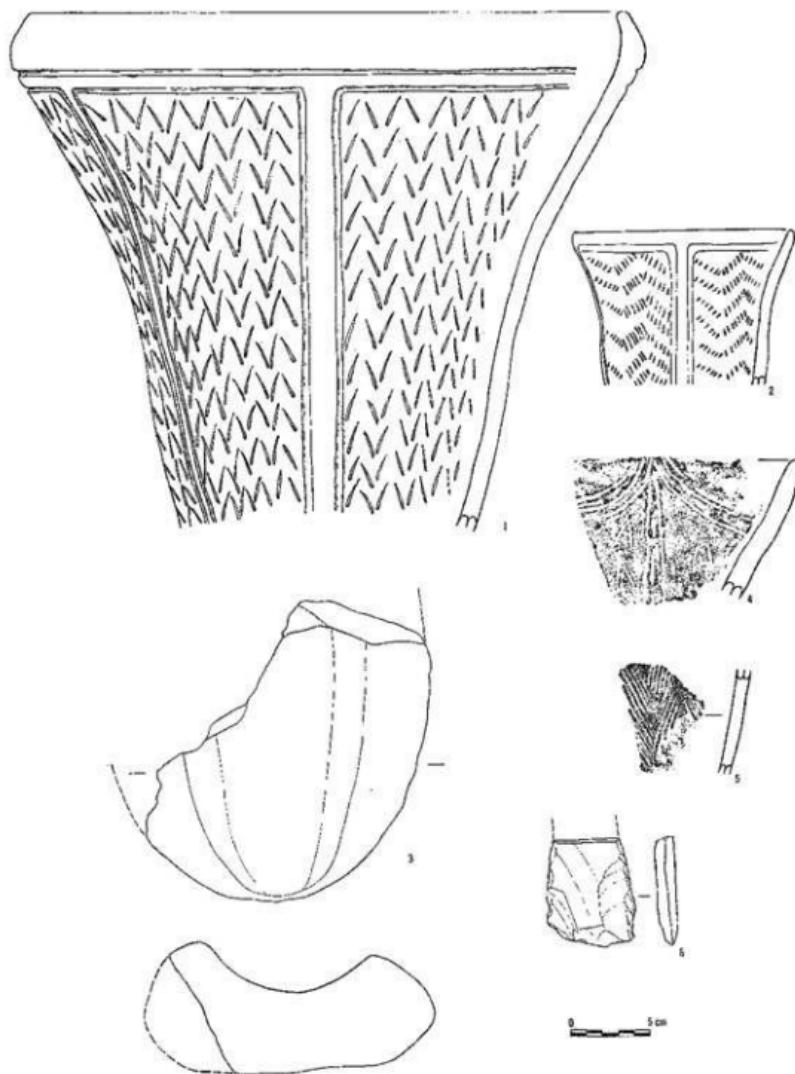
○6H住居 (第24図52~59、第25図60~62図版9)

52, 57, 58 内面黒色研磨土器で、57、58は口唇部がわずか外反し、胎土は褐色を呈し焼成も良好な坏である。58は高台付。

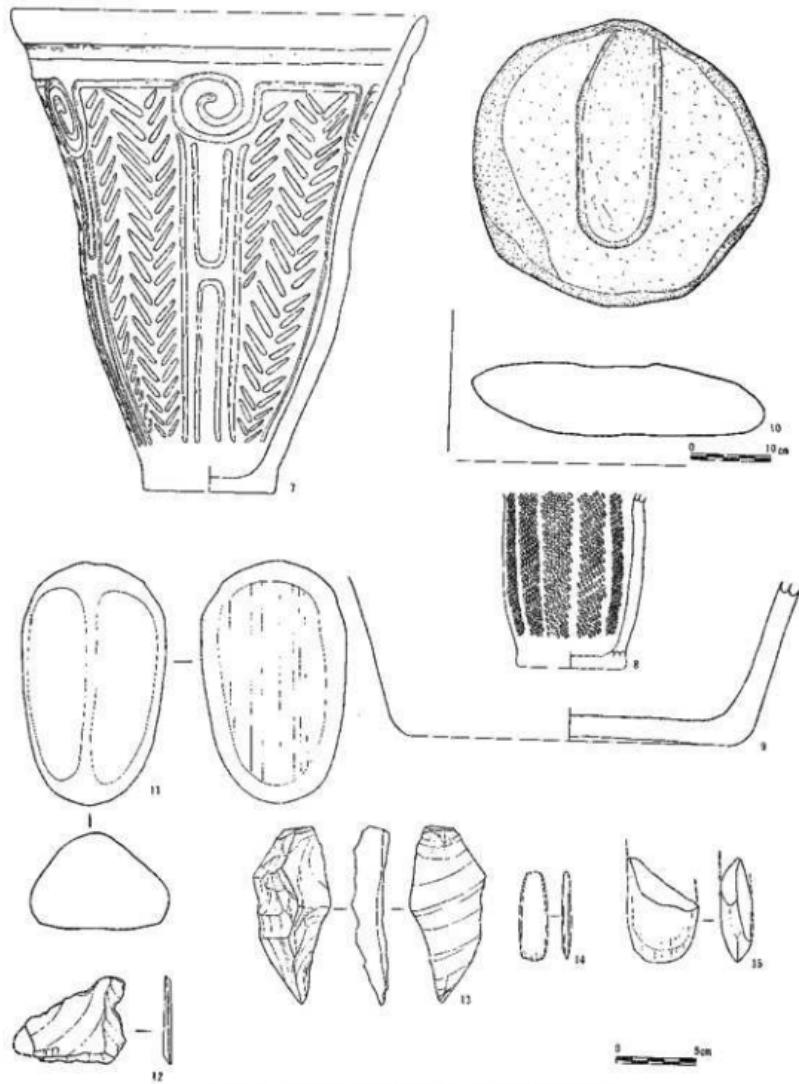
53, 54, 56 土師器坏で、ロクロ整形の良好な土器で、53、54はカマド内から出土し、56は覆土より出土している。54は内面に放射状のヘラ痕が残されている。

55 灰釉高台付土器の底部で、灰釉陶器は中原遺跡では少ない資料である。胎土は灰白色で粒子はざらついている。釉は緑灰色で内面にのみ施釉されている。

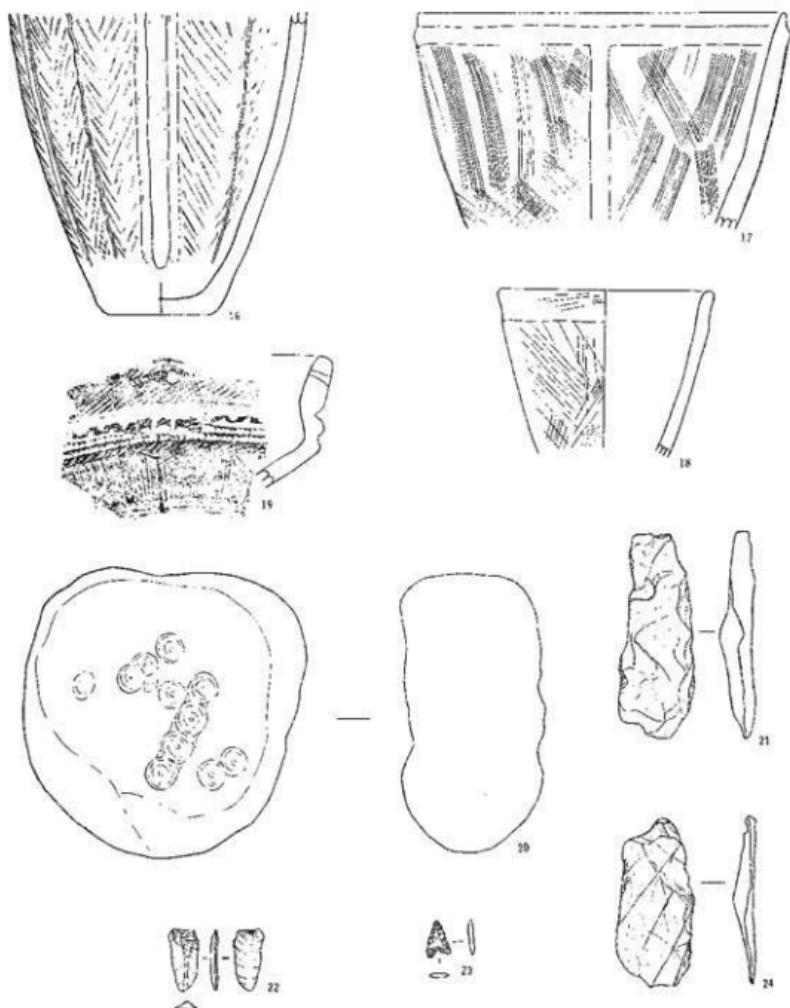
59~62 変形土器であるが、口径から2つに分けられる。2.0cm以上のものは60、62、以下のものは59、61で、59、61が頸部にわずかなくびれ部をもつに比べ、60、62はそれをもたない。内面の刷毛目も小形のものは細かく整形されている。



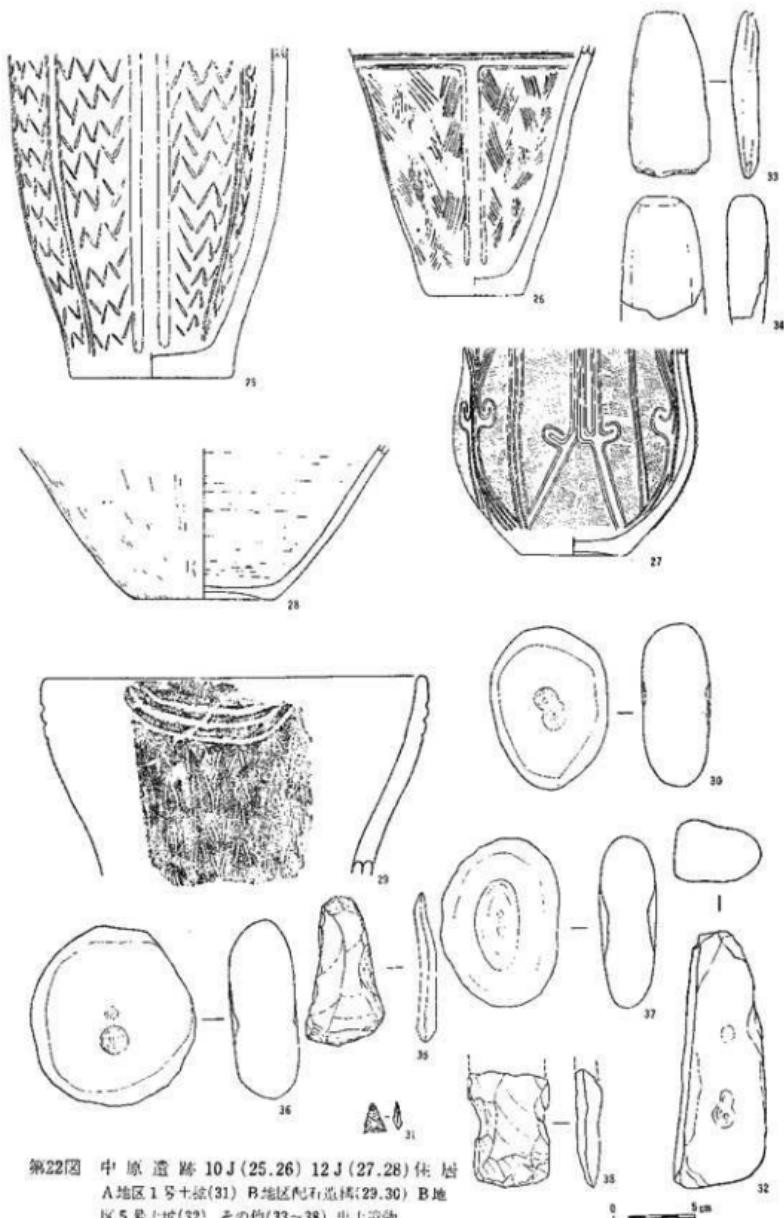
第19图 中原遗址3J(1~3) 4J(4~6) 住居出土遗物



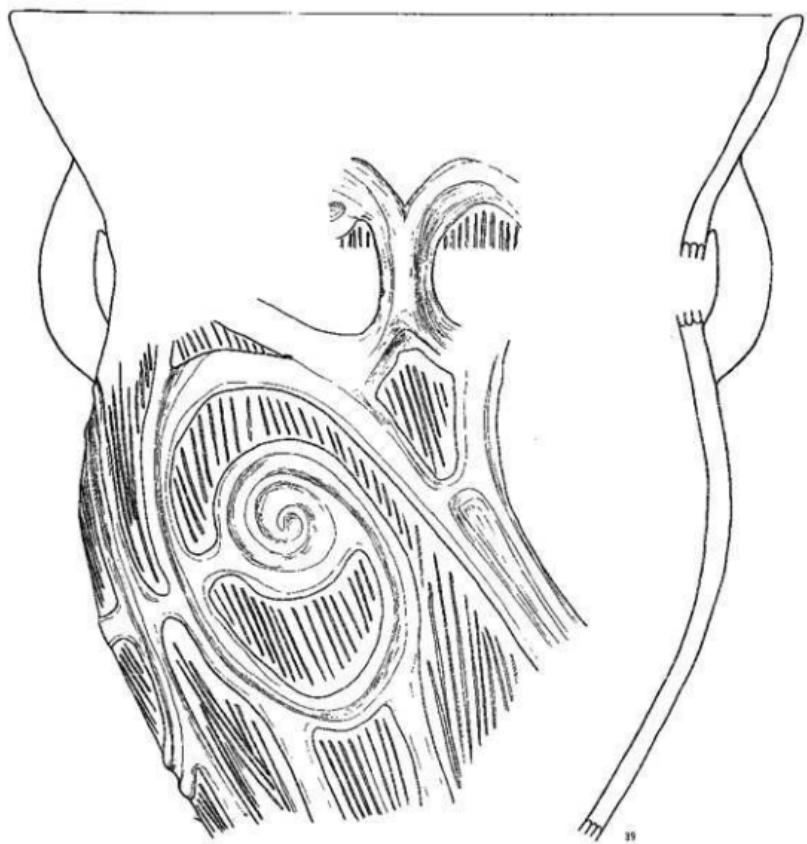
第20图 中原遗址5J(1) 7J(8~15)住居出土遗物



第21図 中原遺跡 8J (16~19) 9J (23,24) 住居出土遺物  
D地区2 墓地(19)

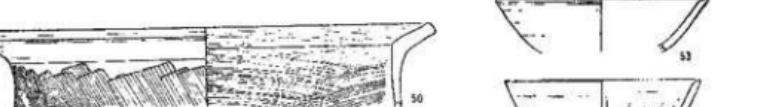


第22図 中原遺跡 10J(25.26) 12J(27.28) 住居  
A地区 1号土塗(31) B地区配石遺構(29.30) B地  
区5号土塗(32) その他(33~38) 出土遺物



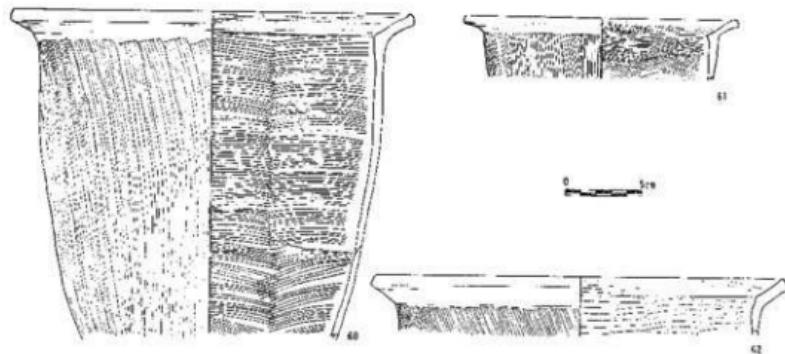
第23圖 中原道路B地区1号七坡窑 窑

0 3cm



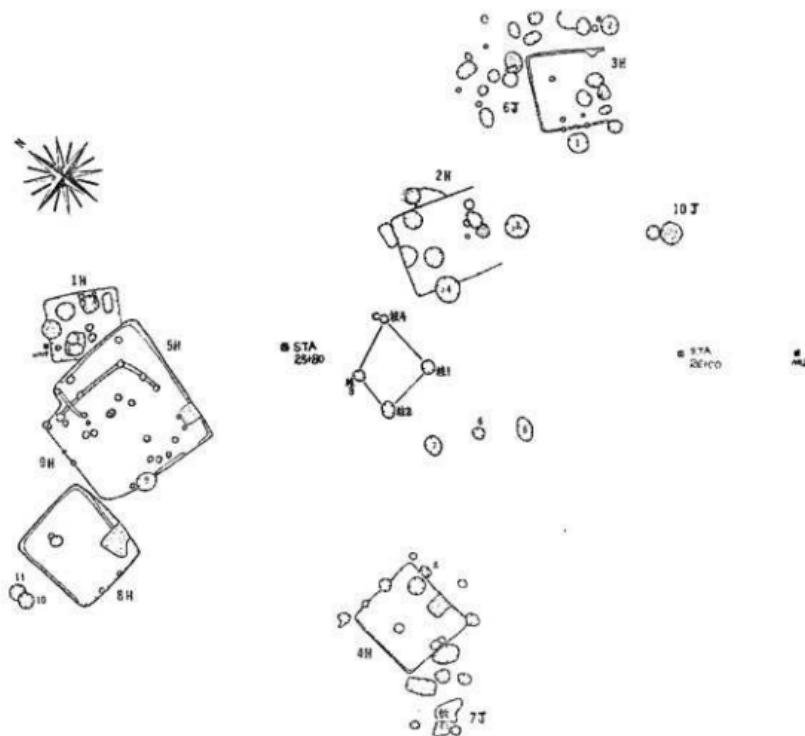
第24図 中原遺跡 1H(40~49) 2H(50.51) 6H(52~59)  
住居出土遺物

0 5cm



第25図 中原道路 6H(60~62) 住居出土遺物

### 3 上平出遺跡の概況



第26図 上平出遺跡全体図



中央道はこの台地を北東から南西に抜けで造られる。調査地区は、半山湧水から流れ出る清流が、平出舌状台地を二つに分け権現沢を刻んでいるところの南斜面で、標高920mに位置する。

冬から春にかけて、このあたりは何も耕作せず、土が強風の折りは砂塵となつて舞い上るが、権現沢東から臨むと、黒いバンド状の土層が褐色土の中に3本位、等高線に沿つて存在する。これがまさしく住居址の存在するところであつた。表土は浅くほとんど20cm位でロームとなるが、中原遺跡に比較して軟弱で赤味がかかつている様である。それぞれの住居覆土は中原と同様黒色有機質腐殖土上で柔らかく、遺物も若干含まれている。縄文時代の住居はコーム面に構築され、覆土が薄く、遺物量も少ないが、平安時代住居は堅穴も10cm~50cm掘り下げられ、覆土は黒色土の下に暗褐色焼上混入土があり、これが遺物の包含層となつてゐる。床面直上に褐色土が薄く堆積しており、かたく、住居埋没過程で最も早いものと推察される。

住居時代は国分期と思われ、土師器が最も多く、須恵器・灰陶がこれに次いで出土している。柱穴は少なく、カマドの位置は東壁あるいは南壁に多く、コーナーに近く、コーナーとカマドとの間に貯蔵穴あるいは灰溜用ピットが存在する。カマドは石組で、袖・天井・壁を石で築き、大きなものでは中央に支柱を置くものもある。

集落として把えるには資料が不十分であるが、前述した様に等高線に沿つてブラックバンドが見られるところから、今後の調査がまたれる。

## a 遺構

### 縄文時代

#### 6 J 住居址（第31図、図版11-20）

- プラン 円形プランと推定され、西側1/4程を3号住居に切られている。
- 辺長 ピクトから推定し約5m
- 壁 不明
- 周溝 なし
- 床 軟弱で南西側に傾斜している。
- 炉 堀り込み炉で100cm×99cmの卵形をしており、深さ30cmである。炉にかぶさる様にして40×60cmの板状の石が存在するところから石畳炉か。
- 柱穴 主柱穴3本、他は擾乱と思われる。
- 遺物 縄文土器片は少なく、ハの字文を有する骨利期の土器片があつた。
- その他 住居内に8個の土壙が存在するが、住居との前述関係は明確ではない。

（註記）

#### 7 J 住居（敷石住居）（第27図、図版13-23）

- プラン 不明、調査地区外にほぼ入り込んでいる。
- 辺長 不明
- 周溝 不明
- 床 炉北側にある敷石部分は東西2.25m、南北1.40mは平石を使用しており、ほぼ水平に敷きつめられている。
- 炉 方形石畳炉であり、炉石は北と東側を残すのみで取り除かれている。
- 柱穴 住居内に含まれる柱穴及び土壙は5個あり、柱穴と考えられるのは2本。
- 遺物 縄文時代後期のものが多く、覆土中には土師器片、縄文中期土器片も含まれている。特に炉の南東2mからは石劍が1本出土している。
- その他 敷石が部分的であるが黒色土中に住居が造られていることから床面は不明、軟弱であり、全面に敷かれていたものか、本来部分的なのが判然としない。しかしながら、諸例を見るかぎり、部分的であつても疑問は残らない。

#### 10 J 住居（第29図）

- プラン 不明。ほとんど削平されている。
- 辺長 不明
- 壁 不明

- 炉 方形石圓かと推定されるが、炉石は抜かれている。 $110\text{cm} \times 120\text{cm}$   
 ○柱穴 不明  
 ○遺物 炉内より縄文中期土器片少量、付近より打製石斧が出土している。

#### 平安時代

- 1H住居址（第28図、図版10-18）
- プラン 方形、5号住居に南西コーナーを切られている。  
 ○辺長  $3m \times 3.6m$  東西に長い方形。  
 ○壁 よくしまつており垂直に近い。  
 ○周溝 なし  
 ○床 よくしまつており焼土を多く含んでいる。  
 ○カマド 西壁及び北壁に存在するが西壁の方が古い。西壁カマドは袖石が抜き取られ、焼土を持つ掘り込みしか認められなかつたが、焚口、煙道を持ち $1.5m \times 1m$ の規模であり、北側では、壁と平行に平石が置かれ、袖石の掘り込みが、壁石両側に存在する。付近の遺物分布からこのカマドを最後のものとした。  
 ○柱穴 5個、貼床から発見できたのは1個  
 ○遺物 北側カマド前部には壺一括が存在し、南コーナーには貯蔵穴と推定される長方形の土壙（ $100\text{cm} \times 50\text{cm}$ 、深さ $18.5\text{cm}$ ）があり、中より土師器、須恵器の杯が出ている。  
 ○その他 床面下、張床の下から土壙が6個発見されており、焼土や遺物を含むものと含まないものとに分けられる。

（宮下）

- 2H住居址（第30図、図版11-19）
- プラン 圓角方形、南側は壁が無い。  
 ○辺長  $4.5m \times 4m$   
 ○壁 北側約 $2.5m$ 、しまり良く垂直に近い。  
 ○周溝 なし  
 ○床 かたくしまつてあるが、張り床がされており、焼土を多量に含む。  
 ○カマド 東壁中央部に焼土の堆積と石がみられ、掘り込みが径約 $80\text{cm}$ 存在しカマドとしたが、北壁中央部の張り床はがすと厚い焼土堆積があり、径 $80\text{cm}$ の掘り込みを持つことから1号住居と同様に造り変えがなされたのであろう。  
 ○柱穴 不明  
 ○遺物 鉄製鋤先、切出形鉄器、鎌、磁石が床面近くより出土しており、南側カマド脇のビットから手ブクネ土器が出土している。土器の大部分は土師器片である。  
 ○その他 住居内及び住居外に土壙が5個ある。

（伊藤）

- 3H住居址（第31図、図版11-20）
- プラン 方形で6号住居を切つている。  
 ○辺長  $4 \times 3.75m$   
 ○壁 垂直に近く、南側を除いて三方に存在する。しまりは良好である。

- 周溝 南側を除いて存在する。西壁中央南よりの周溝にビットが数本存在する。
- 床 良好でかたくしまつているが、南側一部が傾斜している。これは表土が浅い為に削られてしまつたものであろう。
- カマド 南壁中央部に焼土を作つた窓があり、これがカマドと推察される。80cm×70cm
- 柱穴 住居内柱穴と思われるもの2本
- 遺物 鉄製品、土師器壺一括2、他繩文土器片が若干出土している。
- その他 住居周辺に土塗が幾つか存在する。

(経問)

#### 4 II住居址(第32図、図版12-21)

- プラン 潜丸方形、7号敷石住居を切つてある可能性もある。
- 辺長 4.0m×4.5m
- 壁 重直に近く、北壁25cm、南壁15cmで。しまりが良い。
- 周溝 南西壁を除いて三方に存在するが、周溝内には直径8cm~10cm程の小ビットが数個存在している。
- 床 良好であるが、焼土が多く、貼つていた。床面を取り除くと凹凸が激しく、下に土塗が存在した。
- カマド 住居南コーナーに存在し、石組カマドであるがほとんど破壊され、両袖石は比較的良好な姿をとどめており、内側に向つて多少傾斜している。
- 柱穴 不明
- 遺物 炭火物が多く発見されている。炭化物は住居並木と思われ、火災の為に崩壊した様である。茅、板の炭化物も見られる。土器は土師器が多く、一括土器7点で、壺・壺である。また、繩文時代遺物も若干含まれる。
- その他 西側コーナーは土塗が存在し、壁を裏されている。

(浦野)

#### 5 H住居址(第33図、図版12-22)

- プラン 潜丸方形、1号址を切り、9号址を貼つてある。
- 辺長 6.4m×5.5m
- 壁 重直に近く、しまりも良好であるが、西壁は9号住居との重複で残存しない。
- 周溝 9号住居との重複部分で不明瞭であるが、他は一層する。
- 床 よくしまり良好であるが、9号住居を貼つてある。
- カマド 石組カマドで、袖石・火井石・壁石もすべて良好で、袖石中央に支柱石も見られる。東壁南側に位置しており、幅100cm、長さ140cm
- 柱穴 6本(あるいは9号址に関係のあるものも存在するであろう。)
- 遺物 9号址と合せて一括土器18個あり、皿耳・段壺・皿等の灰陶陶器、土師器壺・壺等であり、他に鉄製品が出土している。繩文土器片も若干出土している。
- その他 9号地上的貼床は他部より若干落ちており、焼土を多く含んでいる。また、石の流れ込みも多く、その性格は明確ではない。

(木木)

### 8号住居址（第35図、図版13-24）

- プラン 隅丸方形
- 辺長 4.8 m × 4.0 m
- 壁 垂直に近く、しまりもある良好な壁である。
- 周溝 南側を除いて一周する。幅15~25cmで、東壁の北側部は壁からわずか離れており、カマドに突き当つている。
- 床 しまりがよく良好である。
- 柱穴 北西コーナーに1本、南端部に2本、計3本発見した。
- カマド 両袖石を現存させ、掘込も充分な石組カマドで、カマド及び周辺には灰、焼土が堆積している。
- 遺物 土器がほとんどで、他に鉄製品、灰陶陶器片等が出土している。
- その他 西側に2個の土壙が切り合つており、縄文中期の土器一括が出土している。  
この住居南側中央に壁に付いて段があり、両側にピット2本があるところから入口部を想定させる。

(山谷)

### 9号住居址（第33図、図版12-22）

- プラン 方形、5号住居に切られている。
- 辺長 5.4 m × 5.2 m
- 壁 垂直に近く北壁で50cm、南側で28cmあり、しまりも良い。
- 周溝 カマドと南西側を除いて一周する。
- 床 しまりは良いが貼られている部分が多く焼土を含む。
- カマド 5号住居によつて破壊されているが、掘込160cm×130cmで焼土も豊富である。
- 柱穴 20本、壁柱穴14本、住居内6本。
- 遺物 完成品、一括は少なく、土師器、灰釉等の破片が多い。
- その他 住居内の柱穴6本、及び南側の4本は5号と重複しており、喰する住居を決定するのは困難であった。

(末木)

### 高床遺構（第26図、34図）

5号・2号・4号を結ぶ三角形の中央に存在し、4本発見されている。セクションを見ると、中央に黒色土が垂直に底まで達し、外側はロームブロック、褐色土、暗褐色土が上から踏みつけられた様にかたくしまつている。

- プラン 台形
- 辺長 柱1と柱2は2.3m、柱2と柱3は3m、柱3と柱4は3.3m、柱1と柱4は3m。
- 遺物 なし

(末木)

### 土壤

#### ○1号土壇（第36図）

N 6 グリッド中央にあり、中期初頭の一括土器が横位で出土している。直径1m位で円形、深さ20~25cmの皿状土壙である。

○2号土壙(第36図)

直径1.1mのほぼ円形で深さ約60cmの台形断面の土壙で、スリ石や土器片が出土している。Q 6 グリッドに位置する。

○3号土壙(第30図)

2H住居南東L 8 グリッドにあり、直径1.2m円形の皿状土壙で中期末葉の土器片が出土している。

○4号土壙(第30図)

2H住居南西壁にあり、J 9 グリッドを中心をおく径1.3m位の皿状土壙である。石錐や後期土器片が出土している。

○5号土壙

F 7、G 7 グリッドにかかる、径95cmの皿状土壙で縄文中期の小破片を出す。

○6号土壙

F 9 グリッドにあり、上面に30cm程の段3ヶ組み合さつており、径70cm、深さ45cmの断面方形の土壙である。

○7号土壙

F 10 グリッドにあり、径8.5cm、深さ70cmでやや袋状の土壙である。

○8号土壙(第32図)

4H住居東壁に切られた浅い皿状土壙で、中期初頭浅鉢形土器が出土する。

○9号土壙(第33図)

9H南壁に切られており、中より磨製石斧、中期初頭の土器片が出土し、覆土の焼土混入黒褐色土中よりクリの炭化物が多量に発見されている。

○10、11号土壙(第35図)

8H住居西侧にあり、10号が11号土壙を切っている。

○12号土壙

E 29 グリッドに位置し、小さなピットが密集した土壙である。土偶下半及び台付土器が出土していることから祭祀的色彩が強い。

○13号土壙(第36図、図版18-58)

C 31 グリッドにあり、中期初頭の一括土器が横倒しになつていて。土器は土壙上面にあり、80×60cmの洋梨形のプランに断面台形をしている。

○14号土壙(第36図、図版14-26、23-61)

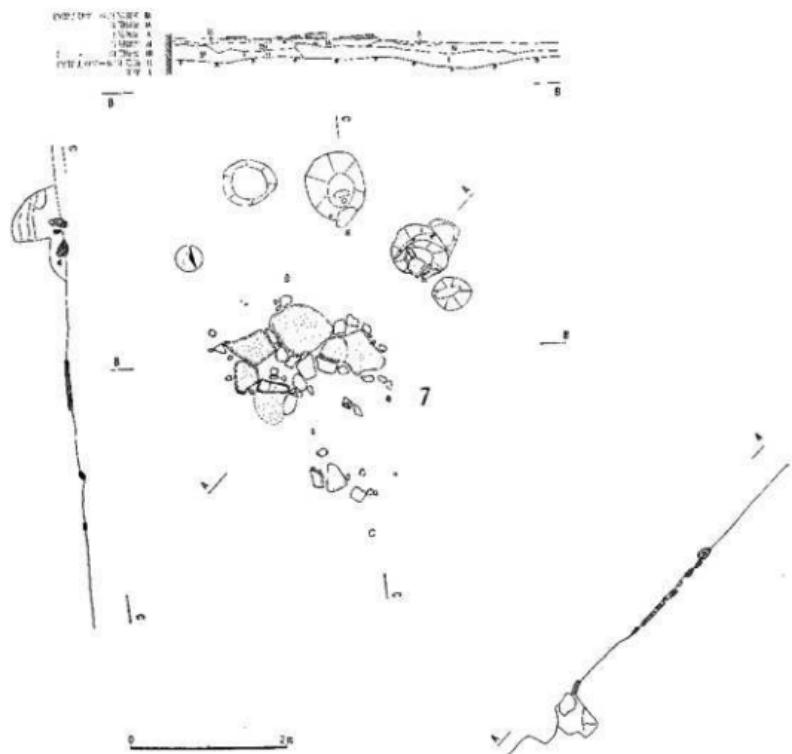
E 34 グリッド中央にあり、中期初頭土器一括が土壙上面を覆い、径60cmの皿状土壙である。深さ10cm。

○15号土壙(第36図)

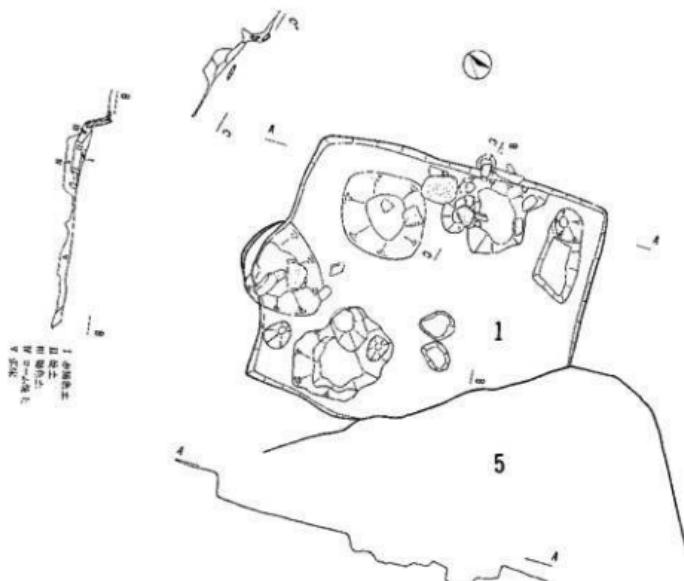
B 60 グリッドにあり、プランは不明で、30cm位の平石の側に一括土器が散乱する。

○配石遺構(第36図、図版14-25)

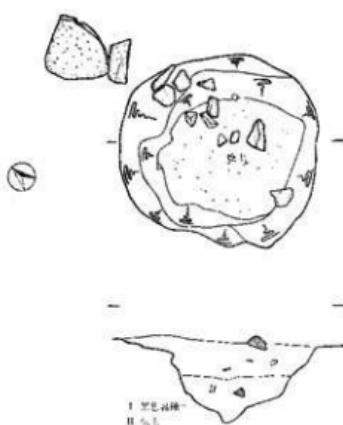
Z 62 グリッドに主要部分が含まれ、配石内には多孔石、打製石斧等が集石される。長さ120cm



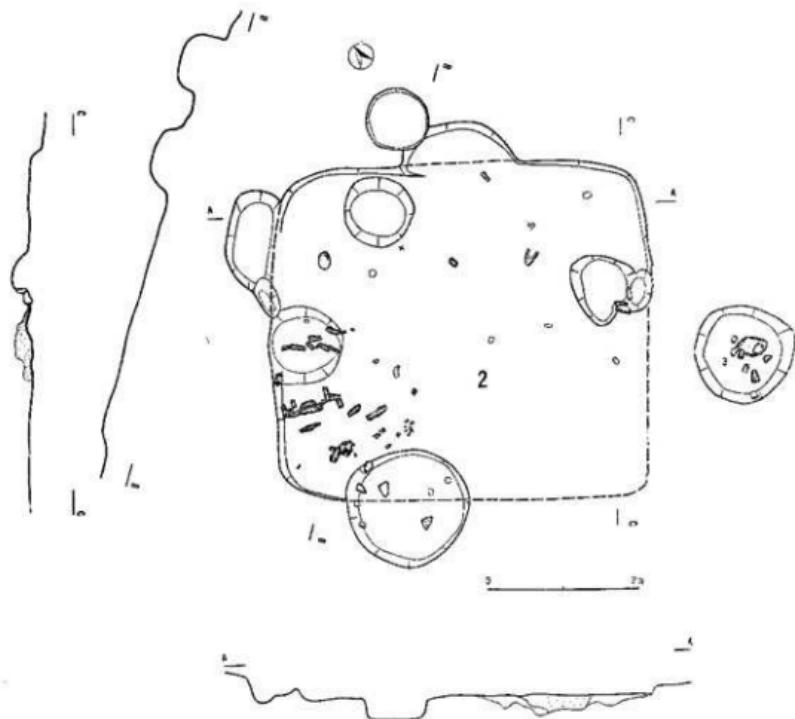
第27圖 上平出遺跡 7J 住居



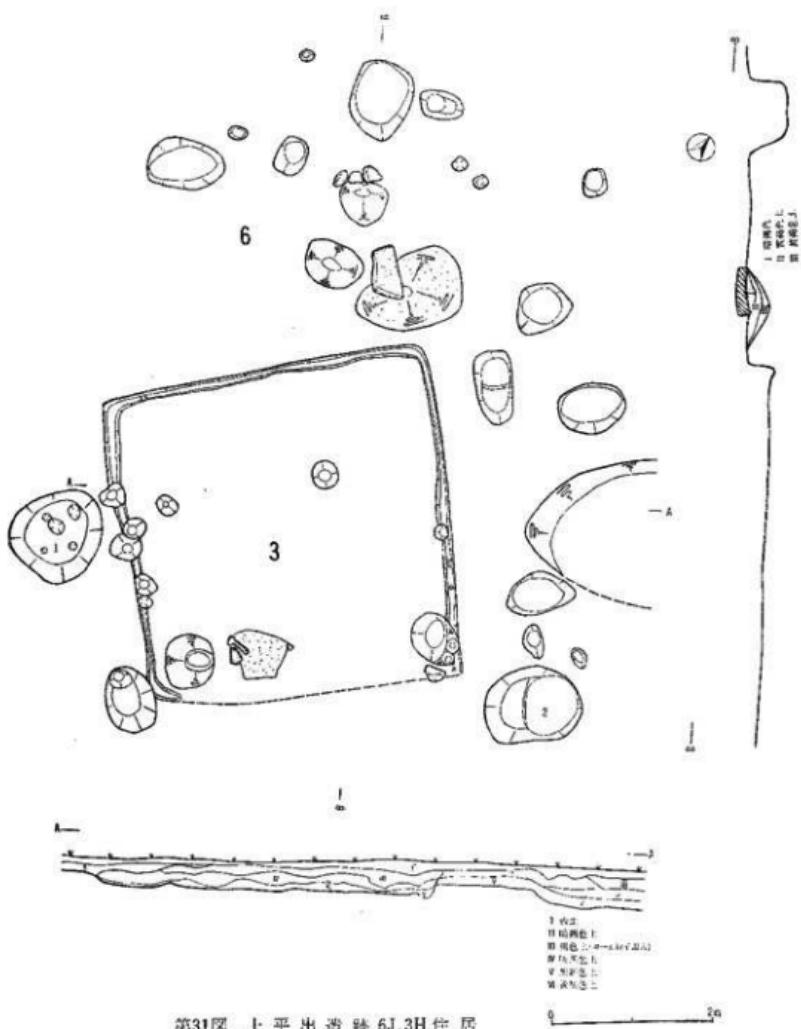
第28図 上平出遺跡1H住居



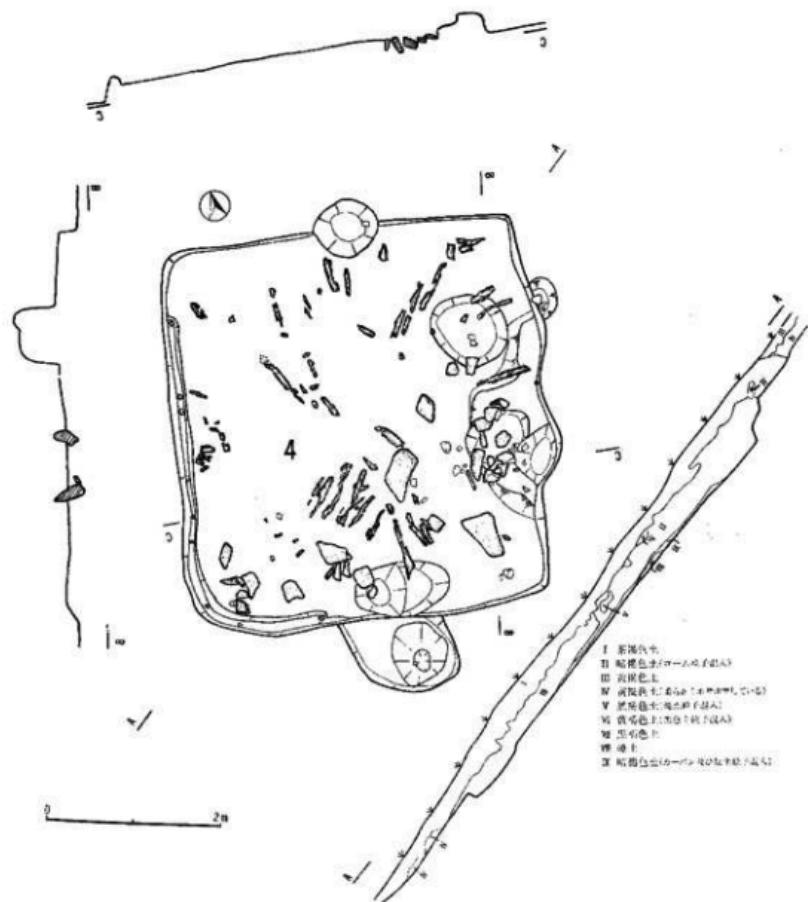
第29図 上平出遺跡10J住居



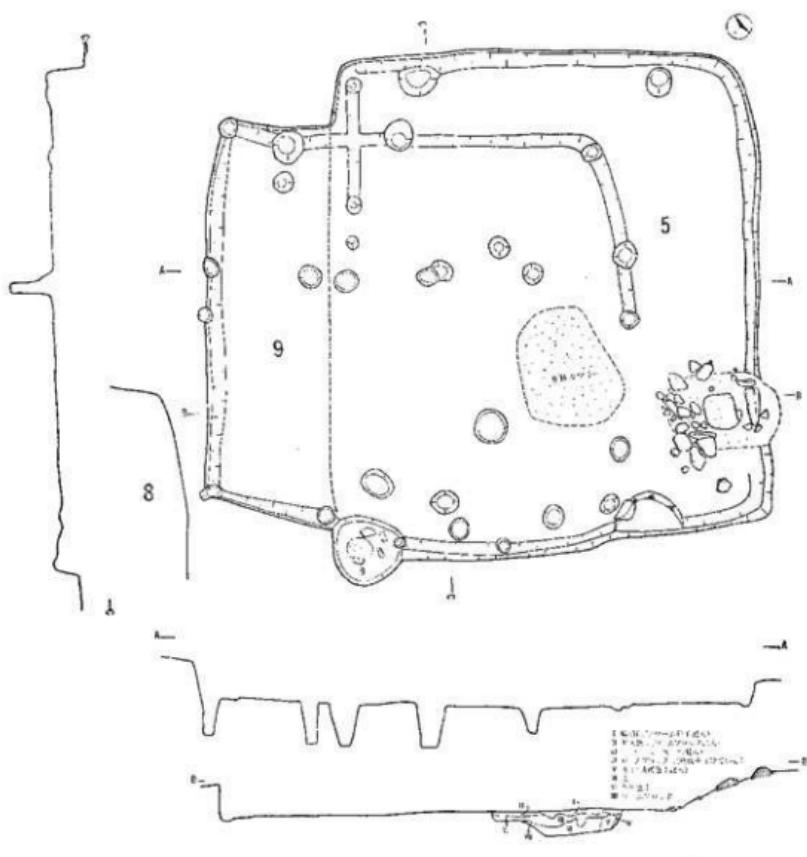
第30圖 上平出道路 2H 住居



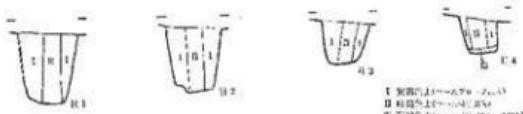
第31図 上平出露 6J.3H 住居



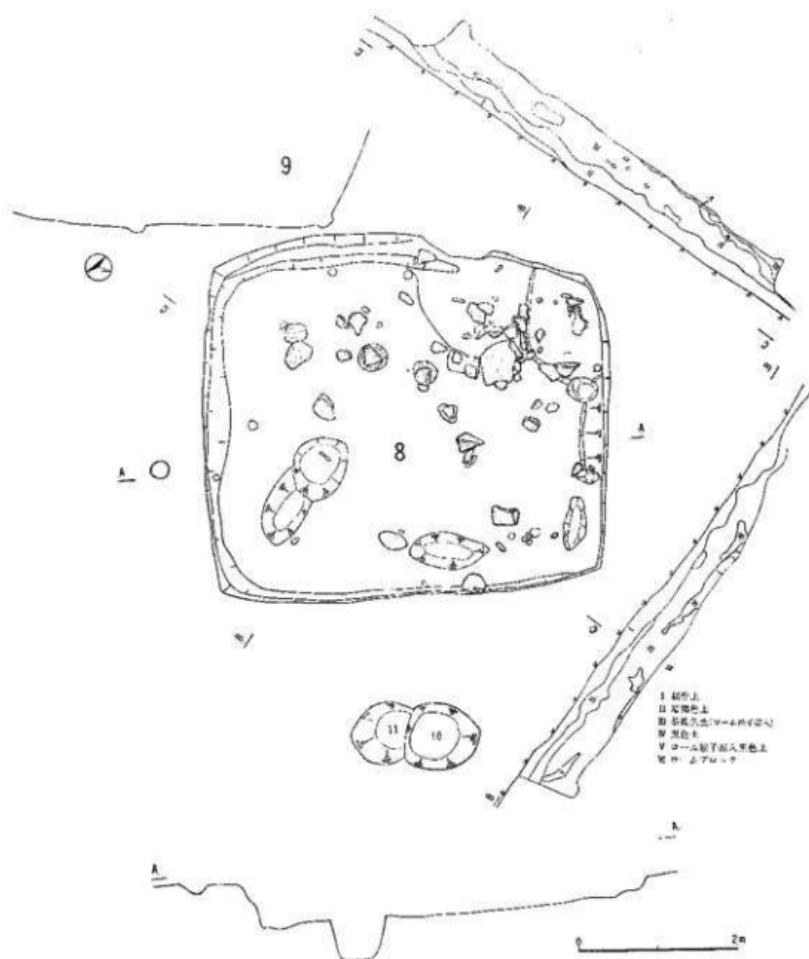
第32図 上平出遺跡4H住居



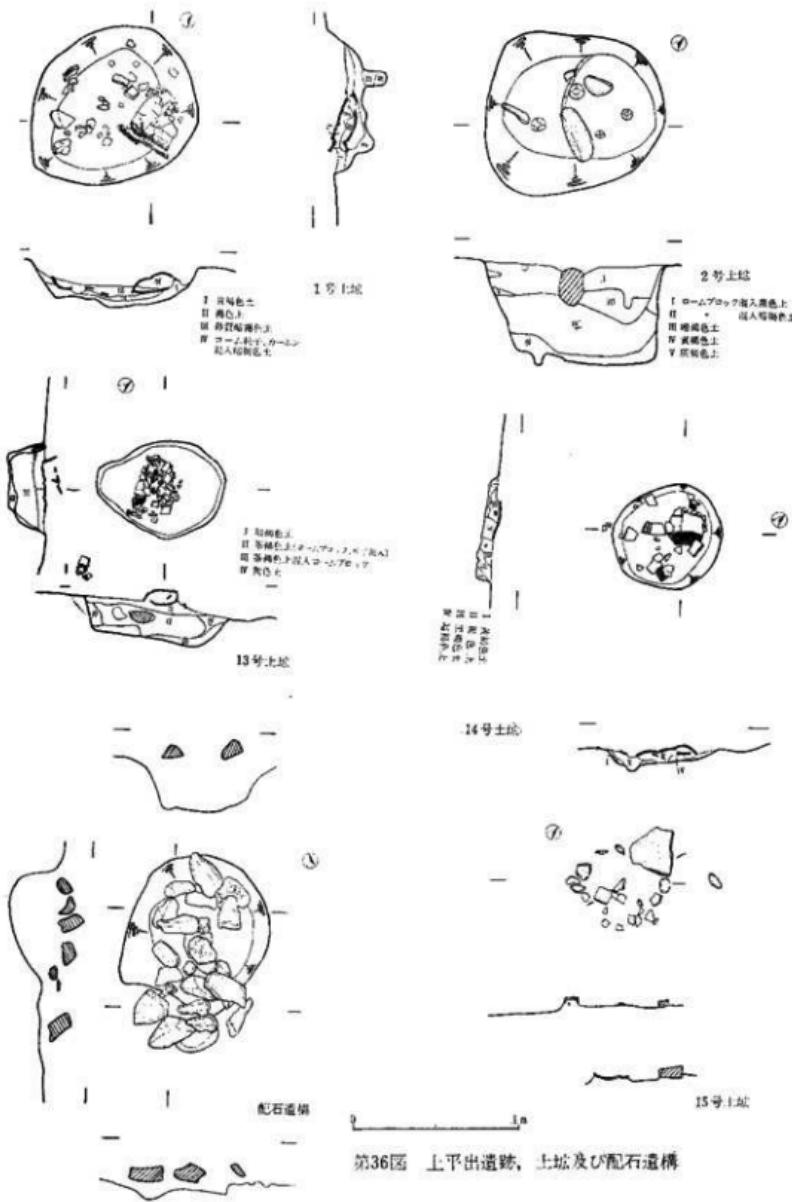
第33図 上半出 5H.9日 住基



第34図 高速道路柱穴セクション図  
(第33図 参照)



第35圖 上 平出追跡 8H 住居



第36圖 上平出遺跡、上坡及下配石遺構

巾60cmで、その下には径90cm位、深さ40cmの皿状土壙がある。

## b 遺 物

当初この遺跡の発掘にあたつた時、縄文時代中期、特に米葉の遺物が主体と確認され、土師器、灰釉、あるいは縄文中期初頭の土器片にふれることが少なかつた。

平安時代住居の保存率は高く、7軒の住居から土師器をはじめ須恵器、灰釉陶器、鉄製品などが出土している。中でも2Hでは鉄製鎧頭、鎌が出土し、4Hではおびただしい建物材料の木炭が出土し一部を石膏で取り上げる作業を行なつた。

### 縄文時代

#### ○6J住居（第37図1）

1. ハの字文の土器で沈線により4区画されている。底部を欠き、赤褐色胎土である。

#### ○7J住居（第37図2、3）（第38図30-57）

30~51 縄文時代後期の土器片で覆土より出土した。

52~56 石鎧で53を除いて長さ2cm前後のものが多く、黒曜石製である。

57 角閃安山岩製石劍で先端部を欠いているが、長さ16cm、直径2.5cmの円形断面をもつ。

2. 鷲石安山岩製の凹石で、片面にのみ凹部がある。

3. 安山岩の剣片で長さ7.5cm、巾2.5cmである。

### ○七塚内出土遺物

#### 1号土壙（第40図62）

62 口縁はゆるやかな波状で尖端部に粘土ひも貼付の渦巻文を四方に配し、口縁とその下に2条の半肉彫押引連続の半載竹管文をめぐらす。その下は30度位の外反する屈折をもち、屈折部は縦方向に半載竹管平行沈線部があり、胴部は1本の太い押引連続文の施された隆線と、6本の半肉彫隆線をめぐらす。波状口縁突起部の下にあたる位置に蛇を模したと思われる粘土ひも貼付があり、それには半載竹管の押引文が施されている。胴部には貼付文より竹管平行沈線の懸垂文が4本あり、後の人形文の原形的なものを感じさせる。胴部からたれさがる貼付文は斜めのものと、垂直のものとが交互に配され、懸垂文の間は無文である。胎土には雲母を含み暗褐色の器面である。

#### 8号土壙（第40図65）

65 浅鉢形土器で口縁に刻みを有し、口辺外側に縄文帯があり、半載竹管平行沈線で無文部と区画されている。内面口辺部は半載竹管の押引文沈線で渦巻文の3~4本の平行沈線を抜く。胎土には雲母を含み、赤褐色を呈する。

#### 9号土壙（第40図63、64）

63、62と同時期に位置すると思われる筒形の土器で、文様を口辺から胴部上に集中させ、半載竹管による施文が行なわれている。胴部には62と同様、人形の懸垂文をもつ。暗褐色で雲母を含む。

64 安山岩製磨製石斧で、完形品であるが半分に割れていたもので、この土壙が焼土を多く含むところから熱を受けて割れたものと思われる。この他に東の炭化物が多量に出土している。

#### 12号土壙（第37図27、29）

27 台付土器の台部のみで赤褐色、無文である。

29 土偶の胴部下半で、正面、側面に刺突文が施され、沈線が足の間と足先端裏側にある。暗褐色で

焼成のよいものである。

13号土器（第39図58）（第37図26）

58 中期初頭の土器で、61～63に共通した文様構成をもつ。雲母を含む暗褐色の土器である。

26 小型土器の底部で細い沈線を器面に、底部はアジロ底の褐色胎土の土器である。

14号土器（第39図60、61）

60 口縁に刻みをもち、その下に6～7条の押引き平行沈線をもつ褐色の小型土器で、底部を欠くのみであろう。

61 胸部上半に半載竹管で、表面全体を平行沈線で埋めつくしたもので、口縁部に半肉彫の半載竹管押引き文を施す暗褐色の土器である。

15号土器（第39図59）

59 無文の粗製土器で褐色の胎土である。

その他

○石鎚（第37図4～8、10～16）

4～8、15、16は4H住居覆土から発見されたもので、黒曜石製で剝離は粗雑である。7は剝片の先端部のみ二次加工が加えられ、未完成品である。10は2H住居覆土黒曜石製の鎚で、脚を1本欠いている。11は5H住居覆土、12はK2グリッドより出土したもので、あるいは10Jに含まれるものかもしれない。13はチヤート製で、E8グリッドより出土した。14はD7グリッドから出土した黒曜石製の小型鎚である。

○ドリル（第37図9）

4H住居覆土より出土した黒曜石製品で、先端は断面三角形を呈する。

○磨製石斧（第37図19～21）

19はQ21グリッドから出土した安山岩製品で、20は安山岩製ハマグリ刃の局部磨製石斧で、頭部には整形打痕がある。R20グリッド出土、21は蛇紋岩製偏平両刃磨製石斧で、複形をしており、使用痕の大部分が刃部と平行か20～30度の角度で見られる。

○石匙（第37図22）

粘板岩製で、もろい粗製品である。表面は黄褐色に腐蝕している。

○打製石斧（第37図23～25）

23は8H住居より出土したもので、縄文時代後期によく見られる大型の打製石斧で安山岩製である。24は4H覆土より出土したもので安山岩製。25は5H型土出土の玄武岩製分の鉤形を呈し、くびれ部はつぶされている。

○土偶（第37図28）

O21グリッドより出土したもので、胸上部に欠損した部分があり、何か頭部以外のものが貼り付けられていたことを示している。胎土はもろい。

○ポイント（第37図18）

P20グリッドより出土した黒曜石製で、先端、基部とも欠損している。

平安時代遺物

1H住居（第41図66～71）

○杯（66～69）

66はロクロ横ナデ整形。糸切り底で、黄白色の須恵器である。カマド南の貯蔵穴より出土。67はロクロ整形の後、外面底部近くをヘラけりし、内面は放射状にヘラ整形成痕が見える。底部は糸切りの赤褐色胎土の土師器である。68は整形成法は67と同様な赤褐色の土師器である。69は灰褐色を呈する須恵器で、ロクロ横ナデ整形成痕がよく残る。

○壺 (70、71)

70はヘラ削りの変形土器で他住居から出土を見ない。褐色で焼成良好な土器である。71は黒褐色で胎土のもろい壺で、口辺を除いて刷毛目整形である。

2H住居 (第41図151、70~79)

○壺 (151)

内面研磨黒色土師器では辺はわずか外返し、器面は黄褐色ロクロ横ナデ整形の焼成良好な土器である。

○壺 (72~75)

72は口辺に粘土を貼り付けて補強を計つている所に特徴が見られ、73は90度近く口辺が外反し、胴部内外面とも刷毛目がみられる。いずれも赤褐色で、雲母を含み荒い胎土である。74は小形の壺で口辺より胴部が張る様である。器面外側の整形成痕が特異で、水平な刷毛目痕がある。胎土は褐色でしまりがある。75は充底部で外側は刷毛目痕が見られないが、内面は強くこまかく残されており、木葉痕底部である。

○砥石 (76)

黄褐色のなめらかな石材で、石質は不明確であるがよく使用されている。2H東北壁に接して床面より発見されている。

○鉄製品 (77~79)

77は鍔頭で保存が良く完品である。出土状態は床面に密着していたが、周囲の焼土により保存効果があつたものと思われる。78は鍔であるが、これも床面密着の状態で出土し焼土に覆われていた。欠損部には刃が無く、恐らくこれより着柄部であつたと推察される。78は、右側先端部断面が三角形であるところから工具にしたものか。

3H住居 (第41図80) (第42図81~92)

○壺 (81~86)

81、82は墨書きのある土師器で、外反した玉縁の口縁とヘラ削りの側面下半が特徴であり、82は内面黒色土器である。底部はどちらもヘラ切り底である。83~86はいずれも灰釉陶器で、83は胎土灰白色で灰白色釉が器面全体に施されている。84は内側全体と外面部分的に灰釉が施され、胎土は灰白色で細かい。85は器面全体に灰釉が施され、色・胎土とも84と同様である。85は黄褐色釉で胎土は灰白色の陶器で、いずれも口辺が外反するのを特徴とし、焼成もよく焼いた音は金属的な響をもつ。

○壺 (80、87~90)

大型のもの (88、89) と小型のものが見られ (80、87、89) 、大型のものは口辺を補強している。80は2H74と類似しており、水平の刷毛目をもつが他のものはすべて器面外側を縦方向の刷毛目が見られる。胎土は雲母を含み、壺と比較すれば相当荒くもろい。

○鉄製品 (91)

目釘穴があり、刃を持つところから鎌ではないかと考えるが、腐蝕があり、明確ではない。

○その他 (92)

注口破片と思われ、接合部がヘラで磨かれている。

4 H 住居 (第4 2 図93~ 103)

○壺 (93~98)

いずれも土師器で胎土の精選されたものである。93は赤褐色の色調に口辺部をロクロ横ナデ、底部近くは横にヘラ削りを行ない、底部もヘラ削り底である。94は口辺部を欠くもので、高台をヘラ削りで造り出している。器面はロクロ横ナデ整形で、黄褐色胎土である。95は玉縁の口縁に、器面下半を斜めのヘラ削り、内面を放射状の棒状器具による整形痕を残す赤褐色の土師器である。96は底部を欠いているが、器面に明瞭なロクロ横ナデ痕が見られる。97は皿にちかいもので、底部ヘラ切り、側面下半をヘラ削りしている。赤褐色で焼成は良好である。98は口辺を欠く。底部は糸切りで中央に刻書らしいものがあるが、不明。ロクロ横ナデ整形が器面にみられる。

○燈明皿 (99)

白色胎土に内面全体と外面口辺部に黒色釉をかけたもので、平安時代以降の燈明皿と思われる。

○壺 (100~ 103)

いずれも赤褐色胎土に雲母を含むもので、100は木葉模様が底部にあり、102は頸部に2段の屈折をもつ。103は内面刷毛目痕が薄く、不明瞭である。

5 H 住居 (第4 3 図 104~ 123)

○壺・皿 (104~ 117)

土師器は104、105、106、114、115、116で、内黒土器が105、106、114の3個体。墨書きが104、116に見られる。104、115、116は底部、側面のヘラ切りで外反する玉縁がある。105、114は106に比較して胎土は厚いが、106は器面内外にロクロ痕をハツキリ残している。底部は器面が剥離して整形方法を見る事ができない。また、105は口辺が外反せず、外側上半まで黒色を呈する。

須恵器は112.1点で、高台付の灰色胎土である。

灰釉陶器は107~111、113で高台付底部である。口縁は鋭く外反し、灰白色のきめ細かい胎土で108を除けば釉は灰黄色の薄い釉が施されている。108は段皿で、緑色釉が口辺外側にかけられている。117は耳皿で縁を欠いているが焼成は良好で堅くしまり、釉は緑色で内面に施釉される。底部は糸切りである。

○壺 (118~ 121)

118は須恵器底部で段目整形痕をわずかに残した灰黑色胎土で内側に指で削った跡も見える。119 120は土師器甕で、胎土に雲母を含んだ赤褐色上器で、120は口辺に粘土を貼り付け補強が計られている。119 口辺内側屈接部にカーボンの付着が認められている。121は常滑甕の赤褐色を呈し、胎土は灰黒色に赤みがかかつていてしまりは良い。

○釜 (122)

ツバ部のみの土師器釜で、胎土粒子細かく、赤褐色を呈する。

○鉄製品 (123)

平らな鉄板を中央からひねりを加えた様な鉄製品で、腐蝕がはげしいが、断面長方形で馬具の一部

かとも考え得る。

#### 8 H住居（第44図124～145）

##### ○壺・皿（124～133）

土師器は126、129、130、132、133である。132、133は内黒土器で、129、130は底部ヘラ切り、及び側面をヘラ削りをしており、126、129、133は玉縁口縁を持つ。胎土は内黒土器を除いて赤褐色で粒子も荒く柔らかいものが多い。灰釉陶器は124、125、127、128の4個で、124の高台付のものの他、図上復元は完全にならない。口辺はいずれも鋭くクチバシ状に外反している。124の胎土は灰白色で粒子はやや荒く、釉は外面が透明で内面は灰緑色である。125は胎土は細かく、釉は黄白色半透明で口辺内外に施される。127は、胎土粒子はザラついており、釉は灰色釉が全面を覆っている。128は底部糸切りで、内側には0.2mm程の厚い濃緑色釉がかけられ、釉にわずかではあるが貫入が見られる。

131は常滑焼の壺で胎土、色調とも5H住居出土の121と同様である。

134、135は墨書き片の土師器であるが器形は129と同様と思われる。136は灰釉瓶形陶器で、胴部上半のみである。肩から外面全体に緑色釉がかかり、内面はロクロ痕をのこす。

##### ○壺（137～139）

いずれも褐色の色調で胎土には雲母を含む。内面も外面同様刷毛目があるが、137、138は明瞭ではない。

##### ○釜（140、141）

褐色で雲母含有胎土で、内面に刷毛目をもつ。ツバは140がつぶれていますが、141は水平に張り出している。

##### ○鉄製品（142、143）

141は両端を欠損している断面三角形の鉄片であるが用途不明。143は木質を付着させているところから、鉄鎌等の着柄部としたい。

##### ○その他（144、145）

144は土師器底部で、ヘラ先で意味不詳な刻みがある。145は土玉で、粘土を手で丸めたものが焼成も受けている。

#### 9 H住居（第44図146～150）

##### ○壺・皿（146、147、149、150）

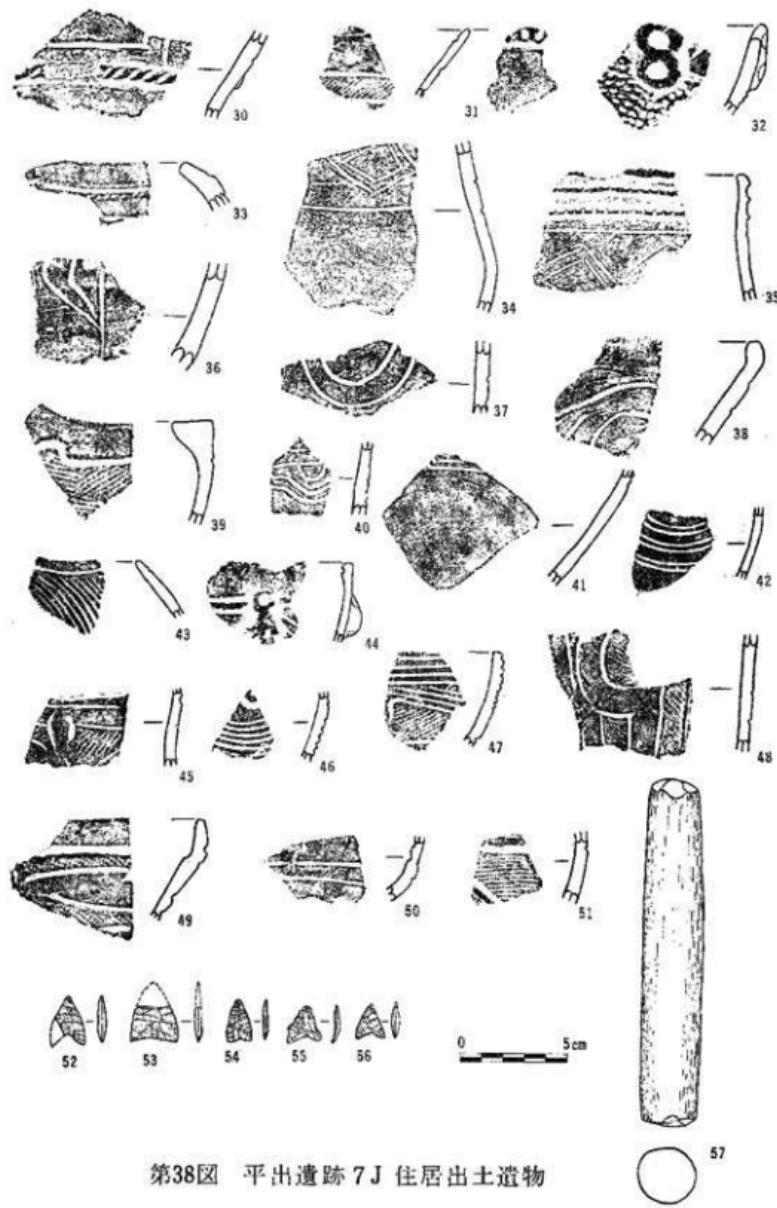
このうち土師器は146、150で底部側面のヘラ削りを共通とし、146は底部ヘラ切り、墨書き一部のある底部破片で赤褐色を呈する。150は玉縁の底部欠損土器で、赤褐色胎土である。147、149は灰釉陶器で高台を付けるが、高台内面が器面に対し直角に造られるのに比べ、外側はふくらみをもつ。口縁は鳥のくちばし状に外反し、147が灰白色釉で胎土粒子の細いのに149は粒子もあらぐ、釉は緑色で内面底に重ね焼きの跡が残る。

##### ○壺（148）

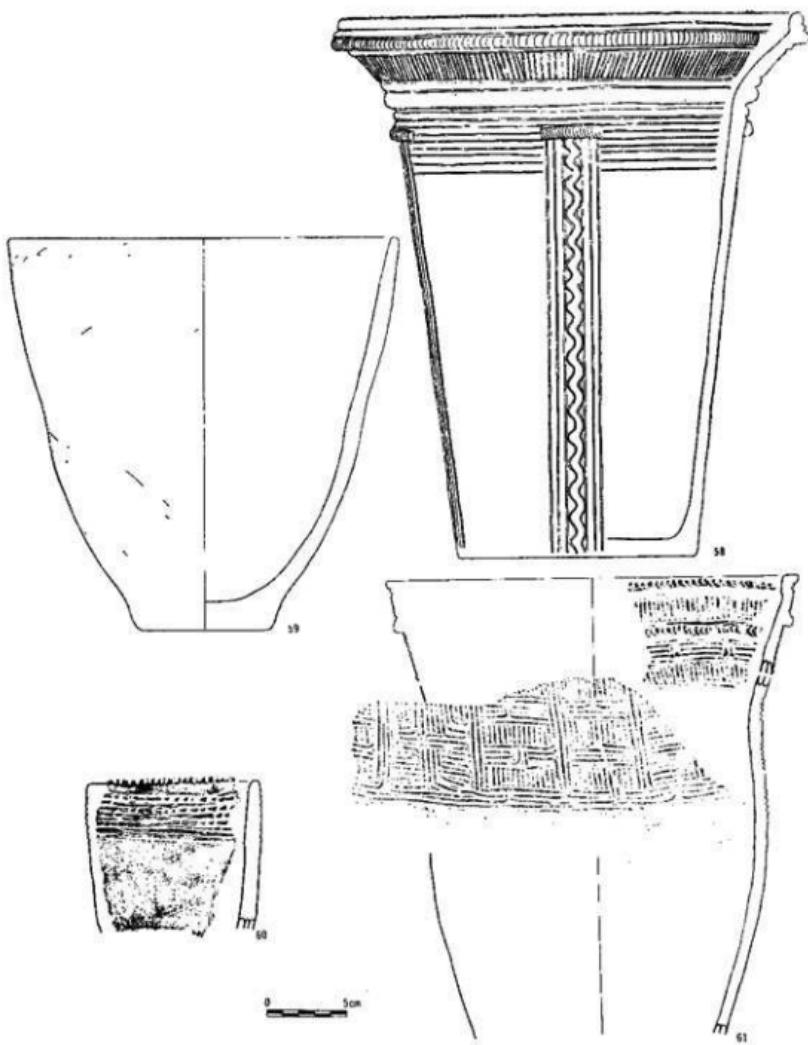
灰釉陶器で壺口辺のみである。釉は内面にかかり、胎土は灰色で粒子はやや荒い。器面にロクロ整形痕を明瞭に残す。



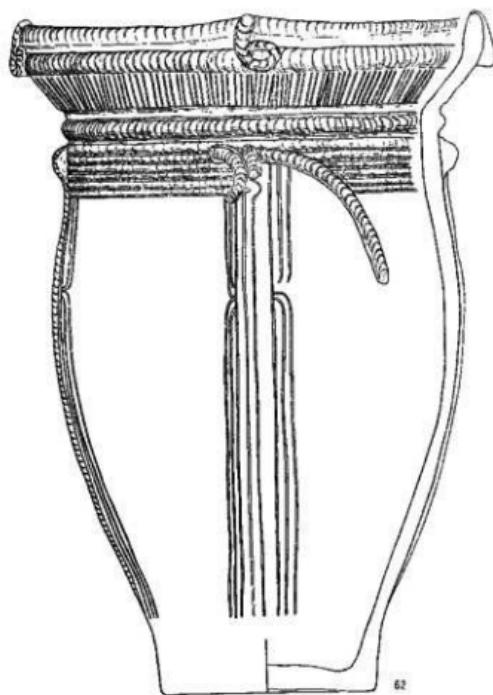
第37図 上平出遺跡 6J(1) 7J(2.3) 居居  
その他の(4~29) 出土遺物



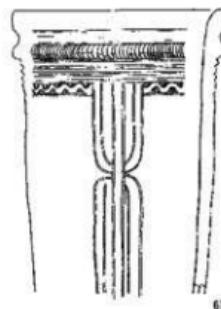
第38図 平出遺跡 7J 住居出土遺物



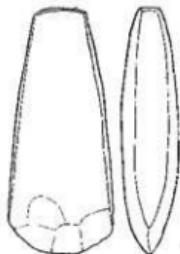
第39图 上平出道路土坡出土遗物



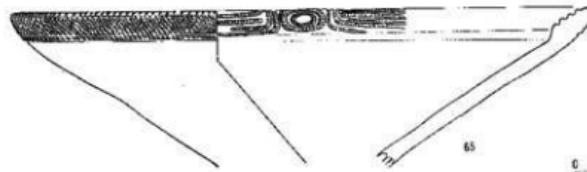
62



63



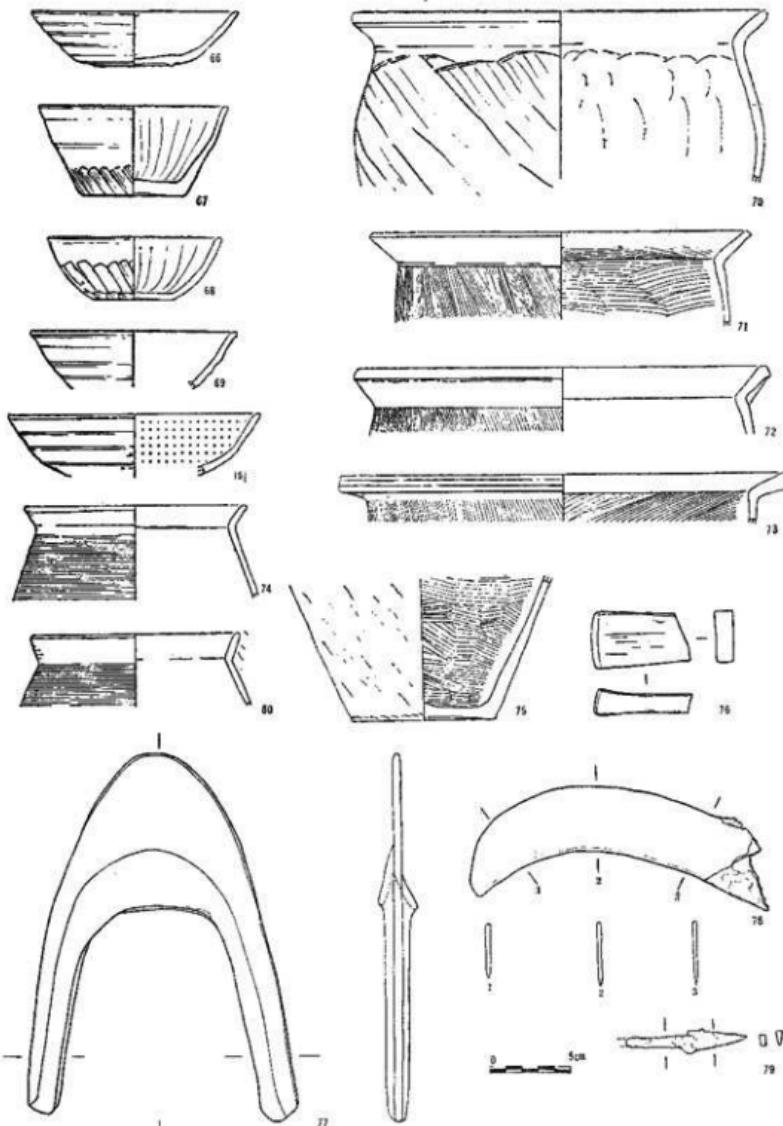
64



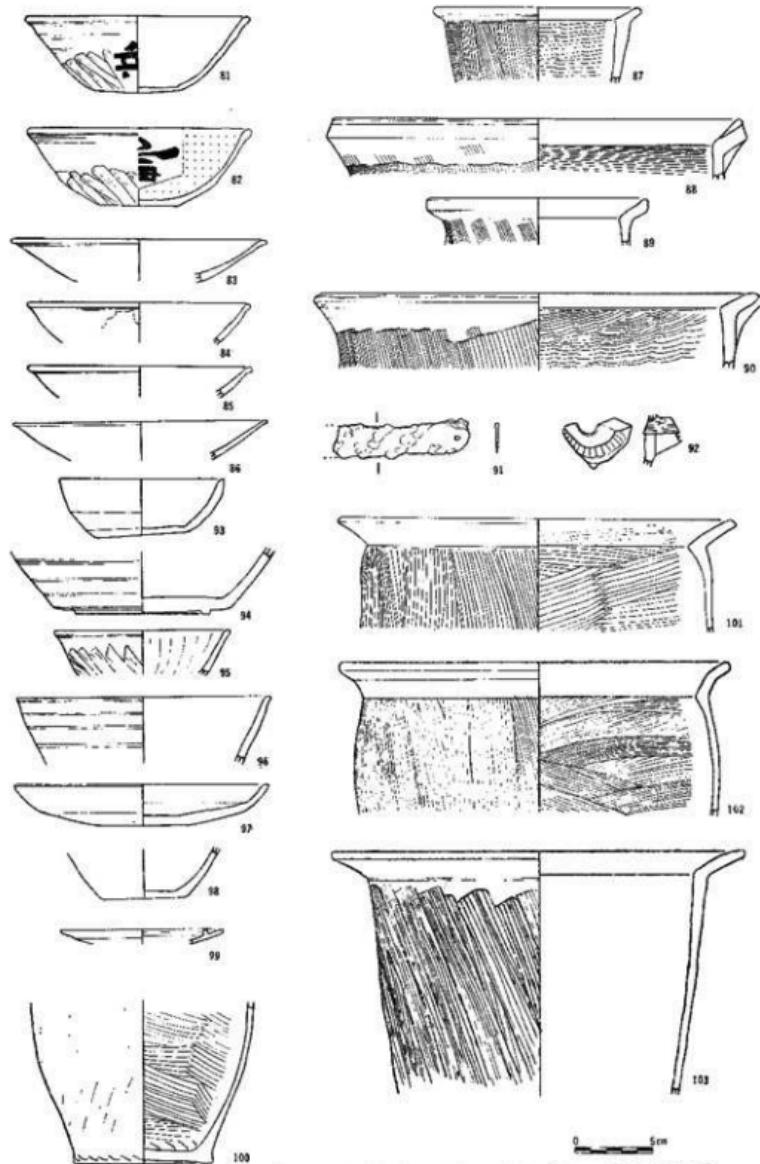
65

0 5cm

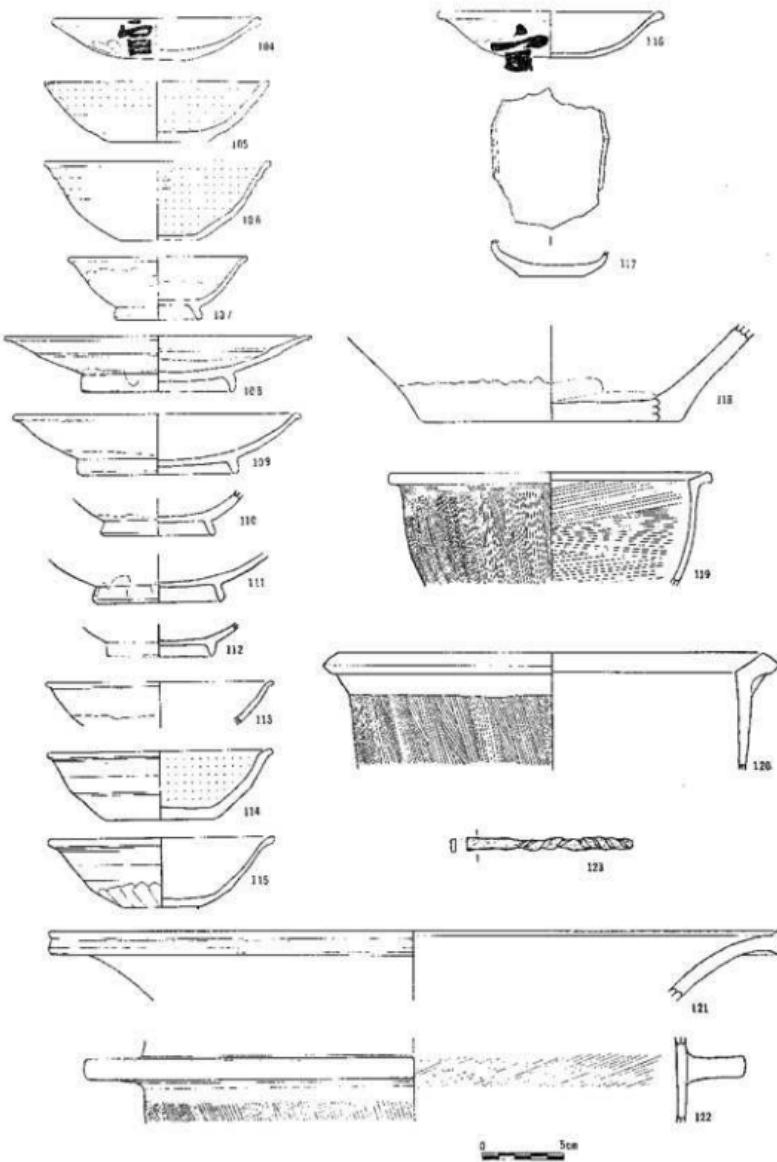
第40圖 上平出遺跡土塚出土遺物



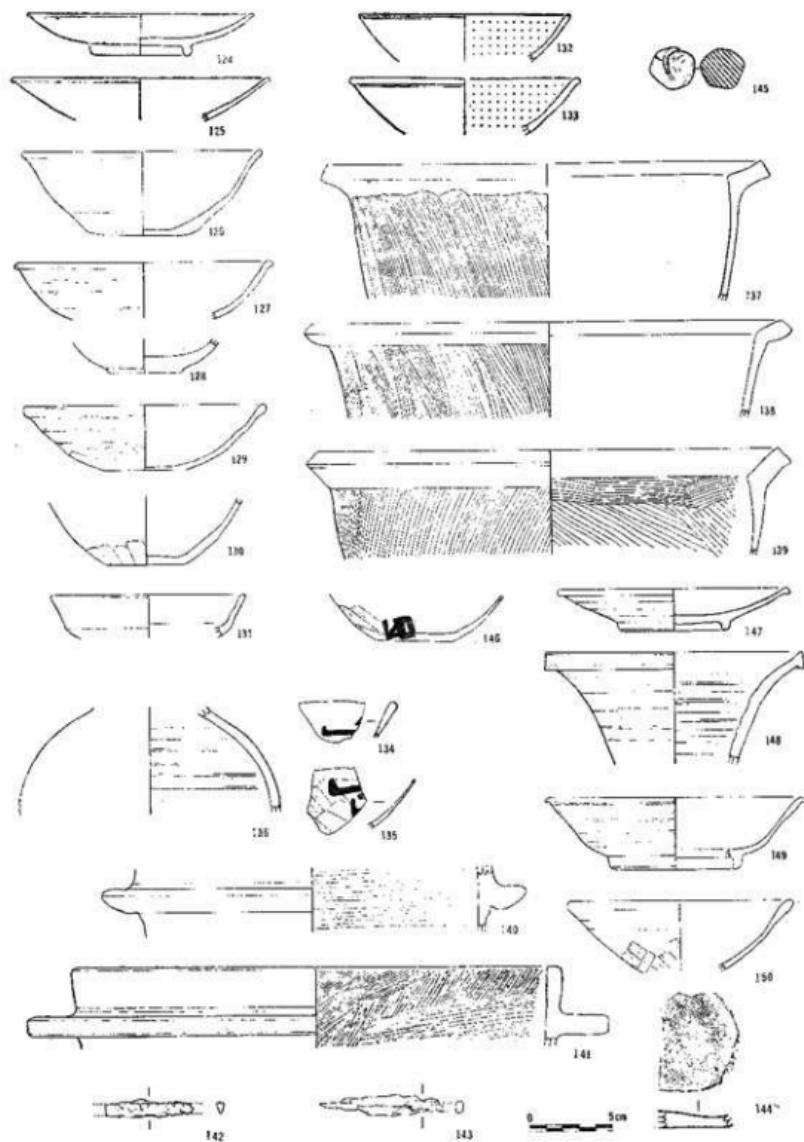
第41圖 上平出遺跡1H(66~71) 2H(72~79)  
3H(80) 住居出土遺物



第42図 上平山遺跡 3H(81~92) 4H(93~103) 出土遺物



第43圖 上平出遺跡 5 H住居出土遺物



第44図 上平出遺跡 8H(124~145) 9H(146~150) 住居出土遺物

### III ま と め

八ヶ岳山麓は華麗な縄文時代中期の文化が栄えたことで有名であり、様々な研究課題も提出している。故藤森栄一氏が八ヶ岳西南麓の原始文化解明に努められ、大著「井戸尻」を始め数百論文という業績をあげられたのに比べ、本県にあつてはこの地域の本格的な調査がようやく開始されたにすぎない。かつて仁科義雄・井出佐重・三枝善衛・山本寿々雄諸氏が調査し、報告された北巨摩郡内の遺跡がこの中央道関係埋蔵文化財緊急調査により、その実態を更に明確にすることができればと念じている。

今回調査した小沢町中原遺跡、上平山遺跡は長野県富士見町と號する八ヶ岳西南麓標高950m前後の丘陵上に立地する大規模な縄文及び平安時代の集落跡で、中央道建設予定地内にいづれも遺跡北東部が含まれている。両遺跡は古くより研究者の間に知られており(1)路線に含まれない地域も相当残っている。

まず発見された遺構を概観すると、中原遺跡では縄文時代中期住居跡9軒、縄文後期住居跡1軒、平安時代住居跡3軒、土壙26個、配石遺構1個。上平山遺跡では縄文中期住居跡2軒、後期住居跡(一部敷石)1軒、平安時代住居7軒、高床造構1軒、土壙15個、配石遺構1個がある。

縄文時代の中原遺跡はB地区の東群3、4、5、10J住居と、D地区の7、8、9、11、12、13J住居の西群とに大別できる。東群、西群の間は約100mあり、この間に土塹がA地区に1個あるだけで、縄文時代に属する遺構は見られない。ただA地区中央にある幅6~10mの溝中に転石凹石、打製石斧、黒麻石、土器片が多量に発見されたことから、後世の開墾によって浅い住居が全て破壊されてしまつたのではないかと考えられる。A地区的表土が1~1.5cmで、第2層のロームはかたくしまつていてことや、表土中から発見される遺物が若干少量で、ブルドーザーの様な機械で地表が遺構ごと削平されたものであろう。

東群3、4、5、10Jの住居のうち5Jは単独で、入口部に曾利V式の一括土器を出土させ、3Jは同形式を覆土より、また、4Jは覆土よりIV式を出土させていることから、重複順序を4J→3J→10Jとしておく。西群は前述住居のうち12Jが後期に属し、埋甕炉に堀ノ内式土器がある。12号住居は8号を張り(張り床発見せず)8号は入口部に正位の曾利IV式埋甕がある。7号は覆土遺物より曾利I~II式と推定(2)できるが、13号は遺物がなく平地住居で時期決定は困難である。9、11住居は重複しているが、11号住居は炉のみで、その炉もロームより浮いており、9号は平地住居で遺物からの時期決定は困難である。土塹について見ると土器片、石錐、打製石斧、凹石等が若干あり、岡谷市後田原遺跡例(3)からも蓋摸の仮説を考えてゆきたい。唯、中原遺跡の土塹はB、D地区といった住居と近接した地区であり、住居跡とも切り合うものが多いので貯蔵穴説を否定することはできない。B1号土塹は大型埋甕をもつ土塹で、曾利IV式圓形土器の口辺部、胴部上半、下半のそれぞれの大破片を使用して円形に組み合わせてある。屋外埋甕が単に口辺部や底部を欠いたものだけでなく、こうした破片組み合せ例もあることを記憶しておきたい。配石遺構は諸例(4)と同様に遺構集中地帯から離れ、石組中より凹石、土器片等を出土させる。土器は曾利V式で石組下の土塹はロームを浅く掘りくぼめたものであるが、成人1人が横たわるに丁度良いのも意味がある。

上平山遺跡の縄文時代住居は当初推定したよりも少なく6、7、10号の3軒で、6号、10号は

炉のみを残す平地住居で、7号は敷石施設を一部炉北側にもち、縄文後期に属する。6号は型土より骨利V式の土器が見られるが、10号は遺物がほとんど存在しない。後期7号住居は石剣破片の他、堀ノ内式～加曾利B式の土器があり、図示してはいないが、注口部破片もある。上平出遺跡の縄文時代に於ける特徴は、中期初頭の上模群の存在である。半截竹管による諸施文を頭部から口縁に集中させ、胸部下半は半截竹管平行沈縫懸垂文により無文部を四区画する一括土器を土壤内に横倒させている。武藤雄六氏の教示にれば、この特徴は曾利遺跡、梨久保遺跡例と類似しており、時期を九兵衛尾根II式とする(6)のが適当であろう。ただ九兵衛尾根II式そのものではなく、同時期唐沢式と類似している。九兵衛尾根II式が「器形一深鉢、浅鉢など折りかえし口縁、張り出し底。焼成一濃褐色、ガサツとした燒。施文一同工式の施文構成が簡約化されていく。素文部増大、連続爪形文、並行弦線文や復活、三角連續文も残存」(6)とし、宮坂光昭氏は1965年、梨久保遺跡調査報告(7)で藤森、武藤氏と同様の基盤に立ち、九兵衛尾根II式並行に第10類神殿式、第1類唐沢式を相当させている。ただ疑問は、神殿式=平出第3類Aと把えているのに対し、戸沢は前掲岡谷市後田原遺跡の報告で、梨久保→後田原(平出第3類A)=新道式と把えている。平出3類Aをメルクマールとして考えた場合、その編年的位置が不明確で、著しく解釈するなら九兵衛尾根II式へ新道式にまで至るということか。上平出遺跡出土一括土器58、62、63は唐沢遺跡出土遺物(8)に類似しながらも平出3類Aを伴出しない事実は、唐沢式に平出3類Aが伴わないか、あるいは土模という小造構の為含まれないのか、地域的制限によるものか今後の資料をまたねばならない。(9)

中期初頭の住居の多くが平地住居、あるいは黒色土中に存在し、プランが把えにくい事実(9)からすると、上平出遺跡の中央農道北側にある遺物包含層中の焼土や転石がこれを示していたのかもしれないが、ブルドーザーによる削平がかつて行なわれた為、不明瞭となつた。

この2遺跡は当初相当の縄文時代集落跡が発見されたと考えていた訳であるが、残念ながら良好な結果を得られなかつた。唯、縄文中期集落論を語る場合、單一遺跡内の諸現象のみならず、近接する遺跡との同時性あるいは交互時代性について考えてゆく必要があると考える。尖石、与助尾根例、茅野和田東西遺跡例と同様に、中原遺跡南西台地には宗高遺跡(中期)、上平出遺跡北西台地に中学校々庭遺跡がそれぞれ河川を挟み隣接している。宗高遺跡は未調査(1)、小沢沢中学校々庭遺跡では破壊されてしまつたが曾利期の遺物が中学校に保管してあり、中原、上平出遺跡とはほぼ同時期に營まれた集落と見ることができる。このほぼ同時期の2遺跡を単に分村(10)と語ることはできないであろう。何故なら一時期に一集落台地内が過密となることはないであろうし、狩猟採集生活に於て隣接する台地への分村は経済生活が同じ領域内で行なわれるかぎり、分村の必要性は薄いものである。そこで推論ではあるが、次の様に考えられないであろうか。

近接する2集落は1領域を交互に管理する一共同体ではないか。茅野和田東西遺跡の住居数変遷はその事を物語ついている(11)。A領域動植物増加率(1年)をXとするとき収穫量Yは $X \geq Y$ でなければならぬ。しかるに、集団aの増加は常にXに近付こうとするし、Xは自然条件の変化により少なくなることも多々ありうる。従つて $X \geq Y$ は不定期に $X \leq Y$ となり、集団aの生計を骨かし、遂にはA領域からの移動を余儀無くさせたであろう。a集団の去つたA領域は空白地とはならずa集団と同族の、a集団より人口の少ないb集団によつて管理される。b集団は $X \geq Y$ ではなく、 $X > Y$ の収穫によつて生計できる集団であり、 $X > Y$ の生産活動によつてXの増加を計り、減少したX量をa集団が維持できる量に増す役目をもつている。中期中葉から特に自然環境の悪化に向いつつあつた末葉曾利

期はこうした領域の管理システムによって文化を維持していたと考えたい。しかし、中期終末期に至り、気候の寒冷化現象から動植物相の変化、収穫物の減少化は、この管理システムをも破壊し、八ヶ岳山麓のさしもの文化が崩壊し、後期へと移り変つたものであろう。

平安時代の遺構は、中原遺跡でA地区中央より1H、B地区中央南より2H、同北東6H住居が発見され、いづれもカマドを東壁にもつて周溝をめぐらしている。上平出遺跡と比べると散村といえる。遺物も灰釉陶器が極少で、内黒土師器が比較的多い。長野県諏訪郡の影響が強いのであろう。

上平出遺跡は40m×40mの範囲に住居7軒、高床遺構1があり、1H、5H、9Hは重複している。1Hは灰釉陶器を出土せず、土師器と須恵器であり、重複の最も古いものであり、5Hが9Hを張り床しているところから、1H→9H→5Hの切り合い関係が求められる。5Hは一辺6m、9Hは5.5mと他の平安時代住居が一般的に3~4mであるのに比べて大きい。9Hは煙柱穴を各コーナーに1本、一辺中央に2本づつ計12本あり、住居内にも數本ある構造的に立派な住居である。5Hは柱穴こそ貧弱であるが東壁に巨大な石組カマドがあり灰釉耳皿、有段皿をカマドより出土する。2H住居は5H東南にあり、鐵製品を多く出土した。土井義夫氏が指摘しているように9世紀(平安初期)に於ける有力家父長層への開墾用具の鎌、鍬先の集中化は、「一般農民が生産手段の生産を意味する開墾や施肥工事を行なうことができず、常に再生産は脅かされ不安定であつた。それ故に(中略)この時期においても集落として1箇所にまとまつて生活せざるを得なかつた」<sup>14</sup>ことなのか、開墾用具の私的所有の証拠であるのか疎遠はできないが、事実として、鍬先、鍬、切出形鉄製品が出土し、他住居出土鐵製品を量・質ともに上回る。もし土井氏の論に従うとするなら、有力家父長層が居住した5H、9H住居と2H鐵器所有住居の関係を重視しなければならないであろう。更に、平安時代の崩壊が莊園制の発達による地方豪族の強大化によるものとされるなら、強大化こそ生産地の拡大であり、山中まで開墾した鎌、鍬等の生産手段の集中化によらなければならない。甲斐源氏が言う様に「莊園機構から何の制約も受けない自由な民」とすることとは、上平出遺跡や中原遺跡の場合否定すべきであろう。

なお、出土遺物からして平安時代後半に位置するこの遺跡が存在した10~11世紀に関する文献的なものはどうであろうか。仁明天皇の承和二年(835)に巨摩郡馬相野の空閑地500町歩を一品式部卿源親王に賜つたことが「統日本後紀」に見え、冷泉天皇安和2年(969)に「山城國法勝院領目録」に市河荘が記され、それ以降中世にかけての諸文献に散見する主なものは、井上、牧、山前、福積、大八幡、一宮、小松、八代、志摩、塩戸、逸見、大井、布施、甘利、鎌田、加加美、原小笠原、山小笠原、奈胡、大八幡、青島の諸荘が図中にある。その他官牧、後院牧など平安末期には私牧化してゆく過程がある。八ヶ岳山麓が甲斐源氏によつて押えられたのは11世紀末から12世紀初頭にかけてで、源清光は天永元年(1110)に生まれ鹽川の上流逸見庄に根拠をおいた。この周辺地帯は官牧相前牧に私牧もあり、信州の佐久や諏訪に通じる交通上の要衝でもあり、権門家の莊園となつていたことからも、父義清ははやくから勢力を伸し、北巨摩郡大泉村谷戸城を根拠としていたのであろう<sup>15</sup>。甲斐源氏の被支配層がこれらの上平出、中原遺跡に居住した平安時代の人々なのだろうか。

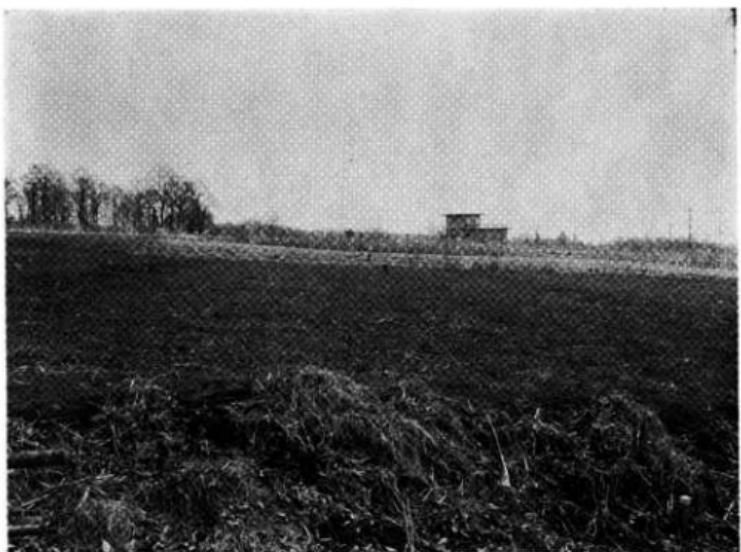
土師器、須恵器、灰釉陶器等の出土遺物について浅学であり多くを語ることができないが、菊島美夫氏の提唱する仰向分式に含まれると解する。しかし、上平出1H住居の出土遺物の様に、灰釉を伴出せず、胸部ヘラ削りの甕、断面台形の壺等のセトは、切り合い関係からしても国分式を細分

するに充分な資料と考える。灰釉陶器を伴うものについて今後灰釉カマ編年によらざるを得ないの  
で、詳細な報告は後日とした。

なお、文末ではあるが日大先史学研究会諸氏、地元婦人会の皆様には高冷地のうえに冬期間という  
悪条件にもかかわらず、調査を押し進めていただきましたことに深く感謝いたします。

### (註)

- (1) 北近畿郡教育会郷土研究部、先史原史時代調査第一輯・昭和7年  
（利義男・甲斐の考古学 昭和6年第一集・昭和8年第二集）  
山本寿々雄・甲斐考古資料集・山梨県の考古学
- (2) 長方形大型炉は付利Ⅰが最も多く、略曾利Ⅱ期に当る。又、出土器物の実利図が少ないが、大型土器底部、縄文  
施土器から考察するに、曾利Ⅱ式以降のものは大型土器底部が小さくなる傾向が見られるのに比べるとⅢ式位、あ  
るいはⅢa式かとも考える。Ⅱ、Ⅲa式については、長崎元広氏 1973【信濃25-4.5】に井戸尻編年への疑  
問として問題提起されているので、氏の再検討を望む。
- (3) 岐阜市文化財調査報告書3・後田原遺跡、土器は主として前期末葉～中期初頭のものである。
- (4) 尖石、茅野和田遺跡例より規模は小さいが、諸特徴を同一とする。
- (5) 49.1、書簡による教示を受けた。
- (6) 藤森栄一「新版日本考古学講座3」
- (7) 長野県考古学会誌3号
- (8) 信濃考古総観（下巻）Pig49.9.1C
- (9) 武藤氏の教示によれば平出3類Aは非常に長時間作成使用された土器で、唐沢式に伴っても良いが、遺物自体が  
少量で発見数のムラがあるとのことである。
- (10) 宮坂光昭「柴久保遺跡の汚泥壳」1965、長野県考古学会誌3号
- (11) 昭和47年3月、分布調査の報告によると、曾利Ⅱ～Ⅲ式を見ることができる。
- (12) 尖石に対して与助尾根を、茅野和田東遺跡に対して西遺跡を、分村とさえられない。
- (13) 長崎元広 1973 [(2)と同様] 紙圖4.6
- (14) 七井美夫・物質文化18、「関東地方における住居址出土の鉄製農具について」
- (15) 桐原健、「平安期にみられる山地沿住人の遺跡」信濃20-4
- (16) 磯貝正義、飯田文弥著「山梨県の歴史」県史シリーズ19参照
- (17) 菊島光夫、1973「山梨県における土師器編年」甲斐伝埋没条理遺構等の調査



1. 中原遺跡全景



2. 1H 住居址



3. 2H 住居址



4. 3J 住居址



5. 4 J 住居址



6. 5 J 住居址



7. 6H 住居址



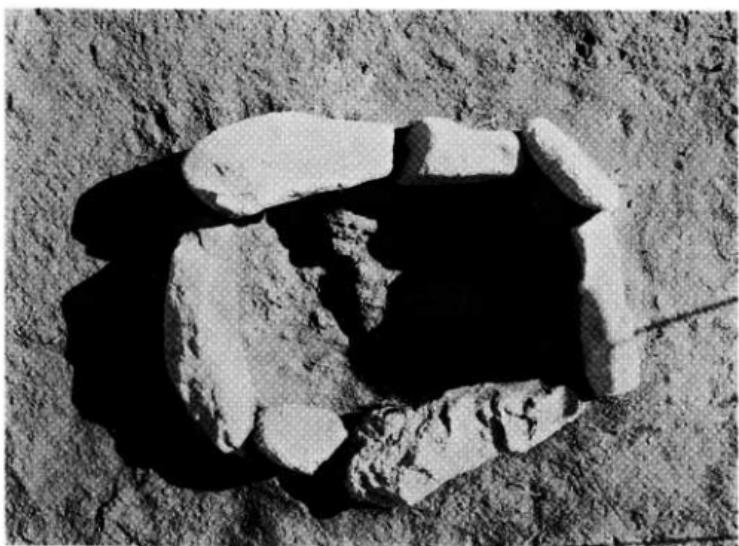
8. 8J 住居址



9. 10J 住居址



10. 13J 住居址



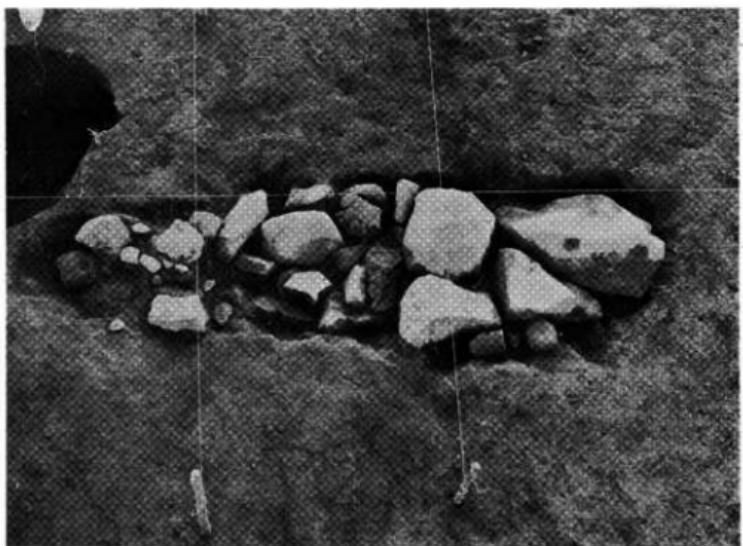
11. 7J 住居石組炉



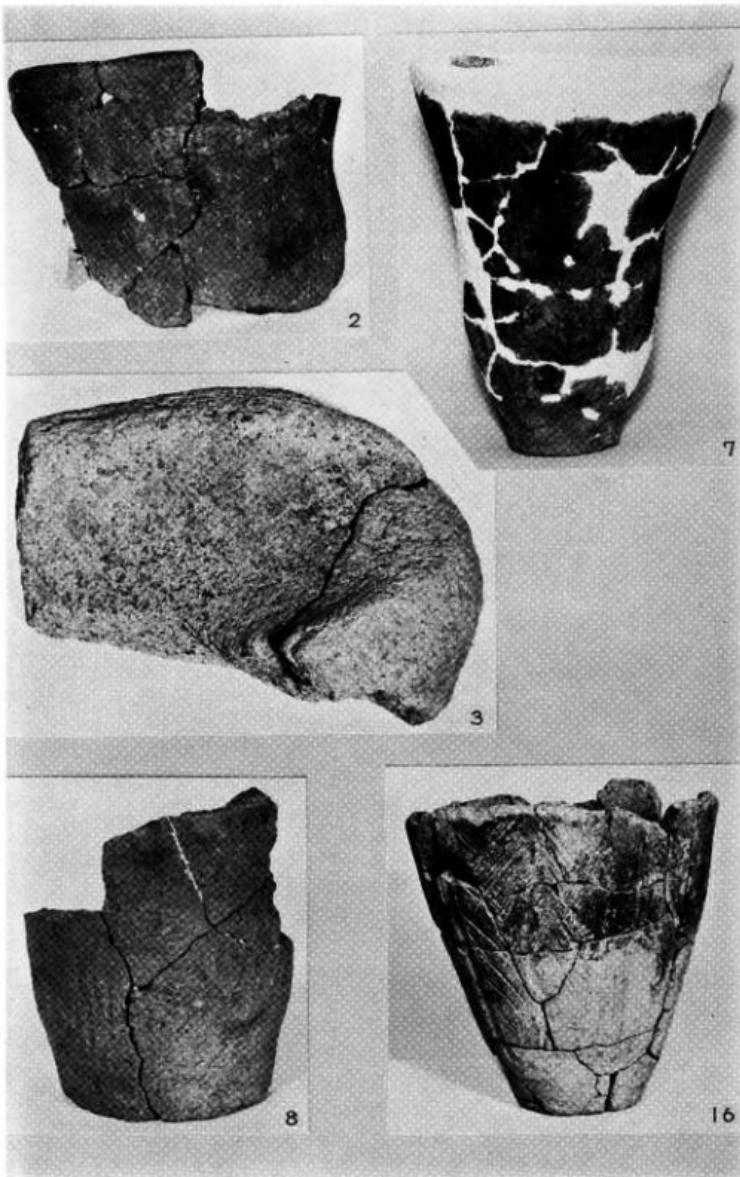
12. 2H 住居石組 カマ F

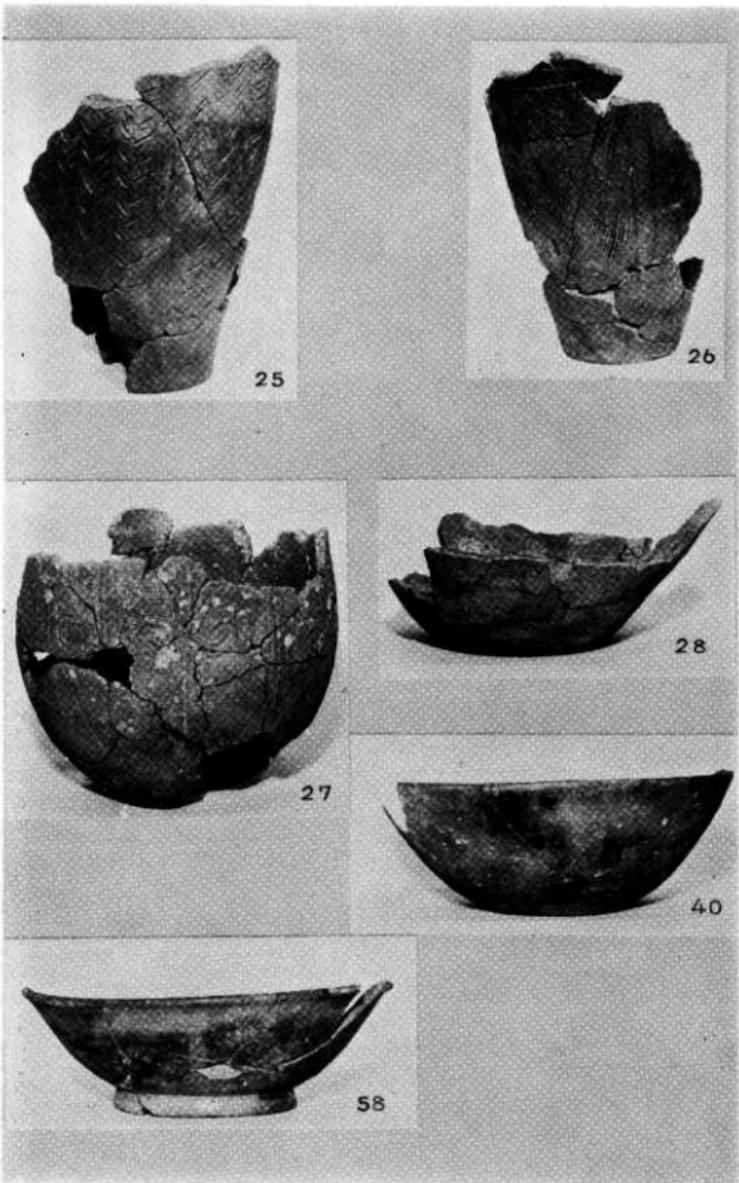


13. 5J 住居埋甃



14. 配石遺構







17. 上平出遺跡全景



18. 1H 住居址



19. 2 H 住居址



20. 3 H 住居 (方形プラン) 6 J (手前縄文住居)



21. 4H 住居址



22. 5H住居・9H住居(手前)



23. 7 J 住居址



24. 8 H 住居址



25. 配石遺構



26. 第14号土壤出土遺物



27. 2号住居址 スキ頂出土状態



28. 2号住居址 カマ出土状態



29

5H住居カマド



30

5H住居カマド内  
灰陶器出土状態



31

8H住居址カマド



32

9H住居址カマ下  
内出土灰釉陶器



33

平出湧水



34

調査参加者



62



58



57

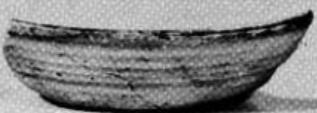


29





68



69



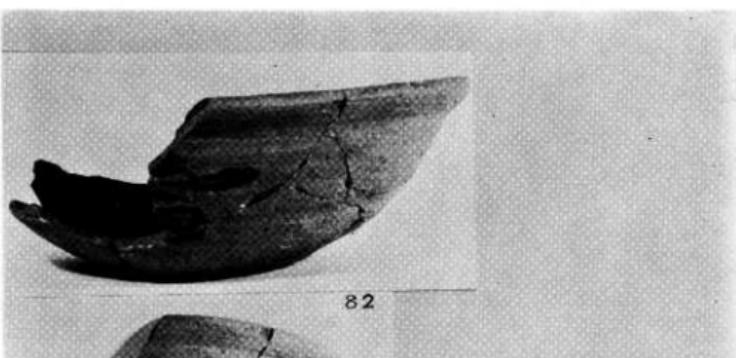
70



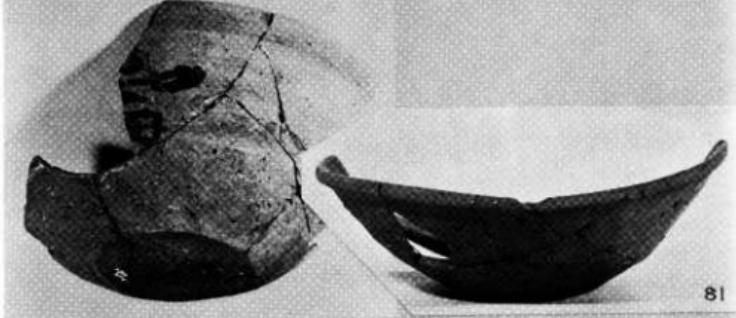
75



67



82



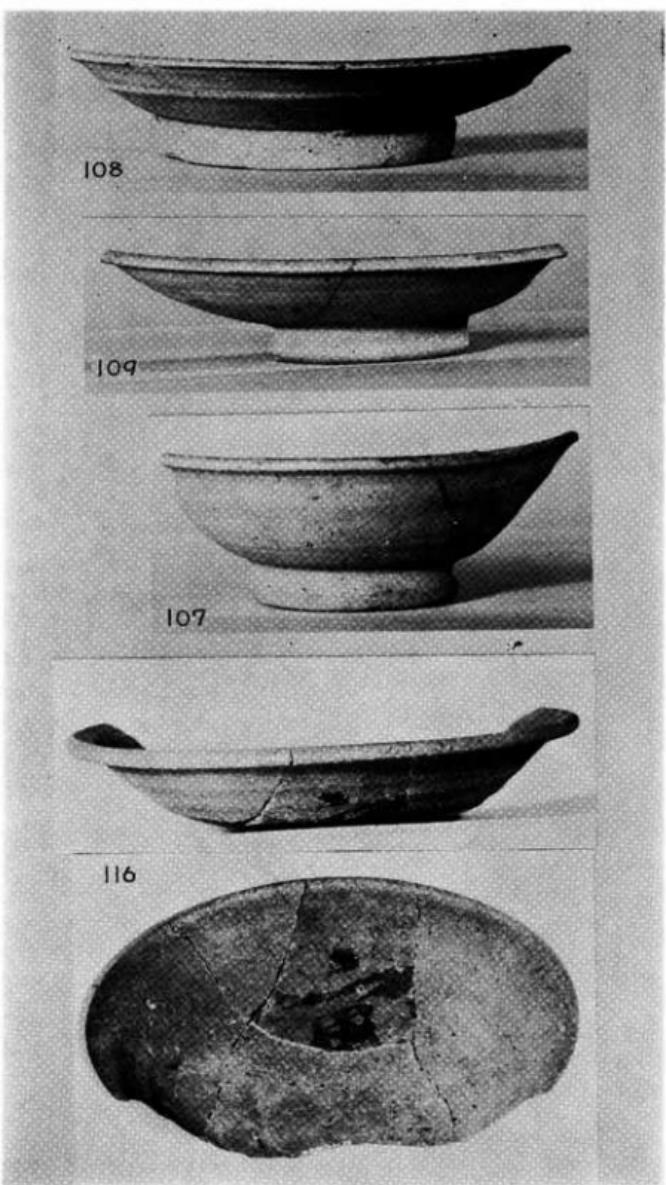
81

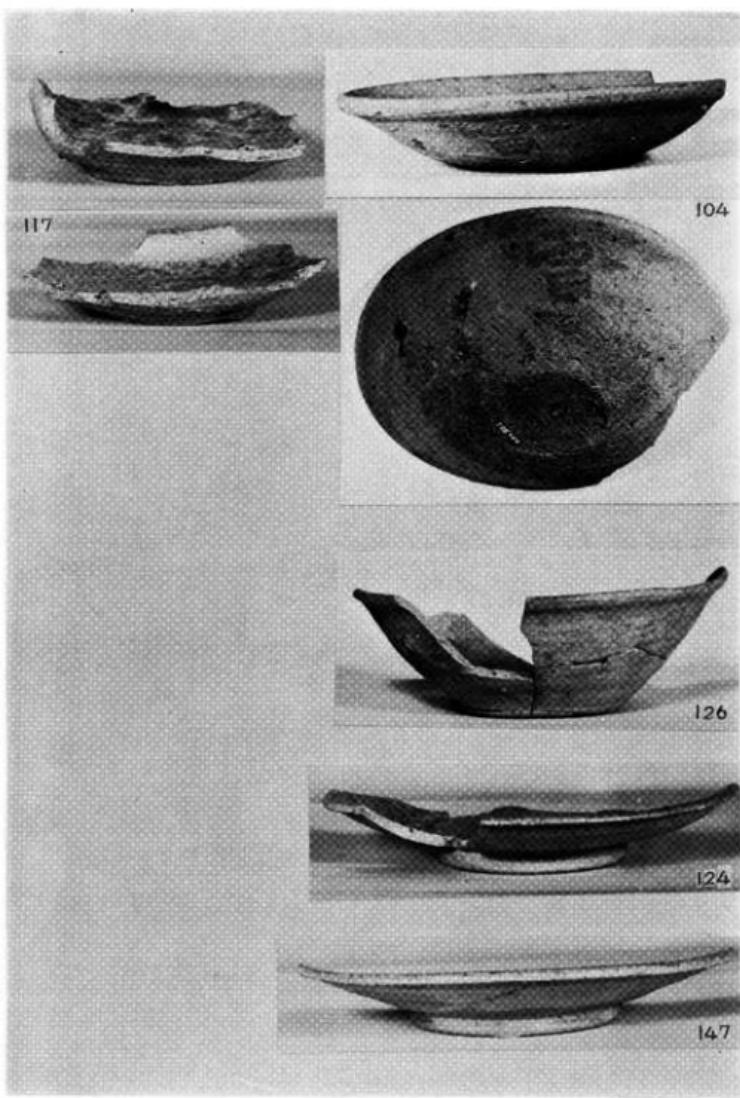


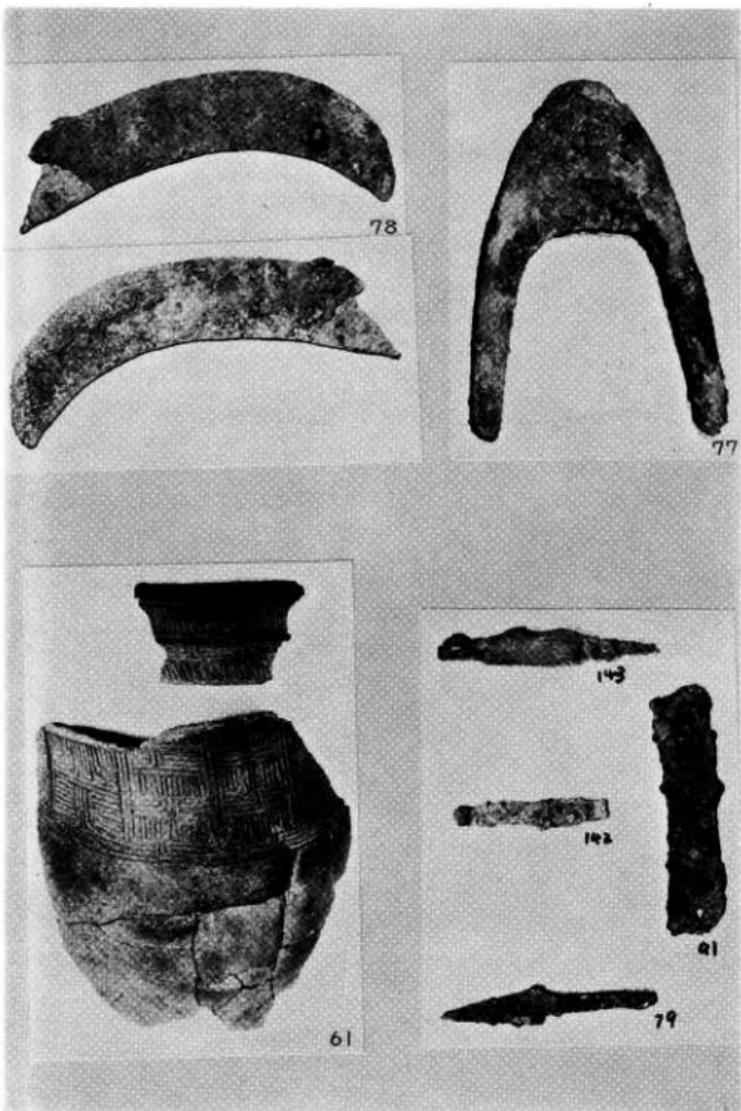
103



93







昭和49年3月25日印刷  
昭和49年3月31日発行

山梨県中央道埋蔵文化財  
包 藏 地 発 挖 調 査 報 告 書  
—北巨摩郡小瀬沢町地内—

発行所 日本道路公団東京建設局  
山梨県教育委員会  
印刷所 梶 峠 南 堂 印 刷 所

